あまさきみりと
illust. フライ

キミの忘れかたを教えて 2

I'm still thinking about you.

角川スニーカー文庫


Character
豊臣正清
三雲雛子
エミリィ・スターリング
松本依夜莉
松本修
桐山鞘音
リーゼロッテ・スターリング


「いなくならないでください。
お願いだから……」
キミの
忘れかたを
教えて

キミの忘れかたを教えて2

あまさきみりと

角川スニーカー文庫

21431

本作品を示すサムネイルなどのイメージ画像は、再ダウンロード時に予告なく変更される場合があります。

本作品は縦書きでレイアウトされています。

また、ご覧になるリーディングシステムにより、表示の差が認められることがあります。

Contents

口絵・本文イラスト／フライ

口絵・本文デザイン／
百足屋ユウコ＋たにごめかぶと（ムシカゴグラフィクス）

Contents

プロローグ

十二月——宴会場の大きな窓から望める景色は、いつの間にか純白の結晶に覆われていた。先程までは積もっていなかったのだが、これから雪が降っていく前触れ。
緩やかに舞い降りる粉雪は表面を白く染め上げただけだが、この町で育った人なら、なんとなく思う。間もなく本格的な冬が訪れる、と。

「わーっ！　ホントにギター持ってるーっ！」

好意的な興味を隠さず、駆け寄ってくる子供や幼児。無数の子供たちで構築された輪の中心には、大きくて丸みを帯びた二足歩行の生物が君臨。
デフォルメされた円(つぶ)らな瞳、両頬から伸びた三本の長いヒゲ、肉球付きの短い手足……窮屈そうに背負っているのは、不似合いな特注のギターケース。頬(ほお)ずりしたら気持ち良さそうな純白の毛並みは、無遠慮な子供たちによって雑に撫(な)で回(まわ)されていた。
その二足歩行の生物は、いちいち仕草がぎこちない。無駄に右往左往したり、足の爪先を地面に擦(こす)って転びそうになったり。
やや離れた位置から眺めていた俺は、零(こぼ)れそうな笑いを押し殺している。不器用な動作が可愛(かわい)らしいし、所々のポンコツな言動が愉快すぎて。

「さやねっこーっ！　ギター弾いてーっ！」
無垢(むく)な子供からのリクエスト。大勢のギャラリーから『さやねっこ』と呼ばれている二頭身の物体が背負うギターケースは、ただのお飾りじゃない。
『――よく知ってるね～！　さやねっこはギターが上手(うま)いんだよぉ～！』
予定調和と言わんばかりに、イベント進行役の女性がマイクを通して促す。
さやねっこは背中のギターを取り出そうと、肉球が付いた短い両手を背中へ――
「……………」
ギターを取り出そうと、
「…………リーゼちゃん、ギター貸して」
ギターをケースから取り出せない。今の鞘(さや)……さやねっこの短くて太い腕では、背中に手が回らないのだ。たどたどしい仕草が見物人の心を擽(くすぐ)り、愛らしさの心境を抱かせる。
というか、普通に喋(しゃべ)るなよ。子供が困惑するだろ。
「さやねっこが喋った――っ!?」
子供たちは驚愕(きょうがく)の声をあげ、保護者の皆様は思わず失笑。
「この使い魔は操り人形(マリオネット)。リーゼの腹話術なノダ」
さやねっこの隣に佇(たたず)むゴスロリ少女がフォローするも、そんな背景はねぇよ。
指名されたゴスロリ少女が「リーゼの聖剣は、選ばれシ者シカ触れるコトさえできないノダ！　世界が崩壊してしマウ！」と喚(わめ)きつつ、さやねっこに自らのアコースティックギターを手渡す。当然ながら、世界は崩壊し

なかった。厚手のアウターを羽織った人々の笑顔に溢（あふ）れ、屋外の気温は十度前後ながらも暖房が効いた室内は結構暑い。

ここまでは（さやねっこが喋ったことを除いて）、ほぼ打ち合わせ通りの流れ。

挨拶代わりに、アコギを構えたさやねっこ。

ピンク色の肉球が可愛らしい左手でフィンガーボードを押さえ……られるわけはなく、五つの穴から五本指をしっかり突き出し――明らかに人間っぽい右指で摘まんだピックを弦に翳（かざ）す。子供の夢を壊しそうだが、さすがに指は出さないとギターは弾けない。

なーに、子供たちはさやねっこのビジュアルに気を取られ、こっそり〝変身前の指〟が突き出ている手元なんて注目していないだろうさ。

「……恐ろしく弾きにくい。これ脱いでいいの？」

こもった声で愚痴を漏らされるが、変身には脱ぐという概念がないのです。あと、さやねっこは人間界の言葉を知らないので、当たり前のように喋らないでください。

「……彩（いろ）づイタ景色が似合う操り人形（マリオネット）。裏腹な灰艶（はいえん）を持ち合わセタ君、残酷な光景が好きなノハ、夢の中で会エル廃人。私は人の心を求む操り人形（マリオネット）。無い物をねだる愚かナ玩具（おもちゃ）。そう言っているに違いないノダ」

まったく違うんですよ。ゴスロリ少女、デタラメな通訳を堂々とかます。

温かく見守っていた俺と進行役の女性は、頭を抱えたり苦笑いせざるを得ない。

「さやねっこ！　おもしろーい！」

「クセになるんだよなぁ。デザインは使い回しっぽいのが笑える」

それでも、俺たちの心配とは裏腹。聞こえてくるのは、ほとんどが好意的な感想だった。

幼い子供や保護者、宴会場の前を通りかかった人は好奇の眼差（まなざ）しを隠さなかったのだが、雑談をしていた大人が押し黙ったり、騒がしかった子供も口を噤（つぐ）んで体育座り。

さやねっこが簡易ステージに上がった瞬間、雰囲気が変わったのだ。言動が緩くてポンコツだった二頭身の着ぐるみが、洗練されたアーティストへと変貌したのだから。

数十人ほど集っていた見物客は、さやねっこに瞳を奪われる。見入ってくれるのは大歓迎だが、写真や動画を撮ってネットに拡散させてくれると嬉（うれ）しい。

旅名川（たびながわ）に来れば、こいつに会える。それを全国に宣伝してくれ。

『――披露してもらいましょう！　旅名川の公式ゆるキャラ、さやねっこのライブです！』

*****

三雲（みくも）旅館の大宴会場。畳張りの五十畳近い和室だが、昼間は誰も使わないため、地元の小規模なイベント会場や控室として貸し出されることも多い。旅名川温泉街での小規模イベントを終えた俺たちは、観客が去った宴会場にて暫（しば）しくつろいでいた。

「……すごく暑いの」

抜群の存在感を放つさやねっこが、広い空間にどっかりと居座る。業務用の空調がしっかり効いているため温かいし、その着ぐるみ姿では余計に暑いだろう。

「もう変身を解いていいぞ」

「……うん」

ネコを模した頭部が浮き上がり、ゆるキャラの変身が解除。
「……はあ」
深く息を吐（つ）いた鞘音（さやね）が、ひょっこりと顔を出す。額や頬を滴る透明な汗。しなやかで綺麗（きれい）な髪は毛先が濡（ぬ）れ、湿り気を帯びた光沢が妙に艶（なま）めかしい。思わず見惚（みほ）れてしまう。
「この中、すごく暑かった。動きにくいし……それに、喋っちゃダメとか大変よ」
「………………」
「……どうしてボケッとしてるの、ばか」
気を抜いていたら、胸元に着ぐるみの手で猫パンチされた。ぽこん、という擬音が似合いそうな軽いジャブだったけれど。
鞘音に見惚れていた、なんて恥ずかしくて言えないから、
「やっぱり着ぐるみ姿の鞘音って面白いな〜と思って」
浅はかな照れ隠し。
「……ばかにした顔、やめて」
茶化（ちゃか）されたと思ったのか、ご機嫌斜めの鞘音。
ぷくっと膨れる顔も、また可愛らしくて。
俺は事前に用意しておいたペットボトルの水を差し出し、受け取った鞘音が喉を爽快に鳴らしながら流し込む。鞘音の整ったビジュアルや滴る汗も相まって、清涼飲料水のＣＭかと思わせるほど様になっていた。まあ、これだけ発汗したら喉も渇くよな。

「身体（からだ）を冷やさないように汗は拭いておこう。ここで少し休んだら、今後のスケジュールもおさらいしておくか」

「……修（しゅう）、マネージャーっぽくなってきた」

「そ、そう？」

タオルを手渡すと、鞘音は顔面や首元の雫（しずく）を拭い取り、悪戯（いたずら）に口元を緩ませた。

「俺にできることって、これくらいしかないからさ。お節介だったか？」

「……ううん、本当に助かってるの。いつも……ありがとう」

鞘音みたいに大勢の人から賞賛されることはないけれど、鞘音に感謝されることが——なによりも嬉（うれ）しくて。

俺はついつい張り切ってしまうんだ。

「冬だから暑さ対策は必要ないと思ってたけど、ブロアファンを取り付けたほうが良さそうだな。次は冷却ベストなんかも着たほうがいいかもしれない」

変身アイテムの着ぐるみ内部は湿度が高い。こもった熱を放出させたり、身体を冷やす服装が今後は必要だろう。それが分かっただけでも収穫が多かった。

「……またやるの、これ？」

「え？　ゆるキャラグランプリで一位を獲得するまでだけど」

無言の猫パンチをもらう。

「冗談抜きで話すと、高いレベルでギターを弾ける二代目さやねっこを見つけるまでは、鞘音がやるしかないな。すぐには見つからないだろうけど」

「……別にギターが上手（うま）くなくてもいいと思う。ネコ、かわいい」

「いやいやいや、鞘音はゆるキャラ業界を舐(な)めている。日々、全国の市町村や自治体、個人までもがゆるキャラを生み出しては消えている。ご当地ゆるキャラが飽和しているこの戦国時代、普通のネコでは話題にもならないんだ。青森のリンゴみたいなネコのゆるキャラを知ってるか？　あれ、凄(すご)いんだぞ。ドラムのテクがえげつないんだぞ」

「……修、早口で何言ってるか分からない」

オタク特有の早口。

「ハナシは聞かせてモラッタ」

宴会場の入口にもたれ掛かったリーゼが、無駄に格好つけた表情でこちらを見据える。

この台詞(せりふ)、現実で言い放つ人が身近にいるんだなぁ。最高のタイミングで話題に介入しようとしていたからか、入口の陰からチラチラと様子を窺(うかが)っていたのは見えてたし。

「救世主(メシア)を探シテいるト。血で血を洗う聖戦を勝利に導く者を求めてイルのだロウ？」

「まったく話を聞いてないよね」

「相応(ふさわ)しい者がいるノダ、ココに！　救世主(メシア)ネーム　イズ　リーゼロッテ！」

小さな胸の前で十字を切る通訳……じゃなくて救世主(メシア)様。

俺が生温かい視線を送ると、リーゼが駆け寄ってきて――

「やるノダーっ！　リーゼもやるノダーっ！」

俺の背中にしがみ付き、小さい身体で揺すってくる駄々(だだ)っ子(こ)な救世主(メシア)。

まだ九歳の小学三年生。いくらギターが上手くても、精神年齢はお子ちゃまだということだ。手足をバタつかせ、年相応のワガママを撒き散らす。
「リーゼちゃんも着ぐるみに入りたいの？　一緒に入る？　狭くて暑いけど、わたしが抱き抱えてあげるから、ね？」
母性を発揮した鞘音さん、リーゼを背後から抱き抱えている問題。
二人羽織りじゃあるまいし、ゆるキャラに変身するのは一人で充分……というより、俺の背後にリーゼが抱き着き、リーゼの背後に鞘音が抱き着いている状況は、陽気に浮かれている家族みたいだった。
「あら〜、新婚の家族みたいだっちゃねぇ〜」
たまたま宴会場を通りかかった人からも、お言葉をいただく。家族みたいな雰囲気だということは、俺が旦那で鞘音が嫁……リーゼが子供という感じかな？
悪くない。むしろ最高だ。笑顔の絶えない家庭像を妄想して、勝手に微笑んでいる気持ち悪い男がいたら、それは松本修という ダメ人間です。
「三人ともお疲れさま〜。これ、差し入れ！」
イベントの後始末を終えた進行役の女性が遅れて登場し、俺たちへスチール缶のホットコーヒーを、リーゼには紙パックのコーヒー牛乳を手渡してくれた。
「うむ、ぐびぐび。喉が渇イテは聖戦がデキぬ」
甘ったるい後味が気に入ったリーゼは背筋を反らせながら、茶色い牛乳を飲み干す。
その幼い可愛さを眺めて「えへへ」と満足げに微笑む年上の女性……この人の正体を説明するとなると、記憶を少しだけ遡らなくてはならない。


第一章
話したいことがたくさんあるの

町興しイベントに参加した経緯は、三雲雛子という女性が大いに関係している。
今から一ヵ月くらい前――十一月の中旬。俺は春咲総合病院に入院していたのだが、術後の経過は良好だったため、病室にてパソコンを用いた仕事を熟していた。
自主レーベルのホームページ制作、名刺の制作、ＳＡＹＡＮＥ公式ファンクラブの設立、楽曲ダウンロード販売の準備など、早急に進めたい案件が山ほどあったからだ。
ＳＡＹＡＮＥは表舞台から姿を消したわけじゃない。大学を休学し、地元に帰っただけ……と言えば単純に聞こえるけど、前所属の大手レーベルとは天と地の差。
名刺やＳＮＳなどに記載された〝REMEMBER〟というのは、自主レーベルの名前だ。
すべてが始まった振り出し地点から〝再出発〟した俺たちは、実家が事務所みたいなもの。メディア媒体へのコネも無く、大規模なライブの予算もないという正真正銘のインディーズである。
ネットでは引退説も流れたものの、ＳＡＹＡＮＥがＳＮＳにて独立を報告すると『大人の事情に縛られず自由に活動する』という意図を感じ取った大多数のファンは祝福した。
やれることは限られるけど、やりたいことを鞘音と語りたい。ただ寝ている時間が勿体ない。放棄していた五年間を、一時間でも、一分でも、一秒でも、取り戻したい。
度々、見舞いに来た母さんに「大人しくしてろ、タコ！」と何度も叱られたが、面会時間を過ぎた後は、夜遅くまで作業する入院生活。
そんなある日――仕事用のアドレスに一通のメールが届く。
視界良好な右目を凝らし、内容を舐めるように確認する。スクロールした本文の最後、差出人の署名には【旅名川観光協会　三雲雛子】と記載されていた。

すぐに返信し、打ち合わせの日程を設定する。俺が入院していることを考慮した差出人は、面会時間に病院まで赴いてくれることに。

「どうも、こんにちは。松本修（まつもとしゅう）さん……ですか？　ずいぶんと若いんですね！」

一般病棟の面会可能なカフェスペース。自動販売機とテレビしかない場所で、俺と三雲さんは初めて顔を合わせる。テーブルを挟んで腰掛け、簡単な自己紹介をした。

お互い、初対面の印象は「予想より年齢が若かった」だった。メールのやり取りでは年齢の公開はしないし、田舎の観光協会は年配の人が多いイメージだから。

レディースのビジネススーツを着こなし、お洒落（しゃれ）なショートボブの髪型は明るそうな雰囲気に相性が抜群。しかも、どことない既視感が湧く。

年齢は二十七歳ということで、やはり三雲さんは年上の先輩だった。俺のほうから「タメ口でも大丈夫ですよ」と持ちかけると、向こうも快く応じてくれた。

「あれ……？　私とどこかで会ったことない？　子供の頃、正清（まさきよ）センパイとかエミリィセンパイとウチの温泉に来てなかった？」

「え……？　三雲って苗字（みょうじ）は……もしかして、三雲旅館の？」

「そうそう、私の実家！　学生だった頃は旅館（ウチ）の仕事を手伝ってたんだけど、よく来てた男の子に似てるなーと思って」

なるほど。当時はあまり面識なかったけど、旅館で頻繁に擦れ違ったり、トミさんとかエミ姉（ねえ）が三雲さんと喋（しゃべ）っていたから、記憶の片隅に残っていたのかもしれない。

それからの数分間は軽い地元トークを繰り広げ、すぐに打ち解けられた。お互いにトミさんやエミ姉と親交があるので、共通の話題が多かったのだ。

「昔の松本君はマセてたからさぁ～、エミリィセンパイのお尻を追っかけてばかりで！」

「その話題は勘弁してください……。当時の俺はただのエロガキだったんですよ……」

けらけらと思い出し笑いする三雲さん。

「そういえば、エミリィセンパイと女湯に入ってたこともあったよね!?」

「いやいや……俺がまだ低学年だったので、エミ姉からの提案で……ていうか！　この流れは俺に不利なのでやめましょう。早く本題に入りましょう」

「えー？　もっと懐かしいお話ししようよ？」

エミ姉系の過去話は、黒歴史の宝石箱になるからマジでやめてほしい……。

「年上のお姉さんにからかわれるのは……きらい？」

「きらい……！　とは言えないですけど！　どうせならエミ姉にからかわれたいです！」

耳元で艶(なま)めかしく囁(ささや)かれ、強く否定できない自分が情けない。露骨な前のめりで身体(からだ)を密着させてきたから、三雲さんの吐息や肌の感触まで伝わってくるし。

楽しいのか、後輩をからかうのが！　俺は嫌いじゃないけど！　年上は好きだもん！

彼女の話術に翻弄されていた俺は、うっかり忘れていた。いつも通りなら、そろそろ鞘音が面会に訪れる時間帯で――

「……修は年上の女性にからかわれるのが好きなのね」

背後から降ってきたのは、聞き覚えのありすぎる声。

ひんやりとした冷気すら漂ってきそうな鞘音が、ゴミを見る目で佇（たたず）んでいた。

「いやいや……！　俺の言う年上の女性はエミ姉だから……！　三雲さんには親しみやすい先輩が後輩を意味深に弄ぶ〜みたいなエロさはあるけど……そういうのじゃなくて！」

「……きもい。意味分からない」

必死に意味不明な弁解をする男は、確かに気持ち悪い。反省せねば。

「……松本君ってぇ、年上に弄ばれたいの？　そういう趣味があるんだっ」

妙に湿った囁きを耳元で解き放つ意地悪な先輩。いやね、俺は入院患者だから必然的に禁欲中なんですよ。それでも、まだまだ年頃な青年なんですよ。

ある意味では変な気分になるんで……本当に勘弁してほしい。

無言の鞘音から突き刺さる冷酷な眼差（まなざ）しもきっつい。どんな治療よりも痛いと思う。

「えへへっ！　冗談はこれくらいにして、本題に入りましょうか。アナタは、あのＳＡＹＡＮＥさん……だよね？」

「……そうですけど、あなたは誰ですか？」

「ちょうど良かった！　二人揃（そろ）って話を聞いてもらえたほうが好都合だし」

変装用の伊達（だて）メガネをかけていた鞘音だったが、三雲さんは正体を見破り、俺の隣へ着席するように促す。俺にコンタクトをとってきたのは、ＳＡＹＡＮＥに関する事柄。それくらいは想定の範囲内だった。

着席した鞘音に三雲さんは名刺を渡し、俺のときと同じように自己紹介。自信を詰め込んだ表情のまま、対面の俺たちを見据えて、

「ＳＡＹＡＮＥさんには、旅名川（たびながわ）の観光大使になってほしいんです」

そう、はっきりと告げる。

観光大使とは、任命された地域の宣伝活動を県内外で行う肩書きみたいなものであり、著名人が務めることが多い。人気が高ければ、宣伝効果や経済効果が期待できるからだ。

鞘音は旅名川唯一と言っても過言ではないスター。特に若者からは圧倒的な支持を受けている。やや驚いたように瞳を見開いた鞘音だったが、穏やかな声色で――

「……お断りします」

清々(すがすが)しいほどの即答。そして、明確なまでの拒否。

鞘音の言葉を聞いた瞬間、三雲さんは真っ白になり……テーブルに突っ伏す。

あからさまに落胆した様子で「切り札を連れて出直してくる……」と言い残し、ふらふらと撤退していった。

切り札、の意味はよく分からなかったが。

年上のお姉さんぶっていた割には、去り際の涙目が可愛(かわい)かったなぁ。

「どうして断ったんだ？　話題になりそうだし、おもしろい案件だと思ったけどな」

「……恥ずかしいの」

俯(うつむ)いた鞘音が、ぼそぼそと呟(つぶや)く。

「……大勢の前で喋るとか、愛想笑いでＰＲするとか……そういうのが苦手なの。ＭＣするだけでも恥ずかしいのに……笑顔で触れ合うとか、想像しただけで無理なの」

耳を澄まさないと聞き取れないくらいの声量。俺には分かる。気恥ずかしさのあまり、俯いて表情を隠していることを。心なしか、耳までほんのり赤い。

素の鞘音はいちいち男心を擽ってくるから、胸が熱く高鳴ってしまう。だから俺も、火照った顔色を誤魔化そうと、無意味に天井を見上げてしまう。

病室に戻るため、俺は立ち上がろうとするも……左の足腰に力が入らず、よろけそうになった身体を鞘音が咄嗟に支えてくれる。体温まで交わせる距離にキミがいて、それを実感させてくれるひと時だった。

「……ありがとう、鞘音」

「……無理しなくていい。修の身体が弱っているなら、わたしが支える」

優しげな声で、遠慮なく包み込んでくれる。

毎日、俺の名を呼んでくれる。

それだけでも、明日への活力が漲る単純な男だ。

「それじゃあ、手を握ってもらえるか？」

「それだけでいいの……？　肩を貸したほうが歩きやすいと思うし、車椅子を押すくらいならわたしもできるわ」

「できるだけ、自分の足で歩きたいんだ。俺はもう、退院後のことしか考えてないから」

「……分かった。わたしは修の手を握ってるね」

弱ってなんかいられない。悠長な時間は考えていない。

鞘音に左手を握られ、進行方向に導かれていく。小刻みに震えた足を、ゆっくりと交互に踏み出し続ける。

暗闇に迷い込んでも、鞘音がいれば未来に進んでいける。

今度は俺が鞘音の隣を歩いていくために、彼女を導いていくために、これからは頑張っていこうと思うんだ。

＊＊＊＊＊

翌日。三雲さんの捨て台詞（ぜりふ）が、やっと理解できる出来事が起きた。懲りずに面会に訪れたかと思いきや、向こうの人数が増えているではないか。

観光協会の職員ではない。もう十数年の付き合いというか……見知りすぎている顔馴染みが、三雲さんと共に並び立っている。

「お晩（ばん）でがすーっ！　按配（あんべえ）どうだぁー？」

カフェスペースに響くのは、やかましい男の訛（なま）った声。どうせ今日もヒップホップの爆音を鳴らした愛車で乗り付けたに違いない。

「修くん、体調はどうかなぁ？　ちゃんとご飯とか食べてる？」

こちらは天使。安心感をもたらす飾らない笑顔は、最高すぎる特効薬です。どこかの元ヤンに誑（たぶら）かされて結婚してしまったことを、未（いま）だに嘆いてもいいだろうか。

「救世主（メシア）ネーム　イズ　リーゼロッテ。ココに降臨セリ！　民衆よ、立ち上がるノダ！」

小さい救世主（メシア）様は、本日も凛々（りり）しくてお美しい。民衆としてでもいいから、革命の同志に加えて頂けませんかね。

トミさん一家が、仕事の合間を縫って見舞いに来ることは度々ある。

俺と鞘音は三雲さんの策略を察し、素直に慄(おのの)く。トミさん一家を連れてきたということは、これが自慢の切り札としか考えられない。トミさんたちの後輩であり、それなりに親交がある三雲さんが泣きついた……そんなところだろう。

「正清センパイは久しぶりに私と会えて嬉(うれ)しいんじゃないですか？　こんな美人の後輩に頼られて嬉しくない男子なんていないでしょ？」

「うっせーわ！　まったく嬉しくねーわ！　仕方なくだわ！」

とは言いつつ、トミさんはかなり嬉しそうだ。高揚した声色だけで伝わる。

「エミリィママぁああ……ちゅき。マジでちゅき……溢(あふ)れる母性で殺されるぅうう……」

「はいはい♪　大きい赤ちゃんだねぇ、困った困ったぁ」

今度はエミ姉に絡む三雲さん。エミ姉の胸元に顔を埋(うず)め（羨ましいんだけど）頬(ほお)ずりを繰り返していた。あの空間はめちゃくちゃ良い匂いがしそう。あそこに住みたいな。

「……修、変なこと考えてる。絶対に考えてる」

鞘音さんのジト目に刺し殺されそうなので、渦巻く煩悩を振り払った。

この強すぎる援軍は、俺と鞘音に利く。昔から逆らえないんだよ、この夫婦には。

「松本君、ＳＡＹＡＮＥさん。ちょっとだけお話ししよう♪」

満面の笑みを隠さない三雲さんにペースを握られたまま、俺たちは交渉のテーブルに着く。彼女は様々な書類を提示してくれるが、大体は昨日と同じような話題だった。

「ＳＡＹＡＮＥさんが観光大使になってくれたら、アナタたちの活動をバックアップできると思うよ。コネクションの面でも資金の面でもね！」

「なるほど。俺たちにとっては魅力的なメリットが多いですね」

俺は一応ながらレーベルの代表になったので、企画の詳細を念入りに確認していく。正直、俺はコネも資金も皆無に等しいため、観光協会の援助は欲しいのが本音。

その代わり、旅名川のＰＲ活動という仕事も増える。鞘音が嫌がる部分はここだ。

「おもしろそうだっちゃなぁ！　やろうぜやろうぜ～っ！」

小学生のように無邪気なトミさん。ノリと勢いだけで生きてるから羨ましい。

「正清さんが頼まれたわけじゃないでしょ～。鞘音ちゃんは乗り気じゃないみたいだし、無理にやらせるわけにもいかないんじゃないかなぁ」

「ノリで何とかなるべ？　地方でいっぱい遊んで、地方の美味(うま)い食いもんをいっぱい食えそうじゃん？　俺の舎弟として育った鞘音なら分かってくれると思うんだげっども」

「もぉ～、相変わらず大きな小学生なんだねぇ。鞘音ちゃんはもう、大人の女性になったんだよぉ？　田舎の祭りで遊ぶだけのお仕事じゃないんだからぁ」

「……エミリィさん、このバカ清にもっと言ってやってください。こいつ、周りの人が自分と同じ頭脳レベルだと思ってるんです。あと、舎弟になんてなってないから、ばーか」

「バカは処刑されないイト治らないノダ。始末するベシ」

女性チームから大バッシングを浴びたトミさん、めっちゃ気の毒で笑う。

「修ーっ！　俺の一番弟子として言い返してくれーっ！　俺はもうダメだーっ！」

なっさけねぇ！　俺に泣きついてきやがった！

「個人的な意見としては、鞘音に観光大使として活動して欲しいと思ってます。少しでも旅名川に還元していきたいというのは、レーベルの方針とも一致するので」

「お前はまともなこと言うなよーっ！　俺だけが頭悪く見えるべや！」
「トミさんが言い返せって言ったんでしょ！」
今までトミさんの生き様を目標にしてきたけど、バカになってはいけないなって思いました（二十歳男性・自営業見習い）。
「こちらからの条件としては、鞘音がメインのイベントを企画してほしいと思っています。鞘音の知名度なら旅名川のアピールにもなるし、利害は一致するのではないかと」
俺からも、交渉のテーブルに着くための最低条件を提示。ただの小僧が生意気だと卑下はしない。レーベルの代表として、所属アーティストを最大限に尊重した条件を相手から引き出すのも仕事の一つ。従業員は俺一人。目立たなくてもまったく構わない。鞘音に気持ち良く歌ってもらうため、縁の下の力持ちが奔走してみせよう。
「分かった。もし引き受けていただけたときは、それなりのパフォーマンスができるような企画を作り、企画会議で絶対に通すことを約束するね！」
そのための場所や予算は捻り出してくれると言う。
結構な本気度が、やや強めの語気を介して伝わってきた。
「ちまちましたイベントを惰性で続けていても、町は衰退していく一方なのよ。観光協会にとって、ＳＡＹＡＮＥさんは町興しの希望……タッグを組んでくれるなら、できる限りのバックアップを期待してくれていいからさ！」
期待感を込めて畳み掛けてくる三雲さんは、イエスを引き出すためのトドメと言わんばかりに、切り札のエミ姉へと横目で合図を送った。

「本人の意思を尊重したいけど、ワタシはいろんな鞘音ちゃんを見てみたいなぁ。修くんが作るレーベルの宣伝にもなるし、観光協会とタッグを組むのが効率的だと思うよぉ」

全く悪意のないエミ姉の言葉が、鞘音の凝り固まった意思を柔軟に解いていく。孤高の野良猫気質（かたぎ）な鞘音も、エミ姉の前では借りてきた飼い猫になってしまうのだ！

その証拠に、借りてきた猫は「うぅ……」と唸（うな）り、眉をひそめた渋い表情を晒（さら）している。

「カンコウタイシ！　それは聖戦の前触レ……救世主（メシア）ネームイズ　カンコウタイシ！」

リーゼも興味津々らしく、揺さぶられるのは鞘音のメンタル。「……リーゼちゃんが帯同してくれるのは幸せかも」と、ロリ山さんの欲望が漏れているのはさておき。

「やっぺしやっぺし〜っ！　がははっ！」

「やっぺやっぺ〜っ！　えへへっ！」

トミさんと三雲さんは肩を組んで「やろうぜやろうぜ！」みたいなことを煽（あお）ってる。

仲の良い兄妹（きょうだい）感が半端ない。

「グラフとか数字を見てもらえれば分かりやすいと思うけど、旅名川の人口とか観光客数は年々減ってきてる。数年前のゆるキャラブームに乗って〝たびねっこ〟を生み出したのはいいものの、個性が薄かったらしくて認知度も低かったっていうかさ」

「あー……そんなのありましたね。すぐ消えたイメージしかないです」

「三雲旅館（ウチ）に泊まるお客さんが少ないのは、なんとなーく知ってるでしょ？　他の旅館や近所のドライブインだって、業績好調というわけじゃ絶対にない。五年後に健在しているかだって断言できないよ」

三雲さんが提示した観光関連の書類。グラフと数字は年々右肩下がりで、頼みの綱である宿泊業や飲食業も倒産が増加。ゆるキャラを投入した数年前も効果はなく……むしろ、貴重な予算の無駄遣いでしかなかった。

中学の頃、たびねっことかいう猫のゆるキャラがいたけど、地元の駅前とかローカル番組で数回目撃した後、人知れず消えた気がする。

「そんで、私が入社した一年後くらいから、ＳＡＹＡＮＥさんには目を付けていたの。高校生で華々しいデビューを飾った子が旅名川出身……しかも、旅名川から再スタートっていう情報が入れば、やっぱり期待しちゃうのよね」

三雲さんの目つきが硬く締まり、鞘音を中心にした企画書を突き付け、再度強調した。

「せめて、今残っている活気は守っていきたい。私も旅名川が好きだから……地元を賑やかにしていく素敵な仕事を、アナタと……アナタたちとやりたい！」

まずは鞘音をしっかりと見据え、俺のほうにも切望の眼差しを送る三雲さん。

心底困りきった鞘音も、隣に座っていた俺に視線を移す。

「修は……どうしたい？　わたしにどうしてほしいの？」

期待と戸惑いを交錯させた瞳で、俺の見解を欲した。

「さっき言った通り、レーベルとしては応援したい。でも、ただの松本修は鞘音の意思を尊重する。二人揃って楽しめる仕事しか受けるつもりはないよ」

「……ごめん。わたしは演奏したり歌う以外、どうすればいいのか分からなくて……。期待されているのは伝わるんだけど……それに応える自信が無いの」

鞘音は声を震わせながら、拳を強く握りしめていた。貢献したい気持ちはあるけど、不器用な部分に自信が持てず、露呈するのが耐えられない。かなり複雑な心境なんだろう。

「申し訳ありません。光栄なお話ですが、観光大使の件は辞退させていただきます」

鞘音をマネジメントする者として、正式に断りを入れる。

俺たちが抱く等身大の夢は、楽しく笑い合いながら生きていくこと。

二人がやりたいことしかやらない。自分勝手だと軽蔑されても構わない。俺たちはもう、見えない何かに縛られ、選択肢を自ら狭めていくのはやめたんだ。

鞘音の迷いを考慮した三雲さんは書類を鞄（かばん）へと片付け、口角をやや上げた。

「えへへっ！　気にしないで！　こっちこそ、無茶（むちゃ）なお願いをしてしまって申し訳ないっていうか……話を聞いてもらっただけでも感謝してる。ありがと！」

丁寧に頭を下げた三雲さんが、愛想笑いを振り撒（ま）きながら帰っていく。

去り際、トミさんに「今度、飲みにでも行かねぇ？　芋煮会イベントの打ち合わせとかするべ！」と声をかけられ「仕方ないですねぇ。正清センパイの奢（おご）りなら考えておきまーす」と返した笑顔だけは、まるで恋する乙女のように純情で。

実家の旅館ではなく、小規模な地元を盛り上げる仕事を選んだ——その理由が、ちょっとだけ気になった。

決裂した交渉だったが、アイディアを模索してみる。代案すら出せなかった自分に腹が立ち、無性に悔しかったから。〝REMEMBER〟の設立にあたり、鞘音に充実した活動をしてもらえる道筋を作るのは俺の仕事。俺だけに与えられた光栄な使命なのだ。

トミさん一家が帰ったあと、鞘音は面会時間の上限まで病室に付き添ってくれるのが日課になりつつあった。

エミ姉の光り輝いた蒼（あお）い瞳から察するに、空気を読んで二人きりを演出しているのだろう。あの人は恋愛に敏感だから、そういったフォローが巧みだ。

個室なので二人きり。鞘音はお喋（しゃべ）りするタイプじゃないから、静寂が多いけれど。

スマホに繋（つな）いだ一つのイヤホンを二人で使い、耳から抜けないように顔を近づけて、同じ音楽を聴いたりする時間。無駄に喋らなくても、なんとなく意思を感じ取れる。感情を共有できる。そんな距離感が、とても心地良い。

今ならアイディアが湧いてきそうだ。

歌詞用のノートにシャープペンを走らせる。文字ではなくイラストを描いては消して、書いては消してを繰り返す。記憶を頼りに描写してみるも、下手くそで再現できない。

絵心の無さを痛感しながら、思いついたアイディアをまとめてみた。

「……ふふっ」

突然、鞘音が口元を押さえて慎（つつ）ましく笑う。ちゃっかり、俺が描いていたノートを横から覗（のぞ）き見していたらしい。

「……どうしたの？　いきなりクマなんか描き始めて」

「クマじゃなくて、ネコなんだけど……」

「似てない。ネコっぽくないし、わたしが描いたほうがマシかも」

ディスられたのが地味にショックなんだが……。

根拠のない自信を覗かせた鞘音にペンとノートを手渡す。そういえば、イラストを描く鞘音はあまり印象にない。基本的に美術の授業はサボっていた問題児だったし。
そんなに絵心があるなら、やってもらおうじゃん。
「……はい、ネコ」
五分後、鞘音が掲げたページには……モコモコした毛むくじゃらの意味不明な生物が創造されていた。上手(うま)い下手というより、独特のセンスが凡人には理解できない。
「俺が描いたやつのほうが何倍も可愛(かわい)いじゃん！　こんなネコいないでしょ！」
「……はあ。負け惜しみはみっともないわね」
勝ち誇った溜息(ためいき)が腹立つので、俺が描いた絵を指さしながら反論すると、鞘音も謎の強気で言い返してくる。
くだらないやり取り。大して中身のない会話。
それが、どうしようもなく愉快で仕方がない。
「はいはーい、お邪魔すっぞー」
右手にビニール袋をぶら下げ、見舞いにやってきたのは母さん。日用品や消耗品を買ってきてくれるから、本当に助かっている。
仕事を早く切り上げて、面会時間が終わる前に来てくれる計らいも嬉(うれ)しい。
「今日はちょっと遅かったね。道路でも混んでたの？」
「いや……少し前に到着してたんだけどよ。お前らがイチャイチャしてるから、声かけづらかったっつーか」
「え……!?　ただ一緒に音楽聴いてたり、イラスト描いたりしてただけだよ!?」
「あー、本人どもはこういうの自覚してねーんだわ。楽しそうで羨ましいっすねぇ」

茶化したような呆れ笑いを溢す母さんと、お互いを見合って赤面しながら視線を逸らす俺たちの対比が凄まじい。中学時代と変わらない感覚だったけど……他人から指摘されないと自覚できないものなんだな。
「ちなみに、母さんはどっちのイラストが上手いと思う？」
ノートを開いて提示し、公平な第三者に判定を委ねると、
「はあ？　どっちも下手くそじゃねーか」
二人の幼馴染みは低レベルな争いをしていたらしい。
「鞘音ちゃん、毎日ありがとな。たまには家でゆっくりと休んだほうが良いぜ？」
「……大丈夫です。好きでやっているので、迷惑にならない限りはお見舞いに来ようかと」
母さんはビニール袋から、缶のココアを差し出して労う。
季節的にホットと思われるスチール缶を、鞘音は少し遠慮しながらも「……ありがとうございます。いただきます」と、素直に受け取った。
「今日はちゃんとメシ食ったか？　まさか残したんじゃねーだろうな？」
「食べきれなかった……。病院食はあまり美味しくなくてさ」
味のせいにする。食欲減退と吐き気を伴っているため、少量の病院食でもきつい……とは率直に告げられず、
シリアスな空気になるのを嫌って誤魔化してしまった。
腕に刺さっている点滴が、足りない栄養を補給してくれている。
「ちょっと痩せたんじゃねーか、お前」
やや目を細めた母さんに、顔をまじまじと見詰められてしまう。

「退院したら、母さんの料理を食べたいな。寒さを凌（しの）げるような温かい汁物とかさ……」
「おう、お前が好きだった芋煮でも作ってやる。鞘音ちゃんと一緒によく食べてたよな」
深く頷（うなず）いた俺と鞘音。
「……依夜莉（いより）さんの芋煮は最高です。また食べたいと思ってました」
「鞘音ちゃんも食べに来てぃーぞ！　でかい鍋でいっぱい作ってやっから！」
退院後の楽しみが増えた。未来への希望が、また芽生えた。
せっかくなので、母さんにも例の件を話してみる。鞘音が大々的に協力するのは無理そうだけど、何か面白いことができないかな……と。
「フリートークとか宣伝活動に抵抗があるなら、鞘音ちゃんみたいなキャラが代わりに紹介してくれりゃあいいのにな」
母さんがへらへらと言い放った冗談交じりの台詞（せりふ）。
「それ……意外とイケるかもしれない」
ノートに書き殴ったイラストへ、さらに一手間の味付けを加えてみる。
うん、意外としっくり。これなら個性も際立つだろうし、間接的な宣伝効果も大いに期待できそうだ。有名な前例もちゃんとある。
疑問符を浮かべている二人に、下手くそなイラストを用いて解説すると、ある程度は納得してもらえた。さほど難しい取り組みではないし、新たな手間も予算も必要が無い。三雲さんに提案してみる価値はあるだろう。
「簡単な企画書にしてみるかな。一晩もあれば作れそうだ」
思い立ったら、すぐ行動。ノートパソコンを立ち上げようとしたが、

「……修は入院中だから大人しく療養して」

「おーい、聞いたかバカ息子。鞘音ちゃんの口からも言ったれ、言ったれ」

静かなる怒りを纏（まと）った鞘音に叱られ、母さんも同調している。

「体調は安定してるし、消灯時間にはいつも寝てるんだけど」

「嘘（うそ）つけや。こちとら、お前の面倒を見てる看護師から情報を仕入れてんだよ。深夜までポチポチとパソコンを弄（いじ）ってるってよ」

浅はかな嘘を見破った母さんに、パソコンを没収されてしまった。それを手放してしまうと、現状の俺ができることは……何一つ無くなってしまうんだ。

「パソコンを返して、母さん。俺の体調は問題な――っつ……!?」

無理やり手を伸ばした途端、視界が不規則に霞（かす）む。船に揺られているような不快感と眩暈（めまい）。咄嗟（とっさ）に頭を抱えてしまい、浮かせた臀部（でんぶ）をベッドに着地させる。

「修……？　具合でも悪くなったのか……？」

「いや……問題ないよ。たまに起きる眩暈みたいなものだから……」

項垂（うなだ）れていた息子の顔を覗（のぞ）き込む母さん。憂惧を含んだ瞳に直面すると、心苦しい。

「……やっぱり、修は無理してるの。退院するまでは、静かに休んでいて」

「でも……俺が止まっていたら、鞘音も――」

焦燥が膨れ上がり、大渦を巻く日々。無駄に焦って、先走って、心配や迷惑をかけてしまう。俺にしかできない仕事なのに、意思だけは前進しているのに、蝕（むしば）まれた身体（からだ）だけが取り残されていく。

「俺は……鞘音に！　置いて行かれたく……ない……」

語尾を湿らせる心底情けない泣きべそ。何もしない……という日常が、過去の自分を呼び起こしているようで、腹の底からの悔しさが氾濫して塞(せ)き止められない。

自分の意思でやらなかった頃とは違い、今は……やらせてもらえない。ゴミクズな人生を見詰め直し、重い腰を持ち上がらせた根源は皮肉にも病気。それでも、感謝など到底できはしなかった。鞘音と共に生きるという選択をした者にとって、忌むべき障害物と成り果てたからだ。

「どうして……思い通りに生きられないんだろうな。普通の人生が……欲しいだけなのに」

気分屋の運命を呪い、余命という過酷な呪縛を押し売りした者を恨む。病院のベッドで死ぬほど嘆き、未来の姿が描けない現状を拒絶し続けてしまう。

「……修」

上半身が包み込まれ、懐に誘われる。無様な男を、鞘音が抱き寄せてくれている。

「……わたしは、どこにいる？　心臓の音……どこにある？」

とくん、とくん。鞘音の左胸に耳を当てると、確実に存在しているのは生命の鼓動。

「聞こえる……鞘音の音が」

「……そう。わたしは、桐山(きりやま)鞘音はここにいるの。あなたの、松本修の……側(そば)に」

重なり合った二人は、ずっと一緒(be with you)——俺が立ち止まっているとき、鞘音も羽を休めてくれるのなら。無色透明な時間が流れることを、今だけは受け入れてもいいのだろうか。

「そして、修の音も聞こえる。わたしたちはもう、お互いの音を失わない」

反対に、俺の胸元へ顔を埋(うず)める鞘音。離れすぎて、遠ざけすぎて。聞こえなかった二人の音を交わせる。それだけでいい。二人が一緒にいれば、もう道標を見失わない。

「なあ、アタシ……お邪魔だよな。すまねーな、空気が読めなくて」

恋人同士の一部始終を、母さんの目の前でやらかしたわけで……惚気(のろけ)た言動を堂々と披露した俺たちは、密着していた身体を瞬時に剝(は)がし、出火寸前の顔面を押さえた。

「松本さんは夜更かしが多いから、親御さんや彼女さんが叱ってくれるのは助かります。明日は定期的な治療の日なので、早く寝てくださいね」

「ヘタレ息子が迷惑かけてすみませんねぇ。ぶん殴ってでも寝かせるんで」

「ぶん殴ったら退院できなくなりますって！」

物騒なジョークをかますヤンママはともかく、通りかかった看護師さんに「彼女」と括(くく)られ、照れ臭そうにしている鞘音には癒(いや)される。

「……わたしも、依夜莉さんも、地元の仲間も……修の回復をいちばんに願ってる。仕事とか、作曲は……修が元気になってこそでしょ」

切実に、低い声色で訴えかけてくる鞘音。俺は息を呑(の)み、俯(うつむ)きながら頷いてしまう。

俺のことを切実に案じてくれる大事な人たちに、甘えてもいいのだろうか。

「明日は面会できるか分からないから、自分のために時間を使ってくれ。俺も早く退院するために頑張るからさ」

「……うん。修ならきっと頑張れる」

もう間もなく、今日の面会時間が終わる。

俺の手をぎゅっと握ってくれる鞘音の感触を、温かさを、忘れない。

一人っきりの薄暗い夜に抱く寂しさも、未来への底知れぬ不安も、キミを思い返せば紛らわすことができるから。

＊＊＊＊＊

翌日の午後一時半を回った頃、わたしは座敷に敷かれた座布団へ座っていた。

木製テーブルを人差し指で撫(な)でると、表面の油でやや滑る。水が注(つ)がれた半透明なコップとウォーターポット。端っこに置かれた箸立てには、ぎっしりと割り箸が詰め込まれ、ルーレット式のおみくじ器も未(いま)だに現役。かなり色褪(いろあ)せたメニュー表や漫画の単行本が、子供の頃に通っていた記憶を鮮明に蘇(よみがえ)らせてくれた。

ここは旅名川ドライブイン。わたしのおススメは、野菜たっぷりの味噌(みそ)ラーメン……それしか食べたことないんだけど。

地元では貴重な飲食店だし、法事では参列者へ食事を振る舞うためにドライブインを利用するというのが旅名川の定番。それこそ、修のお父さんが亡くなったときとか……。

「ごめんごめん！　ちょっと遅れた！　寒かったーっ！」

約束の時間から五分遅れで、私服姿の三雲さんが店に訪れる。急いで来たからか、小走りだったため、白塗りの息を細かく吐(つ)いていた。

もう十一月の半ば。初雪はまだでも、屋外では厚着をしないと肌寒くて耐えられない。

「いえ、急に連絡をしたのはわたしなので。むしろ、お忙しい勤務中なのに時間を作ってもらったことが嬉しいです」

「今日はイベントの外回りが多かったし、そのままコンビニ飯で済まそうと思ってたから、このお誘いは昼休憩に丁度良かった～みたいな」

靴を脱いで座敷に上がった三雲さんが、テーブルを挟んだ正面に腰を下ろす。

「うわーっ！　この雰囲気とか懐かしっ！　いつの時代の少年誌だよ、これ！」

やや古びた店舗の内装を見渡した三雲さんは、小さな感慨に浸っている。確かに「何十年前の代物なの……？」みたいな少年誌も普通に置かれているのが凄い。

「やっぱり三雲さんもよく来ていたんですか？」

「そうだね。中学くらいまでは正清センパイと食べに来てたなぁ」

「わたしもよく、バカ清に連れてきてもらいました。修と三人で……たまにエミリィさんも付き合ってくれたりして」

常連だったらしい三雲さんと地元トークをしながら、さっさとメニューを決めた。

「すみませーん、味噌ラーメン二つで」

店員のおばさんを呼び、指をピースサインにして注文する三雲さん。

やっぱり旅名川ドライブインと言えば、この味噌ラーメンだよね。心の中で勝手に親近感を覚える。あまり話したことがない相手でも、すんなりと共通の話題を見つけられる地元の力ってありがたいな。

「それとぉ、餃子二枚と炒飯も！」

まさかの追加注文。細身な身体つきなのに意外と大食いなのだろうか……と驚いていたら、三雲さんは即座に餃子と炒飯の注文を取り消す。

「この女、めちゃくちゃ食べるな……とか思った？　顔が引きつってるよ～」

「……ちょっと驚きました」

「つい、昔のクセで頼みすぎちゃった。あの頃はよく注文してた鉄板のメニューでさ、正清センパイとシェアしてたから」

当時を思い返しているのか、三雲さんは苦笑した。

「私が残しても、センパイが食べてくれたんだ。美味しそうに食べてるセンパイを見ていると、悩みがあってもバカらしくて忘れちゃうっていうか――」

そこまで話すと、

「正清センパイ限定じゃなくて、美味しそうにいっぱい食べてる男性が好きってことね！　私の性癖みたいなもんだから、えへへっ！」

わたしは何も言っていないのに、なぜか早口で補足される。

ほどなくして、芳醇なスープの香りを漂わせた味噌ラーメンが到着。お互いに空腹を我慢していたため、さっさと麺を啜り始めた。

「ああ……変わらないこの味。めちゃくちゃ美味いってわけじゃないけど、なんか安心させてくれるんだよねぇ～」

「……分かります。雑な野菜の切り方とか、解れ方が甘い麺も懐かしいです」

うっすい感想を述べたあとは、ひたすら麺を啜り、味噌と出汁で濁ったスープをレンゲで掬い、空腹の胃へと流し込む。わたしの伊達メガネがいちいち曇るけど、そんなのはお構いなし。暖房に包まれた身体が、さらに内側からもじんわりと発熱。衣服の下には季節外れの汗が滲んできたので、わたしも三雲さんも上着を一枚だけ脱ぐ。

お昼時を過ぎた店内は閑散としており、テレビの天気予報と、わたしたちの啜る音が延々と奏でられていた。

「桐山さんちの鞘音ちゃんだっちゃね？　息子が大ファンでさぁ、サインとかくれるとありがでぇなぁなんて」
店員のおばさんに頼まれ、渡された色紙にサインを書く。有名人のサインを店に飾るのが夢だったらしく、もう一枚にもマーカーのペン先を流れるように走らせた。
「ファンへの対応も手馴れてるね。さすがは若者の心を摑んでいる孤高の歌姫だ」
三雲さんに感心されたかと思いきや、
「そんな誰もが憧れるＳＡＹＡＮＥが、冴えない一般人と付き合っているとはねぇ」
「うっ……けほっ……！」
突然のぶっこみ発言にむせて、ラーメンを吹き出しかけてしまう。
「まさか、私にバレてないとでも思ってた？　二人の雰囲気を見ていれば、なんとなく分かるって。隙あらば、すーぐ見詰め合ってさ」
「……そ、そんなことはないと思いますけど」
「私が松本君に絡んでいたのを目撃したあなたの顔、嫉妬が漂って怖かったもん」
まるで自覚がない。無意識なのがつらい。
「子供の頃も彼と一緒にウチの温泉にいたよね。初恋だった？」
「…………ラーメン伸びますよ」
「ラーメンより恋バナでしょ！　ガールズトークしようぜぇ？」
うう……バカ清の息がかかった後輩だから、三雲さんはトミイズムを継承している。人見知りせず、一度ご飯を共にすれば友達だと思っているらしい。
わたしは動揺を隠すため、無言の意思表示。ひたすら麺を啜る音で受け流す。

「いいなぁ。若いなぁ。初恋かぁ」
「……わたしは何も言ってないんですけど」
もはや、初恋だと決めつけて話を進めている。
わたしの初恋は修だけど……自分で言うのは、まだまだ恥ずかしい。
その後も様々な恋愛方面の話題を振られ、暖房が暑いのか、ラーメンが熱いのか、照れ臭さで火照っているのか……氷水をごくりと飲んでも、気持ちの高揚は収まってくれない。
ふと、三雲さんが腕時計の時刻を確認し「うわっ!?　もうこんな時間!?」と甲高い声を発する。夢中で喋っていたら、いつの間にか昼休みの終了が迫っていたらしい。
「それで、今日はどうしたの？　まさか昼食だけが目的じゃないんでしょ？」
ラーメンを完食し、コップの水を豪快に飲み干した三雲さんが、疑問を投げかける。
そう。わたしはガールズトークをするために、彼女を呼んだわけじゃなかった。
「……先日、三雲さんから提案があった観光大使の件です」
「えっ!?　引き受ける気になってくれた!?」
「……いえ、まったく」
身を乗り出しかけた三雲さんだったけど、すぐに意気消沈。テーブルに突っ伏す。
「……三雲さんも、バカ清みたいに地元が好きなんですか？　実家の旅館ではなく観光協会で働いている理由が、ふと気になったもので」
「うーん……正直に言うと、センパイほど地元ラブってわけじゃないかな。それでも、町が盛り上がれば喜んでくれる人がいる。それだけのために、この仕事をやってる」

それは町の住民たちなのか、それとも先程から名前の登場頻度が高い特定の誰かなのか——これ以上、深掘りするのは無粋だと、わたしの直感が囁く。

「……修は違う形でのアプローチを模索していました。中途半端に終わったゆるキャラに着目して、有効利用できないかと思っていたみたいです」

わたしは持参していた〝とあるノート〟を開き、三雲さんへと手渡す。昨日、修がイラストを書いていた歌詞用のノート。お世辞にも上手いとは言えない。それでも、たびねっこがエレキギターを構えているイラストというのは伝わってほしい。

「このイラストは！　…………クマが鮭でも持ってるの？」

まったく伝わらなかった。修が悪いよね、これは。

「……下手くそで申し訳ないんですけど、たびねっこです。ギターを持たせて、しかも演奏することができれば、プロモーションやパフォーマンスの幅が広がる……それが修の考えた代案です」

「ほうほう、興味深い提案かも。たびねっこは倉庫で寝てるから、復活させることは可能だよ。そういえば、青森にドラムのテクが凄いリンゴのゆるキャラがいたね！」

「目指すところは、そこ……だと思います。余計なお節介かもしれないですが……彼も、わたしも、地元に何かしらの貢献をしたいという気持ちはありますので」

「いやいや、参考にさせてちょうだい。むしろ、すぐにでも企画書にまとめて会議にかけたいくらいだってば！」

興奮した様子で声量を上げた三雲さんだったが、

「でもさ、誰が変身するかっていう問題はあるね。インパクトと話題性を出すためには、ギターが相当上手くなきゃダメだと思う」

一呼吸おいて冷静になり、やや低いトーンで問題点を指摘する。この点に関しては、修は明言を避けていた。たぶん、わたしが嫌がると思って気を遣ったのかもしれない。

ただ、ギター装備のたびねっこに——彼は下手な手書き文字で名付けている。

鞘音のようなネコ……さやねっこ。

小学生と大差ないネーミングセンスだけど、このキャラには相応(ふさわ)しい。ノートに書かれていた設定表にも『不機嫌な顔・素直じゃない・気まぐれ・すぐ怒る・そこが可愛(かわい)い』と、わたしを元ネタにしたような単語が並ぶ。小馬鹿にされている気がして腹が立つ。

「わたしが、やります」

ＳＡＹＡＮＥとして歌いながら、ゆるキャラも熟(こな)していくのは大変そうだから、後継者が現れるまでの期間限定にしてほしいけれど。

「褒めてほしい人がいるから、ほんの少しだけ……勇気を出すことにしました」

神様に弄ばれようと、過酷な運命を強いられようと、懸命に足掻(あが)いている人がいる。

今も頑張っている大切な人のために、桐山鞘音は勝手な行動をしてしまった。褒めてくれるかな、喜んでくれるかなって。

事後報告になってしまうけど、修と一緒に、笑い合って過ごしていけそうな予感がするから。彼にとって、退院後の楽しみが増えてくれるなら、それだけでも嬉(うれ)しいの。

背伸びしなくていいよね。

期待を背負う観光大使なんて柄じゃない。
わたしたちは、無邪気に遊びながら育ってきたんだもの。
ずっと一緒に、バカなことをやろう。
だから、わたしは——さやねっこになります。

三雲さんとの昼食が終わり、営業車で春咲総合病院へ送迎してもらった。
これから春咲市でも仕事があるらしく、そのついで扱いだったけど助かる。ちなみに、味噌ラーメンも奢ってもらってしまった。
会計時、わたしが財布を取り出そうとしたら「いやいや、後輩に払わせるわけにはいかんでしょ。正清センパイが私やキミらに奢るのと同じだね」と、ごく当たり前のように。
病院の駐車場に停車。わたしが助手席から降り、そのまま営業車は走り去るかと思いきや、三雲さんは運転席側の窓を開ける。
「メッセージアプリとかやってる？　連絡用にＩＤを教えてくれると嬉しいな！」
向こうがスマホを取り出す。減るものでもないので、わたしのＩＤを口頭で伝えた。
三雲さんがスマホを操作すると、一瞬だけ震えたのはわたしのスマホ。雛子という差出人から、スタンプのプレゼントが届いていた。
「これ……たびねっこですか？」
デフォルメされたネコのキャラクター。地元民からも忘れられそうなゆるキャラのスタンプが「よろしくにゃあ♪」と、ゆるーく挨拶していた。

「たびねっこを生み出したとき、公式スタンプも一緒に作ったのよね。また再利用するからさ、友達とか知人にどんどん使って広めちゃって～」

「……わたしの連絡先、五人しか登録されてないです。友達いないので」

切ない表情をされてしまう。

ちなみに、修、豊臣(とよとみ)一家、わたしのお母さんの五人です。何か問題ありますか。

「観光協会と連携する機会も増えると思うから、これからよろしくね！　ＳＡＹＡＮＥさんは寡黙でとっつき辛(づら)いイメージがあったけど、普通の恋する少女で安心したよ」

言い方がいちいち羞恥を煽(あお)ってくる！　少女って年齢でもないから！

「……こちらこそ、よろしくお願いします。三雲さんはバカ清と雰囲気が似ていて、いろいろと話しやすかったです」

「あははっ……よく言われる。センパイの親友とか妹みたいだなって」

そう話す三雲さんの表情は嬉しそうにも感じ、悲しそうにも思えた。具体的な理由はないけれど、どっちつかずな顔色が……わたしの瞳に焼き付いて離れない。

「実った初恋は大切にしなきゃダメだよ。大半は報われないまま、気付けないまま、ひっそりと終わるんださ」

誤魔化(ごまか)すように笑って。それでも、明らかに取り繕った脆(もろ)い笑顔で。

彼女の車が軽快に走り去っても、排気ガスの不快な臭いと〝未練〟という感情は、暫(しばら)く燻(くすぶ)り続けていた。

鮮やかな夕焼けが窓から差し込み、伊達メガネを貫通して目が眩(くら)む。

夕方になっても、修との面会はできなかった。自分のために時間を使ってくれ、とは言われたけれど、わたしの身体（からだ）が勝手に赴いてしまうのだから仕方がない。

ロビーのソファに座っていたり、院内の珈琲（コーヒー）チェーン店でブラックコーヒーを嗜（たしな）んだりしていたが、心身が落ち着かない。

一ヵ所に留（とど）まっていることができず、院内をうろうろと彷徨（さまよ）う。亡霊みたいな女は九階の展望ラウンジで立ち止まり、耳にイヤホンを差す。

春咲市の中心部が一望できる大きな窓。午後四時半、すでに沈みかけていたオレンジの太陽が、冬の訪れを予感させてくれた。

「……会いたいよ、修」

一日会えないだけで、会いたいと抜かす愚かな女。

スマホを操作し、とある楽曲の再生ボタンが表示された液晶に触れる。

be with you――離れていても、声が聞けなくても、触れられなくても、修のことを感じられる詩。あなたと一緒にいられる歌。

あなたと会える日は過ぎ去る時間が速いのに、会えない日はどうしてこんなにも遅く感じるのだろう。逆だったらいいのに。楽しい時間こそ、もっと長く続けばいいのに。

薄紫に染まっていく遠い空を眺めながら、わたしの心はそんなワガママを願っていた。

「桐山さん、こんなところにいたんですね」

一階のロビーに戻ると、修の看護担当をしてくれている女性看護師さんと遭遇。

どうやら、わたしを探していたらしい。修の入院から一ヵ月、ほぼ毎日のように来ているわたしの名前も、自然に覚えられてしまったようだ。

「松本さんとの面会、もう大丈夫ですよ。面会終了まで残り一時間くらいですけど、会っていかれますか？」

わたしは迷わず、頷(うなず)いた。

面会の手続きをして病室に入ると、物音はほとんどしていない。中央に配置されていたベッドには、穏やかな寝息を立てている修。

腕に繋(つな)がっている点滴の管などが、やや痛々しい。

「無理に起こさないでやってくださいね。大変だったと思うので」

看護師さんは静かにそう告げ、一先(ひとま)ず病室から出て行った。わたしには想像できないけど、痛くて、苦しくて、辛(つら)かった……彼の心情は、そういった陳腐な言葉では表せない。

一人で不安じゃなかったかな。寂しくなかったかな。

様々な想(おも)いが込み上げて、わたしが泣きそうになってしまう。視界が曇ったけれど、涙を溢(こぼ)すような真似(まね)はしなかった。

修が目覚めたとき、みっともない泣き顔なんて見せたくないから。

修が安心できるような、笑顔で待っていたいの。

手を握っているから、今はゆっくりと休んでください。

わたしはどこにも行かない。

あなたの側(そば)に、居続ける。

だから――あなたも側にいてください。

「……さ……やね……？」

絞り出したような声がした。

天井の照明が眩(まぶ)しいのか、瞬(まばた)きを繰り返しながらも、修はわたしのことをしっかりと見据えている。名前を呼んでくれる。

数秒間、お互いに無言で視線を交わし、

「……おはよう、修」

「…………おはよう。めちゃくちゃ寝ていた気がする」

疾(と)うに日が沈んでからの、おはよう。

寝起きのくしゃくしゃな顔が、本当に可愛くすら思える。

大好きな修の顔なので、とても愛らしい。

身体を起こすのがきつそうなので、無理に起こさなくていい。横になったままで大丈夫だから、わたしの話を聞いてほしいな。

表面的な態度は、いつもと変わらぬ冷静沈着。顔には絶対に曝(さら)け出さないけど、遠足前の小学生みたいな気分。二十歳(はたち)にもなるのに、心の中では、はしゃいでしまう。

あなたが退院したら、一緒にやってほしいことが増えたよって。

二人でバカをやって、くだらないと笑い合えるような遊びを見つけたよって。

残り数分で面会時間は終わってしまうけれど。
今日は――話したいことがたくさんあるの。

＊＊＊＊＊

十二月の上旬――修が旅名川に帰ってきた。
本人は「やっぱり旅名川はクソ田舎だなぁ」などと、都会人ぶって嘆いてたけど、言動の節々からは、心の底からの嬉しさが見え隠れしていた。
約二ヵ月の入院生活は、治癒と引き換えに代償も支払う。
体力や筋力の衰え、病気による後遺症……退院直後の彼の身体は、正常な歩行すら若干の支障をきたす状態。
時折、わたしや依夜莉さんが背中を支えてあげることはあっても、修は自らの手足を動かし、ぎこちないながらも日常生活を取り戻していった。
多少の時間はかかるかもしれない。
それでも、わたしは修から教えられていた言葉を信じている。
、、、、、、、、、、、、、、、、
この病気はいずれ完治するものだから――と。
ゆっくりでも、前に進んでいこうね。
わたしたちなら、どんなことでもできる。どこにでも行ける。
もう、あなたを置き去りにしたりしない。
あなたと同じ速度で、ずっと隣を歩いていくって誓ったから。

「今日は教頭と打ち合わせしてくるよ。旅中ラストライブまで三ヵ月しかないし、そろそろ計画を本格的に進めておかないと」

　実家の部屋でアウターを羽織りながら、資料を鞄に詰めている大ばかを発見。

……呆れた。退院して一週間も経っていないのに、修は仕事を始めようとしている。というより、すでに入院中から始めている。退院直後にはストリートライブの配信も開始した。情報端末やネットがあれば可能な範囲とはいえ、もう少しちゃんと休んでほしい。

　じっとしていられないのは分かるけど、普通に大ばかだよね。

「……依夜莉さんが仕事から帰ったら言いつけてやる」

「勘弁して……！　母さんに知られたら怒られる……！」

　必死な形相で口止めをされてしまい、わたしは溜め息を吐くも黙認してしまう。静かな部屋でじっとしているより、目標に向かう修は活き活きとしていたから。

　わたしは、そんな修を見ているのが嫌いじゃないから。

「すぐに帰ってくるよ。打ち合わせの場所は旅中だから、そんなに心配するなって」

　へらへらと笑う修。多少元気になっただけで、すぐ調子に乗るんだから。

　わたしも一緒に行く……と言いかけて、漏れかけた言葉を喉の奥に繋ぎ止める。

「……ちょっと待って」

　スニーカーを履こうとしていた修を呼び止め、わたしが巻いていたマフラーを外し、修の無防備な首元に優しく巻いてあげた。修はちょっとだけ、照れ笑いを浮かべる。

「鞘音の体温がマフラーに残ってて……あったかいな」

……っ!?　惚気（のろけ）た発言の不意打ちはやめてほしい。こっちまで照れてしまう。

「外は寒いから助かるよ。それじゃあ、行ってくる」

「……いってらっしゃい」

平屋の玄関から徒歩で出発していく修を見送る。左足を引きずり、やや不格好な歩き方だったものの、その足取りは軽快に思えた。健康だったときよりも、力強いとさえ感じた。

修の背中が見えなくなった頃、わたしも玄関から庭に出てみると、頬（ほお）や手の甲には冷たい感触。濁った寒空から届けられる銀色の雪化粧は、旅名川の住民にとって毎年恒例の見慣れたもの。

わたしは自分の実家に戻り、アコースティックギターをハードケースに押し込み、軽くジャンプして背負う。目的地は旅名川中学校。授業をサボっていた体育館側の階段に現れ、内緒で歌っていたら、彼は驚いてくれるかな。

幼稚なサプライズに心を躍らせ、舞い散る桜のような粉雪の情景に溶け込む。

雪が薄く積もっている白塗りの路面には、修の実家が発信源の足跡。外出する近隣住民もほとんどいないため、旅中への道筋を示さんとばかりに綺麗（きれい）に残されていた。

修の足……大きい。さすがは男の子。

そんなことを思い、雪に残された足跡の上に自分の歩幅を合わせて歩いた。スニーカーの靴跡を、わたしが履いているブーツの靴底が上書きしていく。

子供っぽい自分に呆れつつも、なんだか無性に足先が弾んだ。等身大の日常で得る小さな楽しみや喜びが、わたしは大好きだから。

こんな日々が、ずっと続いていきますように。

二人にとって、二十一回目の冬が来る。

最も幸せで――淡雪のように儚(はかな)く消える季節が。


第二章 冬の幻想

『――さやねっこのデビュー日が決まったよ！』
スマホの通話ボタンをタップし、耳に当てて聞こえた第一声がこれ。
旅中ラストライブの打ち合わせをした日の夕方、俺は自室でのパソコン作業中に電話を受けていた。電話越しでも元気さが伝わってくる声の主は、観光協会職員の三雲さん。
『――デビューは三日後の土曜日！　三雲旅館の宴会場を簡単なイベント会場にするから、そこに地元民とか宿泊客を集める感じの小規模なお試しイベントになりそう』
「なるほど……というか、三日後ってずいぶんと急ですね」
『――すまんのう。企画を作って会議にかけたり、広告宣伝の方法を打ち合わせしたり、いろいろと手こずったのよ。なにせ、不評だった〝たびねっこ〟が再登板するわけだから、細部までしっかり詰めてプレゼンしないと、責任者からのゴーサインが出ないんだ』
かなり苦労しているのか、滲み出た疲労感が語尾に混ざっていた。ゆるキャラ関連の他にも、クリスマスから年始にかけては行事が多いため、仕事量も並じゃないのは察せる。
『――年明けからの始動でも遅くはないんだけど、三日後は旅名川スキー場開きなのよ。例年はスキー関係の宿泊客が結構多い日だから、デビューするには狙い目だぞっ！』
何事においても、最初のインパクトが肝心。スキー場開きに照準を合わせて、初っ端から爪痕を残してもらおう、というわけか。
『――でもでも、三日後のイベントは、あくまで地元民向けの肩慣らし。メインはクリスマスに開催するスノーランタンフェス！　そこに盛り上げ役のゆるキャラとして参加するから、二十五日の予定は空けといてねぇ』

旅名川スキー場にて毎年開催されている『スノーランタンフェス』。山中に切り開かれた広大なスキー場に、参加者がスノーランタンを作って灯すクリスマスのイベント。

子供がいる家族や恋人同士の共同作業であり、火を灯せば幻想的なムードになる。まさしく、人生が充実している人向けのフェスだ。

学生時代の俺と鞘音は恋人じゃないし興味も無かったため、一度も参加していない。

『――スノーランタンフェスに纏わる都市伝説を知ってる？』

「ああ……そんなのありましたね。一緒にスノーランタンを作った男女は、永遠に結ばれる……でしたっけか」

『――そのおかげで旅名川の中では集客数の多いイベントなんだけど、今年はさらにグレードアップさせたいのね。例年だと、学生とか若者がランタン作りながらラブラブチュッチュして、灯した光を眺めながらラブラブチュッチュするだけで私は腹が立つ……じゃなくて、ゆるキャラみたいな流行りの要素も絡めていきたいなーと』

私怨が垣間見えた気がしたけど、ツッコんだら怖そうなので流す。地元では貴重な若者向けのイベントなので、例年以上に盛り上がるよう画策しているらしい。

「スノーランタンフェスは、今年も旅名川スキー場でやる予定ですか？」

『――そうだねっ！　今はその準備にも追われて、地味に忙しいって感じかな』

俺は〝とある案件〟を企んでいた。ゆるキャラとランタンフェスを開催するために、観光協会は野外イベントステージを確実に用意する。

このまま、ＳＡＹＡＮＥの名を都合よく利用されるだけじゃつまらない。俺たちのレーベルも、向こうを積極的に利用させてもらおうじゃないか。

「ゆるキャラとはいえ、そちらはＳＡＹＡＮＥのネームバリューに便乗するんです。俺の要望も受け入れてほしいんですけど」
『――ほう、なんだい？　お姉さんに言ってごらん？』
一呼吸置いて簡潔に伝えると、三雲さんは「ううーん」悩んだ挙句……。
『――正直、人員も予算も準備期間もきついけど、旅名川にとっては大きなメリットだから、上司がダメって言っても私が押し通してあげる！　クリスマスのせいにしてね！』
やけくそ気味に開き直り、すんなりと受け入れてくれた。
「クリスマスのせいにして無茶(むちゃ)を押し通すって……なんか最高ですね」
『――まあ、私は頭をいっぱい下げるから大変なんだけどさ！　えへへっ！』
「あざーっす！　さすがトミさんの妹分！　ノリで生きててカッコいいっす！」
『――でしょでしょ？　私、最高にカッコいいでしょ？』
適当に煽(おだ)てると、調子に乗るところもそっくりだ。
「鞘音には、クリスマスにさやねっこのイベントがあるとだけ伝えます。俺からのプレゼントは、良い感じのムードになったら渡したいなーと」
『――いきなり惚気(のろけ)てんじゃねーっ！　独身貴族のアラサーに喧嘩(けんか)売ってんのかーっ！』
いきなりブチ切れられた！
『――よーし、イベントの打ち合わせじゃーっ！　アホンダラーっ！』
やけくそ気味な三雲さんと、イベント詳細を詰める打ち合わせを進めた。
入院中より着々と紡いでいた〝プレゼント〟は、かなり完成に近づいている。

どうせなら、恋人っぽい雰囲気のときに伝えたい。俺はヘタレなロマンチストなので、タイミングは試行錯誤してしまうけれど。

クリスマスに胸を躍らせつつ、今はこっそりと準備を進めていこう。

＊＊＊＊＊

変身アイテムとなる着ぐるみの現物を確認してもらうには、鞘音を俺の実家に招いたほうが手っ取り早い。実際に着用してもらったり、動作の特訓をしないといけないし。

【たびねっこが来るから、俺の家に来てほしい】

アプリを使い、鞘音にメッセージを送信。数秒後、既読が付いた。

いつもなら『うん』とか『わかった』という淡泊な応答が、すぐに返ってくるのだが、今回はなぜか時間を要している。外せない用事でもあるのだろうか。

じーっと無言で画面を見詰めていると、鞘音からのメッセージが到着。

「えぇ……？」

思わず、首を傾（かし）げてしまう。

まさかのスタンプ！

鞘音がスタンプを使ったのは初めてという驚きと、スタンプのチョイスが謎すぎて。

たびねっこが温泉に浸（つ）かり「いい湯だにゃあ」と笑顔で喜んでいる。なに、今風呂にでも入ってるの？　いつの間に、たびねっこのスタンプなんか買ったの？

【間違えた】

スタンプの真下に、すぐさま訂正の一言が届く。

そして、リベンジと言わんばかりに新たなスタンプが表示された。

たびねっこが「ねこダッシュ！」とか抜かし、四足歩行で駆けている。ダメだ……こんなの、もう笑ってしまうだろ。

間違えた、という訂正が来ないということは、ねこダッシュで駆けつけるのかな。

五分後、いつもと変わらぬ鞘音と玄関にて相対した。

あー、鞘音のねこダッシュ見たかったなぁ。ねこダッシュＳＡＹＡＮＥ。

「……ばかにした顔してる」

むすっと不機嫌な顔になった鞘音。どうやら、俺は心の中のニヤニヤが顔面に表れるタイプらしい。ポーカーフェイスは難しいよ。

「お前、いつの間にスタンプなんか買ったの？」

「……三雲さんにもらったの。広めるために使ってくれって」

あぁ、そういうことね。

「……使いかた、あれで良かった？」

「バッチリだ。最高だったぞ」

「……ばかにしてるでしょ」

眉間にシワを刻んだ鞘音が怖いので、スタンプの話題を打ち切った。三雲さんはまだ来ていないため、一先(ひとま)ずは鞘音を自分の部屋に誘導。

母さんも仕事中ということは、俺と鞘音は――二人きり。健全な男子は煩悩めいた思考ばかり張り巡らせてしまう。
いや、中学までは二人きりとか当たり前だったのに。特に意識なんてしなかったのに。
異様に喉が渇く。そういえば、今日の鞘音は割と洒落た私服だった。俺の家にふらっと立ち寄る程度のときは、大抵が旅中ジャージ姿だったはず。
男臭さが充満した部屋なのに、鞘音という女の子が降臨するだけで、甘美な香りに満ち溢れていくのはなぜだろう。女の子って素晴らしいんだな。
「……これは、なに？」
しまった……。鞘音の視線は、存在感抜群の鍵盤とパソコンのほうへ。先程まで作業をしていたから、画面に映るのはシーケンスソフトのままだった。
慌ててマウスを操作し、スリープモードに切り替えておく。
「もう少し経ったら分かるよ。今は見なかったことにしてほしい」
やや首を傾げた鞘音だったが、
「……うん、何も知らないけど……楽しみにしてるね」
期待を宿した純粋な瞳を、俺に与えてくれる。
心臓の鼓動が加速度を増し、視線が一ヵ所に定まってくれない。俺がこんなに動揺しているにも拘わらず、鞘音は平然とした態度で俺の部屋を見渡し、
「……洗濯物、畳んでない」
乱雑に積み上げられ、床に放置されていた洗濯物を指さす。

「母さんが洗ってくれるんだけど、いつも畳まずにぶん投げていくんだよ……」
「……依夜莉（いより）さんは家事をしてくれてるんだから、畳むくらいは修（しゅう）がやるべき」
「はい」
正論過ぎて、俺は従うことしかできない。鞘音と一緒に正座し、放置されていた衣服を畳んでいく。無心になって畳んでいると、精神が正されていく……気がする。
「……なんだか、この家の家族になったみたい」
無駄口は叩（たた）かず、迫りくる煩悩をひたすら畳む！
鞘音がそれっぽい発言を投げてくるから、煩悩さんが再びこんにちは。それはすなわち、鞘音が松本（まつもと）家に籍を入れてね、そういうわけだよね。
本人は澄ました顔色で洗濯物と戯れているから、いまいち心情が読めない。
「……こ、これは自分でやって」
初々しく視線を逸（そ）らし、心なしか頬（ほお）まで赤くなった鞘音の反応。俺が愛用しているボクサーパンツさんの群れだった。
「鞘音は見慣れてるだろ？　いや、変な意味じゃなくて、中学の頃も部屋にしょっちゅう来てたし」
「……ばか。あの頃と今じゃ……わたしとあなたの関係性が違うの」
あの頃の俺たちは幼馴染（おさななじみ）み。お互いの下着くらいでは、変に意識するには至らなかった。
現在はどうだろうか？
俺たちの関係性は——恋人。恋愛関係というわけで。
「……………………」

「…………………」
気恥ずかしさが頂点を超えると、人間は押し黙ってしまうものなんです。
恋愛の経験値が少なすぎる二人は、中学生の初恋かってくらいの青臭さを隠せず『ただ無言になり、もじもじと視線を逸らす』という退避行動に陥ってしまうのだ。
「……わたしが畳む」
「……えっ？」
「……修の、その、下着、わたしが畳むから」
恐る恐るといった様子で、鞘音が俺の下着を摘まみ上げた。
「いやいや！　自分のパンツくらいは自分でやるって！」
「で、でも……！　いつか、家事とか……わたしがやるかもしれないし……！」
なんだよぉ！　そんなことを意味深に言われたら、幸せな家庭を妄想しちゃうだろ！
「鞘音が俺の下着を畳んでくれるなら、俺が……お前の下着を畳まないと」
「……はっ？　それはダメ。ばかでしょ。ありえない」
「なんでだよ!?　お互いを知っていくには、これくらいはやらないと！」
意味不明な方向に脱線していく謎のやり取り。鞘音がボクサーパンツを握り、俺が「お前の下着を畳ませてくれ！」などと供述している光景は——
「おーい、バカップルの巣はここですかねぇ」
部屋の入り口に立つ作業着姿の母親に、逐一目撃されてしまっていた。帰宅していたことも気付いていなかった。

「お前らの声な、家中にめちゃくちゃ響いてるぜ。仲が良いのは素晴らしいけどよ、調子に乗って変なことをおっぱじめるんじゃねえぞ」

き、気まずい……！　不穏な空気とかじゃなく、ふわふわした浮つきや羞恥が混濁した青春の苦み。恋人っぽい行為は、今まで何一つしていないと断言してもいい。

バカだなって自分でも痛感している。だけど、これが俺たちの付き合い方なんだと開き直れば、会話の一つ一つが甘酸っぱい。俺は単純だから、嘘偽りなく幸せだ。

「どうしてもヤリたくなったらな、外でやってこい」

何を示唆しているのか理解していないふりをするけど、雪が降り始めた時期に屋外は絶対きついでしょ。あなたの可愛い息子が凍死しちゃう。

あらぬ方向へ捻じ曲がってきた雰囲気を、

ピンポーン！

鮮烈にぶった切る玄関のチャイム。

わざわざ鳴らす人は基本的にお客様であり、心当たりがある。

「やっほー。たびねっこを連れてきたよ～」

予想通り、玄関先で待っていたのは三雲さん。午後六時を過ぎたばかりなのに、屋外はすっかり真っ暗で。疎らな積雪が瑠璃色に輝き、不気味だった。

「なんか顔が赤くなってるけど、大丈夫？」

「いえ……お気遣いなく」

まともな理由じゃないので、この話題は受け流しておく。

庭に停(と)められた営業車。三雲さんはバックドアを撥(は)ね上げ、積まれた着ぐるみを丁寧に降ろす。俺と鞘音は玄関にてパーツを受け取り、茶の間まで搬入した。

隣の台所からは、母さんが夕飯を作っている気配。フライパンを素早く振り、火にかけられた油と具材が情熱的に躍る。そんな光景が目に浮かぶ。子供の頃から耳に馴染(なじ)んでいる豪快な生活音をＢＧＭに、俺たちは茶の間に置かれた着ぐるみを取り囲んだ。

「……ちょっと汚いわね」

着ぐるみの表面を凝視した鞘音が、顔をしかめている。

「えー？　クリーニングしてきたのに？　まあ、職場の倉庫に放置されてたものだし！」

えへへ～と苦笑いした三雲さん。のほほんとしたデザインには相応(ふさわ)しくない頑固な汚れや擦り傷が、随所に見受けられた。遠目からだと、気付かれない可能性はあるけども。

「たびねっこがギターの修行をした、という境遇を与えてみませんか？　傷だらけで生まれ変わった姿がさやねっこ……みたいな」

「それアリ！　そうしましょ！」

咄嗟(とっさ)の提案を三雲さんは了承してくれた。この人も、トミさんみたいに場の空気とノリで生きているタイプなのだ。

「さやねっこへ変身する前に、動きやすい服に着替えた方がいいんじゃないのか？　着ぐるみを装備すると、結構汗もかくだろうし」

今日の鞘音は私服。変身アイテムの着ぐるみを身に纏(まと)うので、ジャージみたいな服に着替えたほうが鞘音にとっても快適だろう。

「いつもは旅中ジャージだったのに、最近は私服で来ることが多い気がするんだけど」

「……悪いの？」

「いや、悪くはないというか、むしろデートしてる感があるし、私服の鞘音は新鮮で可愛いよ……！　でも、この前まではジャージ女だったから、不思議に思ったというか……」

無神経で怒られると覚悟していたが、鞘音は俺と瞳を合わせることなく、

「……恋人に会うときは、デートだと思ってるから」

微か(かす)に聞き取れる小声での呟き(つぶや)。表情を絶対に晒(さら)さず「修のジャージ借りる」と、足早に俺の部屋へと逃げて行った。

油断していた。卑怯(ひきょう)だろ。激しく悶(もだ)えさせるような台詞(せりふ)を、不意に言い放ってくるのは天邪鬼(あまのじゃく)な恋人。ああ、なぜだろう。冷え込んだ室温なのに、はにかみを抑えられない顔面が溶けそうなほど熱くてさ。

数分後、俺の旅中ジャージに衣替えして戻ってきた鞘音が、渋々といった様子で着ぐるみに身体(からだ)を埋(うず)めていく。まずは両足、次に両手部分。そして、胴体がすっぽりと覆われた。

鞘音の首から下は、さやねっこという状態である。

なんかシュールだな……。鞘音の顔だけが、着ぐるみからちょこんと飛び出ている。

ばかにした顔してる、とでも言いたげな鞘音の不機嫌面を、スマホの壁紙にしてみたい。

「……撮影はＮＧだからね。もし撮ったら覚悟して」

ポケットからスマホを取り出そうとした瞬間、鞘音の悍(おぞ)ましい睨(にら)みで心臓が縮み上がった……。俺の邪念、筒抜けすぎなのでは？

俺と三雲さんが頭部パーツを両サイドから持ち上げ、鞘音の頭部に被せると――
若者に絶大な人気を誇るＳＡＹＡＮＥが！
孤高の天才シンガーソングライターＳＡＹＡＮＥが！

さやねっこに変身した!!

キュートなフェイスに圧倒的な二頭身。胴体より頭部が大きいというアンバランスさが、民衆の心を掴む。それが、ゆるキャラ。田舎を救うために選ばれた戦士なのだ。
概念としては変身ヒーローに近いかもしれない。
「うわーっ！　めっちゃかわいいーっ！　うわーっ！」
興奮気味にベタベタと触りまくる三雲さん。どう対応していいか迷うさやねっこは、されるがままの棒立ち状態。実は俺も遠慮なく撫で回したい派だが、鞘音の表情が分からないのが怖いので自重しておく。
それはさておき、着心地……いや、変身の感触をチェックしなければ。
「視界はどうだ？　ちゃんと見えてる？」
「……この中、臭いんだけど」
「あとで除菌スプレーしておくから、今だけ我慢してくれ……」
こもった声で不満を漏らされる。視界より臭いが気になるらしい。
「動きやすいかどうか、前後に歩いてみてくれ」

物静かになったさやねっこ。まだ不慣れだからか、スローモーションのような動きで足を踏み出し、茶の間をゆっくり……とこ……とこ……ぴたっ。

足裏が床に着く度に静止するため、小刻みに時間が止まっているかのよう。

もどかしい。鞘音は怖いものなしかと思っていたけど、ゆるキャラ界ではひよっ子というわけか。自信のない新人を導いてやるのも、俺に課せられた仕事だとしたら。

さやねっこは、この俺が育ててみせる。

「鞘音……じゃなくて、さやねっこに頼みがある」

さやねっこは、ギターの音色が言葉代わり。

人間の言語は一切喋(しゃべ)らないので、否定も肯定もせず、俺の言葉にネコ耳を傾ける。

「ねこダッシュしてくれ――いって！　ちょ、待っ……あっ……!?」

迅速に接近してきたさやねっこ。俺の背後に回り込み、撫でるような猫パンチを放つ。

「いや、猫パンチじゃなくて――いたっ、いたっ」

俺の背中に、じゃれつくような猫パンチ。

挨拶代わりのジャブ、ジャブ、どさくさ紛れの右ストレート猫パンチ！

あまり痛みはないし、向こうも本気で殴ってはいない。招き猫を真似(まね)ているのか、手首をこねての連打を浴びせてきた。

よしよし、激しく動いても生地が破れていない。二頭身の割に機動性も悪くなさそうだ。

俺を執拗(しつよう)に攻撃できるということは、外部の音や視界も確保できている証(あかし)。

鞘音をワザと怒らせて、動き回ってもらう作戦は大成功だぜ。

「えへへ〜。キミらさぁ、自覚してるかい？」

引きつった低めの笑い声。俺とさやねっこが後方を振り返ると、三雲さんがあからさまな作り笑いを取り繕っていた。

「二十七歳、独身女の前でイチャイチャ……羨ましいなぁあああああああ……」

「誤解ですって。さやねっこの身体能力を確かめるために……」

「うっせーよ！　うあぁあああああああああああああああああ………」

魂のぼやきを吐き出した三雲さん。炬燵（こたつ）に下半身を突っ込み、ふて寝してしまう。

そんなにイチャイチャしているつもりはないが……無自覚とは罪深い。三雲さんは面倒見もいいし、性格も明るいし、男受けは悪くないと思うんだけどな。

「私も好きな人とそんなことしたかったよ……ふーん」

いじけてしまったらしい。当初はお姉さんぶってたけど、やっぱりトミさんの妹分。

七歳年下の俺より精神年齢が低いのでは？

「おーす、晩飯できたから手ぇ洗ってこい。せっかくだし、三雲旅館の雛子（ひなこ）ちゃんも食ってけばいいんじゃねえ？」

「わーっ！　ありがとうございまーすっ！　ヤンチャしてた人が作る炒飯（チャーハン）は美味（おい）しいんですよねーっ！　仕事帰りなので、お腹（なか）ぺこぺこーっ！」

松本家の晩飯と言えば、これこれこれ〜。母さんがテーブルに運んできたのは、黄金の卵と焦がし油の光沢が煌（きら）めくヤンママ炒飯。香ばしい匂いは唾液の分泌を促し、いじけていた二十七歳も、すんなり機嫌を直して手を洗いに駆け出すほど。

「鞘音も食べていくだろ？　たぶん、母さんは鞘音のぶんも作ってるし」

「…………（ぺこぺこ）」

二回、頷く仕草を見せる鞘音……いや、さやねっこ。キャラ的に喋っちゃダメなんだけど、練習中も律儀に守り続ける生真面目さが微笑ましい。

「こんちゃーす！　依夜莉姉さんの手料理の匂いがするんで来ちゃったっす！」

「呼んでねぇよバカ、帰れ。お前だけ席料二万円な」

「なんで俺だけキャバクラの客みたいな扱いなんすか⁉　でも、依夜莉姉さんが接客してくれるなら二万円でも払うっす！　アフターとかマジ楽しみっすね！」

「お前、キモいからマジで出禁な」

玄関から響く頭の悪そうな台詞と、舎弟をあしらう母さん。いかにも飯の匂いに釣られて来た、みたいな言い草だが、予め声をかけていたトミさん一家も食卓を囲む。

引きこもっていたときは、母さんと二人の夕飯が当たり前だった。空腹を満たすための過程に過ぎず、ロクに動いてもいなかったから少量を摂取するだけ。

でも、今は違う。そこら中から会話が溢れ、口いっぱいに頬張った母さんの手料理が格段に美味しい。仕事で外出すると食欲も増し、おかわりまでしてしまった。

普通に生きている人には、特に珍しくもない光景。俺にとっては、ようやく取り戻した小さな幸せ。だから、何気ない日常でも——いちいち俺は思い出に刻んでしまう。

一緒に夕飯を食べるためだけに、トミさん一家を招いたわけじゃない。食べ終わった今こそ、さやねっこの特訓・第二部がスタートする。
母さんは早寝早起き型なので、さっさと風呂場へ退散してしまったが。
居残ったトミさんたちを観客に見立てて、俺と三雲さんが共同制作した台本通りにパフォーマンスをするという予行練習をしておきたい。
ストラップを肩に掛け、エレキギターを構えるさやねっこ。茶の間の絨毯（じゅうたん）へ腰掛けたトミさんたちの前に仁王立ちした。
「おいおい、ネコさんはダンマリかぁ？　いえーい、なんか喋れよこらぁ……ぐはっ!?　いや……いてっ……！　か、勘弁してけろ……！」
「…………（ぼこっぼこっ）」
いきなり肩を組んでウザ絡みしてきたトミさん。条件反射的に蹴りでボコボコにするさやねっこ。トミさんの必死な悲鳴と鈍い打撃音から察するに、さやねっこはマジ蹴りしている。なんすか、これ。思わず笑ってしまうんだけど。
「いやな……ウザ絡みしてくるチンピラがいるかもしんねぇだろ？　どうやって対処するんだべな〜と思って試したんだげっども……まさか、マジ蹴りしてくるゆるキャラがいるとは思わなかったど……」
悪びれる様子はまるでない、さやねっこのゆるーい顔。
「さやねっこ！　正清（まさきよ）センパイは蹴られると喜ぶんだから、徹底的にボコらないと意味ないでしょ！」
「いやいや！　俺が蹴られたいのは依夜莉姉さんだけだど！　誰からの蹴りでも喜ぶ尻軽みたいに言うなっちゃ！　あっ!?　ああああっ————————っ!?」

風呂上がりに偶然通り掛かったヤンママに尻を蹴られ、田舎のチンピラは悶えながら床にひれ伏す。その顔に苦痛の色はなく、安らかに眠っているようだった。

「風呂上がりの依夜莉姉さん……めっちゃ良い香りだったなや……」

ゴミを見る目の三雲さんと、苦笑いで見守るエミ姉が対照的。遺言まで気持ち悪い男は放置しておこう。横たわるトミさんをベンチ代わりに、ちょこんと座ったリーゼを子供の観客という想定にしてやっていこうか。

「数年前に山籠もりを始めて、音楽の道を極めた『たびねっこ』が帰ってきたよぉ～っ！　なんと、あのSAYANEと合体しちゃって『さやねっこ』になったんだってぇ～っ！」

進行役を務める予定の三雲さんが、子供向けな言い回しの台本を読み上げていく。

「それじゃあ、みんなで名前を呼んでね～っ！　いっせーの、はいっ！」

「血に染まる国は、神にすら見放さレタ。目指すベキ場所はオルレアンなノダ！」

「こんな子供いるわけないじゃん！　意味分かんないもん！」

三雲さんの素早いツッコミが冴えた。

一般的な小学生の概念はリーゼに通用しないんですよ。

「さやねっこ～♪　がんばれぇ～♪」

「こんな母親がいたら最高だよな……。いやぁ……俺も応援されたいなぁ」

エミ姉が健気な声援を送るだけで、圧倒的な艶やかさが際立つ。心の興奮が無意識に漏れてしまうくらいだ。健全な男子なので、正直たまりません。松本修が独断で選んだ、真剣に不倫したい女性ランキング殿堂入りだけのことはある。

「…………（じっ）」

さやねっこが俺を睨(にら)んでいるような気がする。怖い。怒っていないと思いたい。
気を取り直して、三雲さんは予行練習を再開させる。
「さやねっこは、どうやって生まれたのかな～？」
「…………（しゃららん）」
さやねっこ、弦をダウンピッキングで弾く単調な仕草。
音響機器に接続してないため、ピックが弦を揺らす微小の音色しか鳴らないのだが、そこはエフェクターやアンプを介したイメージで想像してくれ。
「なーるほどぉ。旅名川の温泉に浸(つ)かっていた一般の人が、突然変身したんだってぇ～！」
「…………（きゅーいーん）」
今度は左指をフレットに叩(たた)きつけ、ハンマリング・オン。
「ふむふむ、旅名川の有名人であるＳＡＹＡＮＥ師匠と山籠もりをしたら、ギターの力を受け継いでしまったのかぁ！　だから、さやねっこになったんだね～！」
「…………（じゃがじゃが）」
ダウンとアップを繰り返すオルタネイトピッキング。
フレーズは即興だが、基本的な技法を確実に熟(こな)す技術の高さと、鞘音のセンスが随所に光るメロディが極上の音となり、聴く者を頻繁に奮い立たせた――という想像が容易(たやす)い。
「今日の意気込みはどんな感じかな～？」
「…………（じゃじゃじゃきゅいーんぴろりろりろ）」
「おお、すっごく気合いが入ってるみたいです～！」

テンションの急上昇を表すときは、常人の目にも留まらぬ速弾き！　フィンガーボードという一直線の踊り場で、もふもふの左指が鋭く踏むのは難解なステップ。両手の人差し指から小指までの八本指が、六弦を綱渡りして踊り狂うエイトフィンガー。

かなりシュールだ。ゆるふわな見た目と、クールな情熱を兼ね合わせた弾き姿のギャップは、話題性が抜群だと断言してもいい。

「リーゼもヤル！　リーゼもヤル！」

さやねっこの弾き語りに触発されたのか、リーゼがぴょこぴょこと跳ねている。

「リーゼは体格的に難しそうなんだよなぁ。変身アイテムの着ぐるみが大人用だし」

「大人だけ狡(ずる)いノダーっ！　裁くゾーっ！　救世主(メシア)の怒りが聖戦の開演を告げル！」

リーゼ、めっちゃ怒ってるじゃんよー。ウチの駄々(だだ)っ子(こ)救世主(メシア)様は困ったもんだ。

「修くん、リーゼにお仕事を与えてやってくれないかなぁ。単純な子だから、おもしろそうなことなら食いつくと思うの」

「エミ姉の頼みなら断れないっすね！　俺にまかせてください！」

「やーん、修くんはやっぱり頼りになるなぁ♪」

エミ姉の頼みは断れるわけないっしょ！

さり気なく俺の肩とかに触れてくるので、密(ひそ)かに舞い上がってしまうバカ男。綺麗(きれい)なお姉さんにボディタッチされたらね、理性が簡単に殺されます。

「リーゼは個性の塊みたいなもんだし、上手にプロモーションできれば人気者になれると思うんですよね」

「私もそう思う！　この子、並の小学生じゃない。お人形さんみたいに可愛(かわい)くて幼い容姿が、大きなお友達にウケる気がする！」

三雲さんもリーゼの潜在能力に気付いたようだが、微妙に危ない方面を想定していそうなのは思い違いだろうか……？　マニア受けを狙ってるわけじゃないんですが……。

「さやねっこがギターを奏でたあと、リーゼが通訳するっていうのはどうだろう。リーゼのデタラメな翻訳に、三雲さんが鋭くツッコみながら場を和ませる～みたいな」

「それ、おもしろそうなアイディアだねぇ。リーゼのママは賛成です♪」

その笑顔、世界一可愛いです。

さやねっこも怒涛(どとう)のグーサインを突き付けてくる。こいつ、もうロリねっこだろ。

「オッケーっ！　さやねっこの設定を追加しておくから」

「三雲さん、さやねっこは実在するんです。着ぐるみという名称は変身アイテムの隠語ですし、実際に鞘音が変身しているんです。設定という表現は不適切ですね」

「お、おお……オーケー。松本君は、そういう概念に拘(こだわ)るタイプなんだ……」

三雲さんに多少引かれるほどの面倒なオタク青年こと、松本修です。

すでに、さやねっこの公式ＨＰやＳＮＳのアカウントは始動しており、プロフィールの欄に境遇を書き足す必要がある。さやねっこはギターの音色で語るネコだが、リーゼという専属通訳が日本語に直してくれる、という裏情報を。

「サヤネッコ！　今日から貴様を、リーゼの操り人形(マリオネット)にしてヤル」

ややこしい世界観を追加するのはやめてね。

「…………（ぎゅっ）」
ロリねっこさん、幼女を背後から抱き締めるのもやめてね。
「ふと思ったんだけどさぁ、着ぐるみの手だとギター弾けないんじゃないかなぁ？」
慎（つつ）ましく右手を上げたエミ姉が、問題点を指摘した。変身後の手のひらには肉球があるため、実際に演奏する際の繊細な指使いなど到底できない。
「鞘音、変身後の手だと弾き辛（づら）かったか？」
「…………（ぺこ）」
小さく頷かれる。さやねっこはもふもふの手のひらを広げ、俺の眼前に掲げてきた。
「確かに……これじゃあ、弦を押さえるどころかピックすら持ちにくそうだな」
「まあ、しゃーないよね。元祖のたびねっこはギターなんて弾かなかったし」
えへへ〜と軽快に笑い飛ばす三雲さんだが、これは早急に解決しなければ。
ＳＡＹＡＮＥが変身したゆるキャラが、ＳＡＹＡＮＥのようにギターを弾けるというのが売り文句なのに、満足に弾けないとか詐欺もいいとこだろ。
「ヒナちゃん、さやねっこのバージョンアップはアリなのかなぁ？」
「オッケーですっ！　元々、さやねっこは倉庫に眠っていたものなのでっ！」
ある程度は手を加えても大丈夫、ということらしい。
「鞘音ちゃん、ちょっと変身を解除してもらえる？」
エミ姉に促された鞘音は頭部パーツを外し、俺が背中のファスナーを引き下げると、着ぐるみからの脱皮が終了。変身状態が解除された。

エミ姉は天使の微笑みを解き放ち、俺にカッターナイフのレンタルを要求……カッターナイフ？　言われるがまま、松本家のカッターをエミ姉に手渡すと、

「あな、開けちゃおうかぁ♪」

金属の刃を焦らすように押し出し、サディスティックな美女へと変貌した。俺もエミ姉に穴を開けられてぇ……じゃなく、彼女の思惑はもしかして――さやねっこの改造手術！

「正清さんも手伝ってくれると嬉しいなぁ♪」

「おっしゃ！　まかせろっちゃ！　久しぶりに頼りにされた気がするど！」

屍になっていたトミさんが復活し、着ぐるみの手のひらに鉛筆で円を描いていく。一つではない。十円玉程度の大きさの円を、右手に五つ描いていった。

「あとは、円をカッターで切り抜いていくだけだねぇ。ギターを弾く指が出せるように」

「なるほど。指が出せる変身フォームにすれば、いつもと同じように弾けますもんね」

円の描き方が五本指の位置だったから、だいたいは察していた。変身アイテムの着ぐるみは新品でもないし、もはや穴を開けても怒る人はいない。

「リーゼも！　リーゼも！　聖剣を振るぅノダ！」

「はいはい、分かったからぁ。一人だと危険だから、ママと一緒にやろうねぇ♪」

「俺も一緒にやらせてけろ！　家族の共同作業のほうが楽しいおん」

トミさん一家が右手の作業に取り掛かった。リーゼがカッターを握り、トミさんとエミ姉が背後から補助。刃物で切りまくりたい活発な娘を父親が宥めたり、母親が「そうそう、上手いねぇ。リーゼは天才かも♪」なんて、優しく煽てたり。

本当に仲睦（むつ）まじい理想の家族は、幸せそうに光り輝いて眩（まぶ）しい。まさに、家族の共同作業。目の前で見せつけられると、俺たちもこうなりたいなって憧れる。

「俺たちは左手の作業をやろうか。さっさと終わらせて特訓に戻ろう」

「……うん。修は切るのが下手そうだから、わたしがカッターをやる」

「えー？　俺は図工の成績とか結構良かったじゃん？　じゃんけんで決める？」

こっちは精神年齢がガキなので、担当決めですらグダグダになるんだが！

「鞘音が切るみたいなので、俺たちは目印の円でも描きましょうか」

何気なく三雲さんに話しかけてみるも、

「………………」

一言で表すなら放心。ただ一点を羨望の眼差しで見詰めている。

「三雲さん？」

「……えっ？　ああ、作業ね！　さっさとやっちゃおうぜっ！」

ようやく俺の声に反応を示し、いつもの調子を取り戻していたのだが……彼女が口を真一文字に噤（つぐ）み、儚（はかな）げに見詰めていた視線の先には、三人の幸せな家族がいた。

くり抜き手術が終わり、鞘音がさやねっこに再び変身。

両手の指が外部にいつでも出せる状態になり、実際に指を全て出してみると、普通にギターを弾けそうな雰囲気だった。

演奏中は毛皮に包まれた手の甲しか観客側に見えないため、外見的な違和感は恐らく少ない。もし変身前の指が見えてしまったとしても、ギター演奏モードという御愛嬌でね。

台本の流れを一通り熟した頃には、すでに午後十時に差し掛かりそうな時間帯。明日も仕事の人がほとんどなので、今日のところは解散となった。

「リハーサルはするけど、自主練もしておいてっ！　キミたちなら、きっとできるさっ！」

玄関で靴を履いた三雲さんが、見送りの俺と鞘音に声援をくれる。特に根拠はない励ましだが、不思議と失敗する予感はしない。

成功したら嬉しいし、失敗しても笑い話になる。三日後のデビューが待ち遠しい。

トミさん一家と三雲さんが帰ったあと、実家に徒歩で戻る鞘音に付き添う。旅名川は不気味なほど寝静まり、お互いの呼吸音まで身近に感じるくらいの静寂だ。

素肌を削ってきそうな冷気に身を震わせ、凍えた背筋を丸めながら、鞘音の実家に着々と近づいていく。いつもなら徒歩五分だが、今の俺は……以前のように歩けない。意思に反して浸潤する身体の崩壊に、やり場のない憤慨を抱えて、無性に苛立つときもある。

すぐに切れてしまう息は白い靄と化し、氷点下の気配が漂う夜に何度も、何度も、攫われた。それでも、鞘音が歩行ペースを合わせてくれる。手を繋いでいると、二人分の体温が混ざり合う。手袋をしなくても問題ない。重なった肌は緩やかに熱を帯びていた。

恋人らしい飾ったデートなど、まったく経験がない。

しかし、俺たちにとっては、地元の砂利道を歩くだけでもデート。好きな人と手を繋いで寄り添えば、どんな風景にいても充実しているんだ。

鞘音の家に辿り着くと、俺たちは庭先で立ち止まり、決まって向かい合う。
「……修のジャージ、わたしが洗って返すね」
鞘音の左手には紙袋がぶら下がっている。俺が貸した旅中ジャージが折り畳まれ、綺麗に収められていた。
「わざわざ鞘音が持ち帰らなくても、俺んちで洗うのに」
「……そういうわけにはいかないの。わたし、いっぱい汗かいて……匂いとか……たくさん付いてるかもしれないし…………」
ブーツの爪先で路面の雪を弄り、もじもじと呟き始めた鞘音。
次第に声が擦れて消えていくので、ほとんど聞き取れない。
「汗がどうかしたのか？　洗濯すれば大丈夫だろ……ひゃあ!?　つめった……!?」
ご立腹の鞘音が蹴り上げた雪の粉は、月明かりを纏った流星となって降り注いだ。防御の薄かった首元に多少の雪が侵入し、情けない悲鳴が夜空に木霊してしまう。
「……修は乙女心を勉強して」
「ええ……どこがマズかったんだよ……」
ぷんすかと怒る鞘音も魅力的だから、むしろ勉強しなくてもいいかな、なんて。
「……修のジャージ、サイズが大きかったの。修の匂いも……たくさん感じた」
「ごめんな。一応、母さんが洗ってはいるんだけど……そんなに臭かった？」
「……ううん、心地いい。子供の頃から変わってなくて……すごく落ち着く匂い」
鞘音は野良猫みたいに気まぐれで、怒ったかと思えば笑う。不意打ちで微笑まれると、松本修の心は嬉しさで悶えまくるんだよ……。

抱き締めたい衝動に駆られるが、ここは鞘音んちの真正面。泣く泣く自重した……。
鞘音も両手を広げようとして、すぐに引っ込めてしまう。ひょっとして、俺が抱き締めるのを期待してくれた……とか？　ああ、俺のヘタレ……。ヘタレ息子よぉ……。
「……明日のさやねっこは自主練習。わたしが一人でやるわ」
「明日は病院に行く日だから、特訓に付き合うならその後になりそうだけど」
「……通院の日くらいは大人しく休んで。修は無理をしないほうがいい」
純粋に心配してくれる鞘音と、数秒間だけの視線を交わす。おぼろげな街灯に照らされた二人は、各々の道に歩を踏み出した。

愛してる、なんて気恥ずかしい台詞（せりふ）は口走らないし、向こうも安売りしない。
特別な日……例えば、二週間後のクリスマスなんていうのはどうだろう。日頃の好きな想（おも）いを言葉にして告げるには、これ以上ないイベントじゃないか。
とっておきのプレゼントを用意しているんだ。あいつは見なかったことにしてくれたが、こっそりと準備をしているから、楽しみにしていてくれると嬉しいな。

もっと一緒にいたいけど、明日もきっと会える。
また明日、と約束してくれる。
すぐ会える距離に、キミがいる。
今はただ、それだけでいい。

おやすみ――そう言い合う瞬間、ちょっとだけ恋人気分を味わっていた。

＊＊＊＊＊

翌日――俺は早朝に起床し、自室の灯油ヒーターを点火させる。

旅中ジャージの上に、半纏（はんてん）を着ているだけ。指先が凍りそうな厳しい寒さは、俺の奥歯をリズミカルに振動させた。灯油の独特な臭い。ヒーターの熱風に両手を翳（かざ）すと、凝り固まった指先がじんわりと解けていき、間抜けな声が吐息に混ざる。

意図的に火照（ほて）らせた両指は、愛機のシンセサイザーを滑らかに弾くため。冷え切ったモノクロの鍵盤に指を添え、時折パソコンのモニターを凝視し、想像した音を入力していく。

「はあ……」

数えきれない。思い通りにいかず、ストレスを凝縮した溜（た）め息（いき）と舌打ちの数を。

遅すぎた青春を得た代償は、予想以上に大きかったようだ。生き長らえた代わりに、失いつつあるもの。失わないように足掻（あが）いて、それでも歯車が狂っていく速度には勝てない。

でも、足掻くのはやめてやらない。

すまんな、神様。五年前のゴミクズは、もう死んだんだ。

桐山（きりやま）鞘音の隣にいる松本修は、どんなことでもできる。どこまででも、行けるんだよ。

「待ってろよ、クリスマス！」

一人でそう叫び、気合いを入れ直す。

「ほぉ、ヘタレ息子のくせにクリスマスに予定があるたぁ、青春してんねぇ」

「そうそう、ヘタレ息子なんで……」

一人で叫んだはずなのに、会話になってるなんておかしくない？

「てんめぇ……朝っぱらから、鍵盤をぴろりろと奏でやがって。通院の日くらい大人しくできねぇのか？」

「顔が怖いんですけど……許してください」

背後には阿修羅（あしゅら）。巻き舌で威圧を放つ母さんは、ヤンチャしてた時代の面影を彷彿（ほうふつ）とさせた。二十歳（はたち）にもなり、母親にマジ説教される男。朝っぱらからモニタースピーカーを通したままの音を家中に撒（ま）き散らしてしまい、息子は反省をしております。

しかし、母さんはあっさりと機嫌を直した。本気で叱るというよりは、病み上がりの息子を心配してくれているんだろう。

「朝飯できてっからな。今日はフレンチトーストにコーヒーだぜ」

「えっ……？　あなたはどちら様ですか……？」

「ああん？　お前をここまで育て上げたお母様に決まってんだろ」

炒飯（チャーハン）に麦茶は最高だぜスタイルで生き抜いてきたヤンママが、フレンチトーストにコーヒー……だと？　この人はいったい誰なんだ？

着替えもせずに台所へ移動すると、毎日会っている顔がテーブルの前に座り、マグカップのコーヒーを優雅に嗜（たしな）んでいるではないか。

「……おはよう、修」

「ああ、おはよう……って、どうしてお前が俺んちで朝飯を食べてんの？」

言うまでもなく鞘音だった。

「……フレンチトースト、食べるでしょ？　コーヒーも淹（い）れてあげるね」

「おっ、サンキューな！　……じゃなくて、いつもは自分の家で朝食を食べてから、ゆっくりと来てただろ？」

「……細かいことは気にしないで」

コンロに乗せられたフライパンから、フレンチトーストを皿に取り分ける鞘音。牛乳とバターの甘い香りが食欲をそそり、淹れたてのホットコーヒーより漂う豆の香ばしい匂いと湯気は、早朝の鋭角な冷気を緩和させた。

椅子に腰掛け、テーブルに提供されたフレンチトーストを齧（かじ）ってみる。卵のまろやかさと、バターのコクが食パンを包み込み、糖分が染み込んだパン生地が舌の上で解け、咀嚼（そしゃく）する度に優しい甘さがじゅわっと広がりながら蕩（とろ）けていく。

そして、一口だけ含む微糖のコーヒー。甘さでコーティングされた口内に、ほろ苦さという大人の後味が混ざり、ほっと心が落ち着いた。ホットだけに、ね。

俺が食べている姿を、鞘音は熱烈な眼差（まなざ）しで見詰めてくる。じーっと、ただひたすら眺められるのはむず痒（がゆ）いけど、新婚の朝みたいで……悪い気はしない。

遅れて気付いたんだが、鞘音は私服の上からエプロンをしていた。似合わない、と言ったら怒られそうだけど、家庭的な一面が新鮮すぎて見惚（みと）れてしまう。

「ちょっと仕事が忙しくてな、今日はお前を送り迎えできねぇんだわ。仕事柄、冬はどうしても繁忙期になっちまってよ」

コーヒーが注（つ）がれたマグカップを片手に、母さんが事情を説明し始めた。

プロパンガスや灯油を扱うガス屋の繁忙期は、消費量が最も増える冬季。有給や時短勤務の調整が難しかったという。

「そういうことなんで。ちなみに頼もしい助っ人(すけっと)が、お前を送迎してくれるそうだ」

「ま、まさか……」

俺の泳いだ視線が、鞘音のほうに引き寄せられる。

「……わたしが運転する」

おいおい……マジか？

「……不安そうな顔、やめて」

正直な顔面に浮き出ていたらしい不安を悟られた。

「……大丈夫よ。免許はちゃんと持ってる」

そういう心配じゃないんだよなぁ。

簡単に朝食を済ませた母さんは、新聞を読むヒマもなく、勤務先に出掛けてしまった。

鞘音と一緒に食器洗いを熟(こな)し、俺も外出するための身支度を整える。

洗面所の鏡に映った自分の姿と相対。堂々と背筋が伸び、清潔感が溢(あふ)れる顔立ちと生気が宿った瞳は自信の表れ。鞘音と再会する以前のゾンビ男など、完全に消え去っていた。

行ってくるぜ、期待と疑惧(ぎぐ)が混在する初ドライブに。

玄関から庭に出た瞬間、抜群の存在感を放つのは淡いピンクパール色の軽自動車。いかにも女子に人気がありそうなデザインは、鞘音の実家が本来の定位置。

鞘音の母さんが使っている車を拝借したのだろう。鞘音はスマートキーでロックを自動解除。なぜドヤ顔なのかは知らないが、ボタンを押せばできることだぞ。
俺が助手席に乗り込むと、運転席の鞘音がちゃんと暖房を起動させ——
「さ、さむっ……!?」
操作を間違えて冷房を作動させたらしい。悍（おぞ）ましいほどの冷風が吹き出してきて、心臓が止まる覚悟をした。
おいおいおい、大丈夫かよぉ。
「お前ってさ、自動車の運転は得意なんだっけ？」
「……東京ではマネージャーが運転してくれてた」
「ということは、ペーパーですか？」
「……でも雪は降ってないし、タイヤもスタッドレスだから問題ないの」
本当に大丈夫かなぁ……。
「……それに、４ＷＤだからね」
謎のドヤ顔、二回目。心配なのは車の性能じゃなくて、お前の運転技術なんだが。
気を取り直し、鞘音がハンドルを握る。車内が適度に暖かくなってきたところで、松本家を出発。天候は快晴とはいえ、内心はビビりながら行く末を見守るしかない。
「鞘音の家に寄ってくれないか？　車を借りるんだし、俺からも挨拶しておきたい」
初心者特有の前屈（まえかが）み運転になっていた鞘音が、ぎこちない手付きでウィンカーを出し、慎重すぎる低速で左折。桐山家への進路をとる。
徒歩だと五分のところ、車だと二分もかからずに到着した。

立ち寄っただけなので、鞘音は運転席にて待機。俺だけが駐車している車から降りると、角型スコップを用いて庭の除雪をしていた鞘音の母さんが出迎えてくれる。
「今日は車をお借りします。鞘音が事故らないように……安全運転を促しますので」
「うふふっ、大丈夫よ。あの子、今日は少し緊張してるみたいだけど、最近はワタシと運転の練習をしてるから」
「えっ？　そうだったんですか？」
「そうそう。『修が困ったとき、わたしが支えてあげたい』って、あの子が――」
「あ――――――――っ！　お母さん!!　それは内緒なのに!!」
でたっ！　車の窓を開けながら大声で威嚇モードのアニマル鞘音が！
「たぶん、修くんの家でフレンチトーストを作ったでしょ？　あれもワタシと前々から特訓していてね――」
ブンブン!!　ブーンブンブンブーン!!
「……修!!　早く行きましょう!!　お母さん、行ってきます!!」
鞘音が顔面を真っ赤に燃やし、パーキングのままアクセルを吹かす。爆音での照れ隠しを披露した恋人に急か(せ)され、俺は助手席に乗り込み、鞘音の家を後にした。
相変わらず、旅名川のデータベースはセキュリティが緩かったけど、俺の気持ち悪い笑みが止まらない有意義な情報なので改善されなくても良い。
「……ニヤニヤするのやめて」
にこにこ。
「……にこにこもやめて」

どうすればいいんだべや。むつけでしまった(いじけてしまった)ど。
思わずトミさん風に訛(なま)ってしまうくらいには、上々の気分が浮ついていた。
「……聞いてない」
ひたすら前方を注視して運転していた鞘音が、言い辛(いづら)そうに口籠っている。
「……料理の味、どうだったのか……まだ修の口から聞いてない」
なるほど。てっきり母さんが作ったと思っていたから、ロクに感想は口走らなかったけど、そういうことなら——
「正直に言ってもいいか？」
「……うん」
オーディオをオフにしている静かな車内。
息を呑(の)んだ鞘音の気鬱な緊張が、凍えた空気を介してこちらにも伝わってくる。
「マジで美味(うま)かったよ。毎日でも作って欲しいくらいだった」
「……そう。良かった」
意外と反応が薄い鞘音だったが、ハンドルに乗せられた右手の人差し指が、ぴこぴこと上下に揺れている。
「俺が営業の仕事で外出する日とかさ、気が向いたら弁当を作って欲しいな〜」
「……そこまで言うなら、作ってあげなくもないけど？」
維持していたポーカーフェイスが一瞬だけ崩れ、鞘音の口角がやや上向きに。
「鞘音もニヤニヤしてるじゃん。これでおあいこな」
「……してない。太陽が眩(まぶ)しいだけ」

一連の会話には中身なんてない。それでも、心が躍り狂うほど充実している。

たぶん、会話の中身なんてどうでもよくて、隣にいてくれる存在があれば、どんなことでも楽しめるんだと思う。

「……エミリィさんを乗せてもいい？　修のことを待っている間、エミリィさんと運転の練習をしたり、服を買う約束をしたの」

「エミ姉も参加するドライブとか、もう禁断の不倫デートじゃん……」

「……何を言ってるのかよく分からないけど、気持ち悪い妄想なのは分かるわ」

平日だし、トミさんは仕事中だと予想。白昼に人妻を連れ出しちゃいますねぇ。

トミさんが悪いんだ。美人なお姉さんのエミ姉を野放しにしておくから……！

バカ丸出しの妄想を繰り広げている間に、トミさんのマイホーム付近の路肩へ駐車。エミ姉が律儀に路肩で待ってくれていたため、タクシーのように後部席へ乗車してもらう。

「ワタシが一緒に混ざってもいいのかなぁ？　お邪魔虫じゃない？」

「いえ、エミ姉に構ってやらないあの男が悪いんだ……！　エミ姉は寂しがってるのに！」

「えっ？　どういうことぉ？」

意味が分からず、きょとんとしているエミ姉は素敵だ。

「……エミリィさん、バカの妄想に付き合う必要はないです。それでは発進しますね」

ゆっくりと前進した車は国道に合流し、春咲(はるさき)市中心部を目指そうとした矢先——ゴスロリ姿の見慣れた女児が、ランドセルを背負ったまま歩道を流離(さすら)っていた！

フリル付きの傘を聖剣に見立てて、素早い剣戟(けんげき)を繰り出している救世主(メシア)様。

当然ながら一人で、だ。

「あの子、何やってるのかなぁ？　もう学校は始まっている時間なんだけどぉ」

頬（ほお）に手を当て、美麗な苦笑いを禁じ得ないエミ姉。

ロリ山さんのセンサーが反応し、車の速度を落として接近するも……落ち着きがないリーゼは、とことこと無造作に走り出す。逃げるような小学生と追いかける不審車……危ない案件じゃない？　通報とかされないかな、大丈夫だろうか。

「グアァアアァアァアアアアアアアアアアアアア!?　氷雪系の魔法ダト!?」

凍結していた路面に足を滑らせ、滑らかに転ぶリーゼ。好機とばかりに路肩へ停車し、運転席を飛び出した鞘音が幼い身体（からだ）をがっちりと抱き起こして、後部席に押し込んだ。

これ……何も知らない人が目撃したら、幼女の拉致現場ですよね。冬の田舎道なので特に誰もいなかったけど！　誤解されても俺は関係ないからな。

「……ふう」

任務完了、みたいな清々（すがすが）しい鞘音の表情はなんなんすかね。

「リーゼを乗せたはいいんだけど、このまま連れて行くのか？」

「……後先は何も考えてなかった。ただ、母性が抑えきれなかったの」

ど真面目な顔で何言ってんの、この人。

「縛られた理（ことわり）ヨリも大切なコトがアル。リーゼ、白銀の世界を駆け抜け、戦場に帰還するタメ、このまま突き進むノダ。この世の刻（とき）はリーゼが掌握してイルゾ！」

「要するに『義務教育よりも大切なことがあって、小学校はサボった。それを見つけるために真っ白い雪道を流離っていた。めっちゃヒマだから、このままリーゼを連れて行け』ということらしいねぇ」

エミ姉の的確な翻訳に笑ってしまう。

さやねっこの通訳に任命したリーゼだけど、リーゼ語録の翻訳も必要な気がしてきた。

「……サボりはアーティストの宿命なの。リーゼちゃんもいたほうが都合はいいわ」

奇人の天才同士だから通じ合っているらしい。お前らは自由気ままに行動するけど、それに付き合う俺たち凡人は昔から苦労してたんだぞ。

「学校休むって誰かにちゃんと言ったのぉ？　黙って休むと心配されちゃうからぁ」

「ヨウスケにメッセージ送ッタ。戦場に赴く救世主（メシア）の使命を、盟友は分かってクレル」

今ごろ、同級生の陽介（ようすけ）あたりは呆（あき）れているだろうな。

分かるぞ、俺も似たようなもんだったから。

何はともあれ、女子小学生を拉致……じゃなくて、ドライブの仲間に加えた俺たちは、一先（ひとま）ず春咲総合病院へと安全運転で突き進む。

道中の車内は本当にくっだらない身内ネタで盛り上がったり、エミ姉チョイスの楽曲をオーディオで流しながら皆でカラオケ大会したり。

高校生の修学旅行バスかってくらい、無邪気に——はしゃいだ。

＊＊＊＊＊

病院のロビーで鞘音たちと別行動になり、俺だけがエレベーターで上階へ。
自動の受付を済ませ、待機用の椅子に腰掛けて待つ。こうして待っている時間も、新しい音楽の破片を紡いでは消し、繋げては壊し、理想の旋律になるまでの想像を繰り返す。
早く家に帰って、脳内の妄想を現実の世界に積み上げていきたいが……そのためには、アウトプットの基盤を維持する必要がある。
脳内の音を奏でるために必要なもの——身体の崩壊を遅らせねばならない。
「松本さーん」
ほどなくして、俺の名が呼ばれた。病院とは言っても、今日の目的は診察じゃない。
リハビリテーションセンター。様々な理由で衰弱したり、不自由に陥った身体の機能を維持・向上させるための場所に通っているのだ。
意外と広めの空間には、筋トレのジムにありそうな運動器具も多々ある。歩行用の手すりや簡易なベッドも設置されているので、病院特有の雰囲気は色濃く漂い、他の利用者もどこか覇気がなく、顔色が良好とはお世辞にも言えなかった。
「今日もよろしくお願いします。無理しない範囲で頑張りましょうね！」
出迎えてくれるのは、俺を担当してくれている理学療法士の女性。彼女の年齢は聞いたことないが、ナチュラルメイクの瑞々しい肌艶は二十代後半でも充分に通用する。
さっそく担当さんの手を借り、床に敷かれたマットに寝転がってのストレッチ。
膝を折り曲げ、担当さんが添えた手を押し返すように足を伸ばしていく。力を込めた足に触れることで、可動域や筋力を測っているらしい。
息を吐きながら、膝を曲げたり……伸ばしたり。ゆっくり、徐々に。

「焦らなくていいですからね。自分のペースで……息を吸ってぇ、吐いて」

担当さんは呼吸を促し、心身を落ち着かせてくれた。

大したことない単調な動きなのに、全身から大量の汗が滴る。思うように筋肉が稼働せず、無駄な部分に負荷が集中している。もどかしくて、無駄に苛々(いらいら)してしまう。

かなりきつい。完全に制御できない身体を無理に酷使するのは、こんなにも辛(つら)く苦しい。

「はあ……はあ……」

それでも、俺は続けられている。入院中からずっと、リハビリプログラムを休んだことはない。もちろん、術後あたりは体調も安定せず……強烈な吐き気、異様な倦怠感(けんたいかん)、食欲の低下による体重減少や栄養不足など、生きているだけなのに苦痛だった。

生き長らえた代わりに、失った感覚も少なくなかった。ここまで代償を支払っても完治しないのに、心が絶対に壊れなかったのは、なぜか。

鍵盤を弾きたい。思い描いた曲を、鞘音のために作りたい。

死の恐怖や未来への絶望に押し潰されそうな男を救ったのは、寝たきり状態のベッドから解き放ったのは、世界で一人だけの大好きな人。二人で紡ぐ音楽。

「松本さん、かなり歩けるようになってきましたね」

左右に並んだ手すりを掴(つか)み、真っ直(ます)ぐ歩行すると、担当さんに感心される。入院中は誰かの支えが必要だったけれど、現在は日常生活に支障はなくなった。

一単位は二十分。小まめな休憩や水分補給を挟みつつ、午前中は運動機能の回復に重点を置いたプログラムを熟(こな)していく。

「……はあ……はあ……くっ……」

酸素を取り込んでは吐き、浅く取り込んでは吐く。激しく息切れし、喉は震え、胸が締め付けられるほど苦しい。軽負荷のエルゴメーターを数分漕(こ)いだだけで、この有様だ。

「無理しないでください。自分のペースで、ゆっくり行きましょう」

　マイペースを意識しても、焦燥感が肉体を過剰に追い込もうとする。それに待ったをかけてくれる専門の人が側(そば)にいるのは、二人三脚で行うリハビリを選択した有意義な意味だ。

　一人だけの戦いだったら、焦りを胸に抱え込んで破裂していただろうから。

　激減した体力と筋力は戻っていないし、鍵盤に触れる指先の感覚が乏しい。左目の視力は極端に落ち、進行すれば日常生活に支障をきたす恐れもある。

　でも、俺は逃げ出さないと誓った。困難と向き合い、乗り越えるために足掻(あが)く。

　気が向いたときだけ一生懸命やるのではなく、担当さんと相談して定めた日程と時間を守り、こつこつと。音楽の上達法と同じだ。

　寝たきりや車椅子では到底味わえない景色を日々堪能し、地元の仲間と節操なくバカやれるだけで、俺はこの先も頑張っていける。

　クソみたいな運命を押し売りしてくる神様に、笑い飛ばして抗(あらが)えるんだよ。

「あれ、松本さんのお知り合いじゃないですか？　いつも一緒に来ている方々ですよね？」

　何気なく窓の外に視線を移した担当さんが、口元を綻ばせて窓の外を指さす。

　俺も窓を眺めてみると、病院の殺風景な中庭を見下(みお)ろすことができた。

「あいつら、何やってんだ……？」

気温が低い屋外は人通りが疎(まば)らとはいえ、お馴染(なじ)みの三人組が横に並び、台本を片手に話し込んでいるような挙動。鞘音とリーゼが身振り手振りでリアクションし、エミ姉が棒立ちで台本を見詰めている。すぐに理解できた。デビューを二日後に控えて、さやねっこの特訓をしているのだ。

何が『エミ姉と服を買いに行く約束』だよ。

俺の目を盗み、特訓をしているなんて……あいつらしいな。鞘音は努力を見せたがらない。俺を驚かせたくて、こっそり張り切る女の子だから。

そういうところも含めて、好きになってしまったんだ。

上階から俺が眺めているとは知らず、ぎこちない動きを繰り出しているシュールさ。腹の底からおかしくて、自然な笑いが零(こぼ)れ出てしまう。

時折、アドリブの動き。三人で打ち合わせをしては「うーん」と唸(うな)っているような仕草を見せ、下手くそな創作ダンスみたいなものを挟む。そして、また打ち合わせの繰り返し。

あいつら……独断で新ネタを加えるつもりだな。

担当さんも「あれ、忘年会の練習ですか？」と、含み笑いを抑えきれない。

堂々とネタ合わせしている三人娘の中心にいるのは、孤高の天才アーティストＳＡＹＡＮＥ。それがバレてないことだけが救いだ……。

今日は着ぐるみで顔を隠せないからか、伊達(だて)メガネにキャップという完全防備。たまに通りかかる医者や外来の一般人に、練習の成果を披露している……らしい。

あっ、青い制服を着ている病院の警備員が駆け寄ってきた。どうやら、謎のパフォーマー集団だと勘違いされたみたいだ。

どうするんだろう。そう懸念していた俺の度肝を抜く。

鞘音&リーゼ、まさかの全力逃走！　面倒な問答を避けるため、さっさと撤退してしまい、残ったエミ姉が申し訳なさそうに弁解している。

警備員の表情は穏和だったので、迷惑行為を咎（とが）めたわけではない。変わった動きをする三人娘を見かけたから、ただ声をかけてみた程度なんだろう。

邪魔者が去ったあとは、知らぬ顔でのこのこと戻ってくる鞘音&リーゼ。上階から一部始終を観察しているだけで、こうも愉快になり笑えてくるとは。

「松本さんは、ユニークな人たちに囲まれてますね」

「俺にはもったいないくらいの最高な人たちです。明日も、来年も、再来年も……ずっと一緒にいたい。バカなことをやっていきたいって思っています」

願いは——ただ、それだけだ。俺の身体が元通りに戻らないのは分かっている。これ以上……失わないように歩む。光明なんて見えないけど、隣にいてくれる鞘音を道標にして。

三時間のリハビリが完了し、担当さんに帰りの挨拶をすると、

「お疲れ様でした。後半はずっとソワソワしてましたね」

温かい苦笑いをされてしまう。やはり見抜かれていたようだ。

「早く行ってあげてください。大切な人のもとへ」

「……はい！」

いつもは鞘音に電話をするが、悪戯（いたずら）心が働いたので、今日は俺のほうから迎えにいってみよう。あいつの居場所は分かる。エレベーターを使えば、すぐに辿（たど）り着く。

引き寄せられる。あいつの声が、聴こえる場所に。
枷（かせ）となっていた足が軽やかに前後し、鞘音のほうへ導かれているかのよう。
消し去ってくれる。松本修にとって、地元の仲間と接する時間は、桐山鞘音を強く想っている時間は、すべての不安や苦痛を忘れさせてくれる。
　さあ、行こう。
　どんな治療や薬よりも、安心させてくれる人のもとへ。

　二日後の土曜日。
　地元民向けのさやねっこデビューイベントが、三雲旅館にて開催された。
　緊張のためか、アドリブなのか、台本通りにはまったく進まなかったし、仕草もぎこちなく、観客からの温かい失笑も絶えなかったけど。
　不器用でも頑張ったさやねっこに、地元の人々は盛大な拍手を送ってくれた。
　さやねっこ自体の知名度はまだ低く、現状だと客足もさほど伸びなかったものの、ＳＮＳでの拡散は予想以上。
　動画を観覧したユーザーは「これ、ＳＡＹＡＮＥじゃね？」「ギターの弾きかたがＳＡＹＡＮＥっぽい」「ＳＡＹＡＮＥの声だったってマジ？」「このクールなポンコツぶりはＳＡＹＡＮＥだよなぁ」など、古参ファンを中心に憶測が飛び交っている。
　どこかの一般人が〝変身〟して誕生した、さやねっこ。アーティストのＳＡＹＡＮＥではないため、無粋な疑念や勘繰りはやめていただきたい。

さやねっこは別の生物として実在し、旅名川を盛り上げるための使命を宿している。人間と同様の命がある。

俺は意外と頑固なので、そう主張していくからな。

「通訳のゴスロリ幼女かわええ」「SAYANEの妹なのでは?」「旅名川祭りでギター激ウマだった子やん」という番外編みたいな意見も、それなりに見受けられた。

大々的なデビューはスノーランタンフェスまでお預けだが、今日はキッカケの一日。

これから成長していくかもしれない種を、ちゃんと植えられたから大成功なのだ。

＊＊＊＊＊

さやねっこが、旅名川で細々とデビューした記念日の宵。

ナイター営業をしない田舎スキー場は、午後四時を以て本日の営業をクローズ。滑っていたスキーヤーとかボーダーも、日没を嫌って早々に宿泊先へと引き上げていった。

俺たち以外は、誰もいない。

彼方で燃え滾る夕日は、雪原のキャンバスに暖色のグラデーションを施す。お互いが上機嫌の祝杯ムード……

俺は日頃からチャンスを窺っていたが、今が掴む一瞬のとき。

やや心臓が鼓動を速めたので、一つ深呼吸。夕焼けが織り成す幻想的な雪景色は、恋人同士が触れ合うためにある。気取った台詞を囁くことも、寛大に許されてしまう。

イベントの直後、俺は直感に身を任せ、高揚を冬のおかげにして、ヘタレな口を精一杯開いていた。ちょっとだけデートしないか?　と。

勢いのまま、桐山家の軽自動車を鞘音が運転。この場所にやって来たというわけだ。

最後に訪れた瞬間の記憶を辿(たど)っていくと、俺たちは小学生。スキーの授業があったので、冬は頻繁に行き来していたが、当然ながら自由奔放には遊べない。

だから、休日を心待ちにしていた。鞘音の実家から借りたワゴン車を母さんが運転し、当然のようにいるトミさんとの四人で雪遊びをすることができたからだ。

小学校を卒業して久しい八年後……再び、ゲレンデに降り立つ俺と鞘音。

冬は毎日のように足を運び、雪に塗(まみ)れていた日々を遠く懐かしむ。

「……懐かしいわね。ゲレンデの雰囲気も、ほとんど変わってない」

旅名川スキー場。昭和初期に開業して以来、地元民に愛され、地元の人口や観光客が減り続けている現在も、冬になれば俺たちを迎え入れてくれる思い出の場所である。

山林の斜面を切り開いた大地を覆うのは繊細な新雪。山頂に登るためのリフトが三ヵ所あるものの、利用客の減少に伴い、二ヵ所だけの稼働になってしまったとか。

「……お店、ほとんど閉まってたね。ハイシーズンになったら開店するの？」

「いや、だいたいは潰れちゃってるらしい。この間、トミさんとドライブしたとき、説明してもらった」

引きこもりだった俺がトミさんに連れ出された日、この付近をドライブした。ロッジ、コーヒーショップ、レンタルスキー屋……だったと思われる店の廃墟(はいきょ)が、不気味に立ち並んでいる道沿い。昭和の香りが漂う字体の看板は、錆(さび)の侵食と色褪(いろあ)せが酷(ひど)く、駐車場跡地だとかろうじて判別できる部分は雑草の無法地帯。

そんな廃墟が十軒以上はあるということは、大勢の人々で賑(にぎ)わっていた過去があったのだろう。時代の移り変わりと共に衰退し、地元民に愛された風景は化石となってしまったのかもしれない。

「……それで、修はどうしてここに来たかったの？　もう誰もいなくなったんだけど」
怪訝（けげん）な表情の鞘音が、疑問符を浮かべる。
「俺たち以外に誰もいないってことは、貸し切りじゃん」
この広大すぎる真っ白な光景を汚すのは、俺たちしかいない。
まるで、冬の世界に二人だけが取り残されたかのよう。
ゲレンデの正面に、唯一現役の食堂がぽつんと佇（たたず）む。スキーの客は減少傾向でも、地元の親子連れがちらほらと遊びに来ているので、貸し出しているものがあった。
俺は閉店作業中だった食堂にお邪魔し、身長より若干低い『細長の物体』を、ご厚意でレンタル。物体を脇に抱えながら、軽快に戻ってくる俺を目の当たりにした鞘音は「ほんと、ばか」とでも言いたげに眉をひそめている。
「ソリで遊ぼうぜ！」
今の俺は童心に返り、瞳が輝きまくっていることだろう。
二十歳（はたち）がソリを片手に胸を弾ませているのだから。
「……ばっかみたい。子供じゃないんだから、付き合うわけないでしょ」
鞘音が呆（あき）れを混ぜた溜（た）め息（いき）を漏らすが、今の俺は怯（ひる）まない。
ロマンチックな冬のせいにして押し通すのみ。
「リハビリにはソリ遊びが良いってデータがあるらしい」
「……はあ？　医者が言ってたの？」
「松本修調べです……」

雑魚は威圧に屈し、大して押し通せなかった。
「昔は同じソリに二人で乗って滑ったじゃん……」
「……それは小学生の頃の話だから」
「俺は大きな小学生なんですよ……」
しょぼんと意気消沈した俺を憐（あわ）れんだのか、
「……分かった。暗くなるまでだからね」
「よっしゃあ！」
鞘音が観念し、仕方なさそうに折れてくれた。
本気でガッツポーズした彼氏に、心底呆れ返る彼女の図が完成。暗くなるまであと一時間くらいだけど、俺は鞘音の華奢（きゃしゃ）な手を握り、傾斜が緩いところをゆっくりと登り始めた。
三十メートルほど登った時点で体力的にきつくなり、ソリを雪上へ置く。二人用のソリの後方に俺が大股で腰を下ろし、股の間に小柄な鞘音がちょこんと座った。
「……二十歳にもなって、わたしたちは何をしているの？　修のそういうところ、バカ清に似て——きゃ!?　あああ——————っ!?」
鞘音のお小言を悲鳴に変えたのは、どさくさに紛れた急発進。ずんと尻が突き上げられる。斜面の起伏に伴い、一瞬浮き上がったり、左右に逸（そ）れる進行方向。
周囲の景色が急速に流れ、鋭利な向かい風を切り裂く感覚が、むしろ気持ち良い。
「ちょっ!?　修!!　真っ直（ます）ぐ滑って!!　ばか!!」
「ヤバいヤバい!!　何もできないんだけど!!」

ソリの紐（ひも）を必死に握り、手綱代わりとして進行方向をコントロールしていたが、速度が最高域に達すると制御不能に。ただ、勢いに任せて滑り降りるだけ。

傍（はた）から見たら、年甲斐（としがい）もなく無邪気にはしゃいだバカ二人。

でも、今日は二人だけの世界なので、俺たちは大きな小学生でも構わない。

健闘虚（むな）しく……俺たちは荒馬と化したソリから仲良く振り落とされ、ごろごろと雪上に転がった。八の字の状態で並び、頭が寄り添った仰向（あおむ）け。夕焼けから瑠璃（るり）色に変わりつつある冬空に——ぼんやりと視線を奪われる。

背中の体温が、段々と雪に溶け込んでいく。呼吸の音が際立つほどに静かだ。冬季なので虫の泣き声もなく、車もほとんど通らない。時間の流れを教えてくれるのは、雲の流れと空色の移り変わりだけだった。

二人は本当に取り残されたんじゃないだろうか。

生き残っている人類は、俺たちだけなんじゃないだろうか。

「ふふっ……なんか、ばかみたいね」

「変わってないな、俺たちは。ずっと……あの頃のままだと思う」

思わず吹き出した鞘音に釣られ、俺も微笑（ほほえ）んでしまう。

「いや……変わったな。俺たちは〝幼馴染（おさななじ）み〟から〝恋人〟になった。ただ遊んでるだけじゃなく、これも立派なデートになるんだよ」

「……恋人って不思議ね。ソリ遊びでもデートになるんだもの」

子供の頃と変わらない空を眺めながら、大人になって変わった想（おも）いを胸に抱く。いつもの適度な距離感から恋人の間合いへ。

お互いが自然に上半身だけを起こし、顔を相手の方に傾け、向かい合う。吐息まで感じられる。数センチだけ唇を前に出せば、重なってしまう距離にキミがいた。

「イヤホンを着けてくれないか？　お前がいつも使ってるBluetoothのやつ」

突然の頼みに困惑しながらも、鞘音は「……うん」と小さく頷き、ポケットに入れていたイヤホンを両耳に着ける。

俺のスマホとは、すでにペアリング済み。いつでも聴ける状態の鞘音に届けるため、俺はスマホに表示された再生ボタンをタップした。

画面の秒数が増えていく。鞘音の耳には流れ始めているだろう。

瞳を大きく見開いた鞘音は、意識を集中するために口を噤む。ただ、黙って耳を澄まし、ちょっとだけ早い〝クリスマスプレゼント〟に聴き入っていた。

一分が経とうとした頃……鞘音の瞳に滲むのは、透き通った清純な涙。

氷柱から溶け出す雫にも似た煌めきを放ちながら、一粒、二粒と頰を滴り落ちて、雪の絨毯に吸い込まれていった。震えた瞼が瞬きする度に、堪えきれない衝動が溢れている。

全部で四分三十六秒――感情の抑制ができない鞘音を、特等席で感じられて。彼女の頰にかかった前髪の一束が濡れているのも見逃さない。

「これが、今年のクリスマスプレゼント」

伸ばした人差し指。鞘音の頰にそっと触れ、涙と雪に濡れて光沢を纏う髪を、きめ細やかな肌を傷つけないよう、優しく払う。

「入院してたときから……こっそり作曲してた。鞘音と一緒に過ごす冬をイメージしてさ、Ｂメロまでは甘酸っぱいんだけど、サビは心を打つような切ないバラードにしてみたんだ」

潤んだ吐息を混じらせた鞘音が、押し黙ったまま頷く。

「本当は三曲くらい作ろうと張り切ってたんだよ。でも、一曲だけを間に合わせるのが精一杯だった。不甲斐なくてごめんな」

今度は、首を横に振る鞘音。そんなことない、と励ましてくれているのかな。

「……修はずるい。世界で一つだけのプレゼントを、いきなり渡してきて……嬉しいに決まってる。大好き……修がくれたこの曲も、修も……ほんとに大好きなの」

ふと、心地の良い重みと感触。戸惑いの泣き姿を見られたくないのか、ふいに鞘音が寄り掛かってきて、俺の懐へと顔を埋めたのだ。

「わたし……歌詞を書きたい」

「ああ、もちろん。鞘音が歌詞を書いてくれたら、この曲は完成する。そして……俺のために歌ってほしい」

「……うん。修のために歌う。最高のプレゼントを、あなたに贈るからね」

「三雲さんにも協力してもらって、最高のステージを用意することができた。クリスマスのスノーランタンフェス……プログラムの最後は、ＳＡＹＡＮＥのライブだ」

この場所を二人で見渡す。今はただの雪山だけど、二週間後の聖夜は様変わりしているはずだ。ライブハウスじゃないから、キャパなんて考える必要もない。

クソ田舎の山奥で撒き散らされるフリーライブだ。好き勝手にやってやろう。キスもしたことがない精神年齢中学生カップルが、ベッタベタに惚気た歌を聴かせてやる。

「……すごく嬉しい。嬉しいけど……わたしは怒ってる」
なぜなんだろう。
「まだ退院したばかりなんだよ……？　自分の身体（からだ）を……第一に考えてほしいの」
喜ばれた直後に、怒られる。
俺は尻に敷かれているから「ごめん」と、苦笑いの平謝りしかできない。
「修は気付いてなかったと思うけど、料理を作りながら、あなたの演奏を聴いてた……」
思い当たる節がある。それは、朝早くにフレンチトーストを作ってくれた日。
「**今の修が弾く音色**は……わたしを不安にさせる。いずれ取り戻せるんだよね……？　旅名川祭りのときみたいに……わたしの歌声を導いてくれるんだよね……？」
俺の両極端な心情がせめぎ合い、数秒の沈黙に陥る。脆弱（ぜいじゃく）な本音か、鼓舞する見栄（みえ）か。
「そのために、俺は……失った感覚のすべてを取り戻したい」
「それは、本当に〝取り戻す〟ためなの……？」
鞘音の躊躇（ちゅうちょ）ない疑問符は、剥（む）き出しの心臓に太い杭（くい）が打ち込まれたかのよう。
「取り戻すためなのか……**これ以上失わない**ためなのか……わたしには分からない……」
言葉の節々が潤み、不鮮明に揺れ動く吐息も微弱。俺の指先が触れただけで泣き崩れそうな脆（もろ）さは、五年前と酷似していて。
「修は、生き急いでる……。ゆっくりでいいから……二人の時間を歩いて行こうよ……」

ぽこん。俺の胸元を鞘音は力無く叩いた。どういう感情をぶつければいいのか、迷いに迷ったうえでの涙。
そして、衝動的に当て逃げされる懇願の握り拳が、辛辣に痛痒い。
「……ごめん。これからも心配をかけると思うけど、こんな彼氏を許してくれ」
もう一撃、ドアをノックするように小突かれる。
生き急がなきゃいけない。やりたいことは、やりたいときにやらなきゃいけないんだ。
「……約束」
俺と視線を交錯させ、小指を差し出す鞘音。
これは、中学の頃にもよくやっていた——指切り。
「来年も、再来年も……ずっと、冬が来たらソリ遊びしようね」
予想外の口約束を告げられ、俺は拍子抜けした。
「なんだ。嫌々かと思ったのに、お前も結構楽しんでたんだな」
「……別に、やるのはどんなことでもいいの。一緒に遊ぶってことは、隣に修がいてくれるって意味だから」
消え入りそうな微笑みを浮かべた鞘音が、俺の手を取り、小指を結ぶ。
俺とソリ遊びをする約束じゃない。
桐山鞘音が本当に約束したいのは——松本修が隣にいる未来。
「……修、指を切って」
指が無意識に震え、鞘音にもダイレクトに伝わってしまう。寒さなんかじゃなくて、指を切ることを躊躇している後ろめたさの表れ、なんだろうか。

神様、お願いだ。

俺を嘘（うそ）つきのゴミクズに戻さないでくれ。

中学の頃みたいな、無責任な約束にさせないでくれ。

大切な人を苦しませて、永遠に縛り続ける〝冬の幻想〟にならないでくれ。

時が止まればいいのに。

止まらなくてもいいから、幸せな季節がずっと巡ればいいのに。

何度も、何度も、転写されたような時間が流れてくれればいいのに。

絶対に叶（かな）う、という保証がない不透明な未来。

それでも、根拠のない展望は捨てたくない。

地元の仲間と、そして鞘音と過ごす平穏な日常は。

このまま、永遠に続いていくんじゃないかって——そう、切望するのは自由のはずだ。

二人は、静かに指を切る。

感じていた肌の温（ぬく）もりが離れて、日没と共に過酷さを増す寒気に攫（さら）われていく。

鞘音の体温を、匂いを、感触を、もっと。

固く結んでいた小指同士が綺麗（きれい）に分かれた瞬間、鞘音を力いっぱい抱き締めた。

誰も見ていない、存在していない。
どこまでも、地の果てまでも白紙と化した、冬の世界で。


第三章 親の前では強がるんじゃねぇ

スノーランタンフェスまで残り一週間。

積雪も徐々に増え始め、母さんが実家の庭をシャベルで除雪する回数も、日に日に多くなっていた。それでも追い付かず、何層にも織り重なっていく銀色の層。

俺も体力が許す範囲で手伝い、近所の人から借りた除雪機で雪を吹き飛ばす。

当然ながら、雪かきだけが俺の仕事じゃない。もうニートではないのだ。

会場の下準備やライブの告知も進行させつつ、松本(まつもと)家の隣に住んでいたイギリス人お姉さんの実家に、コソコソと通い詰めていた。

新曲のインストは完成している。クリスマスの本番に向け、演奏の練習がしやすい場所はエミ姉(ねえ)の実家だから、楽器隊の面々は自主的に集う……というのも理由の一つ。

スコアに書き起こすまでもなく、エミ姉とリーゼは耳コピで覚えてしまったらしいが。

「修(しゅう)くん、いらっしゃい♪　ゆっくりしていってねぇ」

いつも、神々しい笑顔で出迎えてくれるエミ姉。旦那が不在で近くにいないという背徳感が、底知れない興奮を密(ひそ)かに育む。

エミ姉に先導され、年甲斐(としがい)もなく心臓を高鳴らせながら二階への階段を昇っていく。

「どうして、ソワソワしてるのぉ？　ウチに来るのは慣れてるよねぇ？」

「俺とエミ姉の不貞関係も、ずいぶんと慣れたものになってしまいましたね」

「それを言うなら師弟関係だよねぇ♪　修くんは冗談ばっかり言うんだからぁ」

エミ姉にツッコまれてしまう。そこは不倫ごっこに付き合ってほしかったな。

俺だけが背徳的なシチュエーションを満喫しているやつみたいじゃん。実際、中学生みたいにドキドキしてるんだけどさ。
「鞘音（さやね）ちゃんは今日も作詞してるのぉ？」
「そうですね。あいつが作詞しているときは、なるべく邪魔しないようにしています。今日も旅名川（たびながわ）を流離（さすら）ったりしてると思いますよ」
あいつは中学時代、授業を抜け出しては作詞・作曲をしていた。放課後や休日は河川敷の周辺を放浪し、様々な感受性を培いながら、恋する女の子の歌として表現する。
大人になった今も、旋律に乗せる言葉の紡ぎ方は変わっていない。多少は丸くなったけど、音楽に関しては野良猫のように自由で気まぐれ。
今日も「……不機嫌な空は、わたしを待っているの」と、一般人には理解できない発言と共に、ふらふらと外出。田舎町の風景と同化した。
思い出が鏤（ちりば）められた情景を観察することで、ＳＡＹＡＮＥの代名詞『聴く者の共感を揺り起こす歌詞』が生まれる。心に深く響くようなフレーズが浮かんでくるのだ。
親身に寄り添ってくれる鞘音も好き。
でも、勝手にいなくなって、ふらっと帰ってくる鞘音も大好きで。
「あいつがフレーズを繋（つな）ぎ合わせている間、俺が何もしないで待ってるわけにもいかないので。以前から構想していた『第二の計画』を始動させようかなと」
二階に昇った俺は、廊下の突き当たりに佇（たたず）むドアを開ける。

そこには！　女の子らしいファンシーな小物やぬいぐるみ、淡いピンクの寝具で統一されたシングルベッドが俺を迎え入れてくれた！
ここはエミ姉の自室。彼女が生まれてから、十九歳で結婚するまでの時を過ごしたところであり、俺が子供の頃には何度も訪れていた懐かしの部屋だ。
ああ、エミ姉が芳香剤になったような甘美の香り。写真立てに飾られている写真は学生時代のエミ姉。しかも高校の制服姿。これ……反則級の美しさでは？
エミ姉と制服デートしたかったな……。豊臣正清（とよとみまさきよ）とかいう金髪色黒サーフ野郎（約十年前）とのツーショットなプリ画は視界から排除しとこ。
くっそ、羨ましい。ふざけんな、バカ清が。どうせガラケー片手に黒歴史の自己紹介サイトやってた頃だろ。調子こいてＶネックシャツとか着てんじゃねぇよ。
精神が暗黒に染まりかけたが、緩やかに深呼吸。身体（からだ）に浸透するエミ姉の香りは、興奮物質を抑えてくれる働きがある。医学的な根拠はない。そして興奮する（矛盾）。
部屋に充満したエミ姉成分を久しぶりに摂取し、妙な感動すら覚えていた。
仲睦（むつ）まじい二人の写真にも拘（かか）わらず、登場頻度が高い第三の人物。彩度が高いロングの茶髪はお洒落（しゃれ）に巻かれ、ゆるふわな毛先が遊び心を演出。メイクもやや派手めで、制服も着崩しているという、見るからにチャラそうな外見の女性……見覚えがあるぞ。
「エミ姉、このギャルってもしかして――」
「うん、ヒナちゃんだよぉ。中高生のときはギャルだったからぁ」

やっぱりな！　現在はだいぶ落ち着いてるけど、面影はある。喋（しゃべ）りかたとか絡みかたがふわふわと軽いし、トミさんとのコンビに違和感ないし。

ギャル男とギャルに挟まれたエミ姉が、恐ろしく清楚（せいそ）すぎて美麗に引き立つ。ギャルは嫌いじゃないけど……天然素材も素晴らしぃよね。

写真が新しくなるにつれ、三雲さんの容姿も落ち着いてくる。変化が顕著に表れたのは、赤ん坊のリーゼを抱いた豊臣夫妻と写る一枚。新婚当初の二人に挟まれた後輩の髪型は、毛先が肩を擽（くすぐ）るショートボブ……現在の社会人な三雲さんに最も近ぃ。

大学生になり、メイクやファッションも大人びてきたと言えば、それまでだけど。

「おーい、修くーん……部屋をじろじろ見られると、ちょっと恥ずかしいんだけどぉ」

眉尻を垂れ下げた困り顔のエミ姉に免じて、部屋の観察タイムは切り上げよう。松本修はエミ姉の話題になると気持ち悪くなるって……最近、やっと気付いたんだ。

しょーがないもん。今は彼女がいようと、エミ姉で育ったんだもん。

鞘音がいたらジト目で苦言を呈されそうだけど、自分……ニヤニヤしていいっすか？

しかも！　壁掛けのハンガーに吊（つ）るされていた見覚えのありすぎる服は⁉

「あれ……旅中（たびちゅう）の制服ですよね⁉」

「そ、そうだけど、そんなに食いつくとこかなぁ？」

「女子の部屋にある中学時代の制服ですよ？　健全な男子はたぶん食いつきますよ？」

「ええ……？　旅中の制服なら鞘音ちゃんも持ってると思うケド」

ガチで興味津々の俺に困惑しているエミ姉の反応は正常だ。

「鞘音はまだ学生感が残っているというか、制服を着たとしても割と自然に似合うと思うんです。でも、エミ姉は艶のある人妻だから、着ている姿を想像するといろんな意味でヤバいんですよね」
「も、もう！　どういう意味なのか全然分かんないからぁ！」
「俺をこんな風に育てたのはエミ姉なんだけど！」
「そんなこと言われても知らないしぃ〜っ！　あの可愛かった修くんが変態くんに育ったのを、ワタシのせいにしないでよぉ〜っ！」
ぷっくりとむくれたエミ姉が、人差し指で俺の頬をぷにっと突く。
これが学生の頃だったら、思い出にも色濃く残っていただろう。学生時代の恋愛に異様な憧れがあるのは、俺自身がほとんど経験してないからかもしれない。
当時の鞘音とはあくまで幼馴染みだったし、絶縁していた期間は独りだった。
学校帰りや実家での甘酸っぱい制服デートも、青春アニメの定番みたいな制服でのライブも、未だに強く憧れている。
「エミ姉……可愛い弟みたいな松本修から、一生のお願いがあるんだけど」
「いやですぅ。そんな弟はいませーん」
「えええええええええええ……？　頼むよ、エミ姉ぇええええ……」
一生のお願いの内容は言わなくても伝わったらしく、即答で断られた可愛い弟（自称）は四つん這いで項垂れてしまう。
「制服を着てください……。今日だけで良いから……お願いします！」
四つん這いからのスムーズな土下座。健全な男として、これは引き下がれない戦いだ。

「うーん……そんなに頼み込まれたら、断りづらいよぉ……」
あれ？　この反応、しつこく押せばいけるやつでは？
「制服のエミ姉と実家デートできるだけで、俺の感受性がもっと豊かになる。学生みたいな青春を疑似体験できたら、それが曲作りにも活(い)かされていくんだ！」
もはや必死のタメ口。それっぽい理屈で言い包(くる)めようとする。
「レッスンの先生だったんだから、責任を持って生徒の世話をしてくれよぉ……ううっ」
下手くそな泣き真似(まね)も始めた。せっかくの好機、なりふり構っていられるか。
「……それじゃあ、一度だけだよ。正清さんには内緒……だからね」
「……はい!!」
念願叶(かな)って、歓喜の雄叫(おたけ)び。
いやいやいや、誤解はしないでほしい。エミ姉の言葉だけだと、やましいことを要求したように思われてしまうが、隣人のお姉さんに「中学の制服を着てほしい」だけなんだ。
「着替えるから……わたしが許可するまで、部屋の外で待ってもらえるかな？」
生唾をごくりと飲み干し、俺は無駄に緊張しながら部屋を後にしようとしたら——
「リーゼ、千年待ちわびタ怒りは天地を崩壊に導くゾ」
部屋のドアが勢いよく開放され、ゴスロリ幼女が仁王立ちしていた。小さな身体でふんぞり返り、堂々と腕組み。子供っぽい八重歯を垣間(かいま)見せて、お怒りモードだった。
「リーゼが主役なノダ！　いつまで待たせるノカーっ！」
「ごめん……！　つい、エミ姉と変な雰囲気になっちゃってさ……」

「変な雰囲気とは……ナンダ？　なんでママはズボンを脱いでいるノダー？」
きょとんとする無垢（むく）なリーゼが、俺の背後を指さす。ああ、何となく分かったけど。
「しゅ、修くん……！　絶対に振り向かないでね……！」
「は、はい……！」
背中越しのエミ姉に釘（くぎ）を刺された。どうやら、制服に着替えようと思ってズボンを脱ぎ始めた直後にリーゼが襲来したらしい。ロング丈のニットセーターを着ていたから、かろうじて隠れている状態だろう。想像ですけどね。
ズボンを穿（は）き直しているような音が耳に届き、激しい動悸（どうき）が収まらない数秒を耐え忍んで、エミ姉のほうに踵（きびす）を返した。お互いに視線を合わせたり、逸（そ）らしたり。
頬もじわりとした微熱を帯び、猛烈に照れ臭いな……。
「あらあら、あらあらら♪　なんだか楽しそうですネ」
語尾にカタコトの風味が残る女性も、ちゃっかり部屋を覗いていた。エミ姉を彷彿（ほうふつ）とさせる自然なブロンドの髪、青く透き通った水晶玉のような瞳、ナチュラルメイクでも純白な肌艶……そして、豊かに実ったバストサイズ。エミ姉の姉妹、ではない。
俺もよく知っている、この若々しい外国人の正体は。
「もぉ〜、ママまで来なくていいからぁ！　修くんとお話ししてただけだってぇ！」
「リーゼとお部屋を覗いてたんだケド、怪しい雰囲気だったヨ〜？　不倫でもしてたんじゃないカナ〜ナンテ♪」
「ママぁ！　変なことばっかり言ってぇ！　不倫とかじゃないからぁ！」

そう。このお茶目なイギリス人女性は、エミ姉の母親である。俺も音楽教室でお世話になっていたため、そこそこの顔馴染み。お隣同士という距離なので、松本家とスターリング家は頻繁に挨拶をし合う親しい仲だ。

「でもぉ、修クンはエミリィにコスプレさせて楽しんでたデショ？　ワタシも混ぜてほしいなぁナンテ～♪」

「ナンテ～じゃなくってぇ！　あっ、こらこらぁ！」

小悪魔なママに翻弄されるエミ姉。娘が着ようとしていた中学の制服を、エミ姉ママが拾い上げ……なぜか、スカートをズボンの上から着用し始めた。

スカートのファスナーを閉め、ズボンを脱ぐ。そのまま、私服のブラウスにブレザーを羽織れば――現役の中学生に若返りじゃん。

「じゃーん♪　どうですカ？　今年でアラフィフですケド、似合いマスカ？」

アラフィフ……だと？　ちょっと無理した若妻だろ。しかも、大学のミスコンで優勝経験がありそうな音楽優等生の美人奥さん。エミ姉が清楚だとしたら、エミ姉ママは芸術。

みんな違って、みんな良い。使命感が叫ぶ。旅名川の天然記念物は保護しなければ、と。

「この勢いでさ、エミ姉も……制服を着てくれないかな？」

「ど、どうしてそうなるのぉ！　親子揃って中学のコスプレとか、おかしいよぉ！」

「おかしいなんて誰が決めたの？　俺はそうは思わない。奇跡だよ……スターリング母娘の制服姿は、俺が写真と動画に残しておかなきゃダメなんだ。旦那にも見せない恥じらいの顔を見せてほしいと本気で思ってる」

「え、えええ……？　で、でも……お母さんも着てるし……一度は許しちゃってるし……」

一度、（コスプレに）身体を許しそうになったエミ姉は、一日限りの（コスプレ）関係を熟考している。もっと推せば、母娘の旅中コスを撮影できるのでは……？

「コラーっ！　リーゼ、怒ってるゾーっ！　何をしに来たノカーっ！」
蚊帳（かや）の外になっていたリーゼ師匠に激怒され、ふわりと浮ついていた人格が正された。
「そうだよぉ！　修くんは目的を忘れてるぅ！」
「そ、そうでした！　俺がここに来ているのは、新曲の調整をするためでしたね！」
「その通りダ！　それなのに、ママとシュウは裸にナル奇妙な儀式をして楽しんでイタ！　平民（パパ）に内緒で秘密の快楽に浸っていたノダ！」
蔑（ないがし）ろにされてしまい、ギャーギャーと喚（わめ）き散らすリーゼ師匠。
その抽象的な言い方だと、めちゃくちゃ語弊があるからやめてくれーっ！
「グランドマザー！　音楽に生きる者とシテ、恥ずかしいとは思わないノカ！」
「ぐ、グランドマザー……孫娘に言われると、年齢を実感してショックですネ……。ご近所さんに『大学生と見間違える』とチヤホヤされて、調子に乗ってスミマセン……」
制服姿で四つん這（ば）いになり、激しく落ち込むエミ姉ママ。ふらふらと亡霊の如（ごと）く立ち上がり、制服のまま一階に降りて行った。
「そんなつもりじゃなかったんだ。謝るから許してくれ……特に鞘音には言わないで」
「ダメ。禁忌を犯シタ者は、火炙（ひあぶ）りの刑しかあるマイ」
ひでぇ。エミ姉に制服を着てもらいたかっただけなのに……。
「笹（ささ）かまぼこを買ってあげるからさ」
「我、救世主（メシア）につき寛大ナリ！　罪人を許すゾーっ！」

ちょっろ。好物の笹かまで釣ると、リーゼはニッコリとした子供らしい笑顔に。
所詮は九歳児。大人の余裕を見せつけてやったぜ……などと供述している二十歳(はたち)だが、興奮と焦燥が混ざった情けない汗が氾濫危険水位だったのは内緒にしておく。
エミ姉の私物や香りばかりに心を奪われていたが、俺がこの部屋に来たのには、れっきとした大義名分がある。be with youやLoss Timeを配信する際も、正規音源の収録・編曲を手伝ってもらっていた。
部屋の一角にどっかりと胡坐(あぐら)をかいたシンセサイザーは、マスターのMOTIF-XF7と、サブのW5-Version2。デスク正面とサイドの一台ずつがデスクトップパソコンに接続され、使い古したレトロな機種は、常時稼働できるようにメンテナンスも施されている。
モニタースピーカーやシーケンサー等も抜群の存在感を放ち、大半が日本のメーカーで統一されていた。
「今回もお世話になります。新曲のデモは鞘音に渡したんですけど、ダウンロード配信用の正規音源はエミ姉やリーゼと一緒に編曲・レコーディングしていったほうが、クオリティは絶対に上がると思うんですよね」
鞘音に渡した新曲のバラード。メロディの骨格は築いたので、音楽に愛された母娘に助力してもらい、十人十色のファンも満足できる装飾を施していきたい。楽器パートも打ち込みではなく、可能な限りは生演奏を収録していけたらと考えている。
俺はもう、一人で抱え込まない。至らない力を補ってくれる人たちがいるから。
「愛弟子(まなでし)の修くんに頼まれたら、ワタシは喜んで協力する♪」
「ハハハハッ！　小僧、ようやくリーゼの偉大さが分かったカ！　ひれ伏すノダ！」
九歳に小僧扱いされる二十歳。

作曲だけなら俺の部屋でも可能なのだが、複数人で編曲する場合は音を普通に出せる環境のほうがやりやすい。エミ姉のお手本的な演奏を聴いたり、リーゼにギターを弾いてもらいたいし。防音どころか、喋り声も筒抜けの松本家平屋では難しいのだ。

それに、エミ姉の実家にはレコーディングブースもある。様々な音楽機材や高スペックのパソコンを、無料で貸してくれるのもありがたい。

「小僧、忘れるなヨ。いずれ聖戦の勝利者になるノハ、サヤネではなく、このリーゼロッテ・スターリングだというコトを」

「へいへーい」

「返事が軽いノダ！　神の名におイテ処刑するゾ！」

ちっこい救世主様のお叱りを受け流し、ワークチェアに腰掛けて作業を始めた。

すぐ隣に座ったエミ姉と肩が触れ合ったり、俺がふと思いついた鼻歌をエミ姉が鍵盤で弾き奏でてくれたり、先生と生徒が織り成す共同作業の素晴らしさよ。

「ココ！　もっとギューン、ギギギ！　ジャジャーギュルル！　ツッタンタン！」

リーゼ師匠の意見も取り入れたいんだけど、ほぼ擬音でさっぱり理解できない……。天才というものは、自分の感覚だけで生きているからホントに困る。

「えーっとぉ、リーゼが言いたいのはぁ……」

エミ姉が翻訳してくれるから問題はないんだけど。

「違うノダ！　リーゼが言ったコト、すぐ忘れル！　ジャジャ！　ツクツクツーン！」

「リーゼ師匠！　す、すみません！」

この九歳児、音楽に関しては想像以上にスパルタだった。

齢数百歳のロリババアに叱られている気分になっていたところに、
「リーゼ！　お前こそ忘れてんじゃねーよ！」
またもや小さい来客が、ご立腹を表明。
部屋の入口に立っていたのは、リーゼの同級生である陽介だった。
「アッ、ヨウスケじゃないカ。ついにオルレアンを目指すトキが⁉」
「オルレアンじゃなくてレッスンの時間だろ！　約束してたじゃん！」
「…………オー、そうダッタ。ちょっと聖戦に行ってクル」
ウチの救世主様は、コンビニに行くようなノリで聖戦に行くらしい。
旅名川祭りの後日、陽介はリーゼに弟子入りしていた。音楽教室のお隣に住んでいる俺とは、たまーに遭遇しているので、とりあえずは通い続けているみたいだな。
「そういえば、一階で制服の女性と擦れ違ったんだけど、リーゼに姉ちゃんなんていたっけ？　綺麗なお姉さんだったなぁ……」
「何を言ってイル。頭がおかしいノカ？」
「いやいや！　いたんだよ！　外国人のお姉さんが、旅中の制服を着てた！　リーゼの姉ちゃんなんだろ？　そうなんだろ？」
俺は思わず、薄ら笑いを吹き溢しそうになる。陽介……それはリーゼの祖母だよ。制服姿のまま、家をうろついてんだよ。
それはともかく、陽介と個人レッスンの約束をしてたリーゼが、一時的に抜け出してしまう。人妻と二人きりかぁ……娘がいない間に、どんなことをしようかな。

「ワタシたちは真面目に編曲していこっかぁ♪　どんどん進めていかないとねぇ」
「もちろんです。俺は音楽のことしか頭にないので」
エミ姉の純粋な微笑(ほほえ)みに圧倒され、煩悩を抱いていた自分を恥じる。
去れよ、邪念。俺には桐山(きりやま)鞘音という素敵な彼女がいるんだぞ。
ぐちゃぐちゃに掻(か)き消すぜ。騒々しいリフで不埒(ふらち)な妄想を！
もちろん、変なことは何も起こらず。真面目に編曲を熟(こな)しつつ一時間ほど経過した休憩中、一階から響くのは子供同士が言い争うような声。
普通のレッスンをやる時間帯ではないので、一階にいる子供はあいつらだけだ。休憩のコーヒーを淹(い)れにいったエミ姉の後を追うように、俺も一階へ降りてみる。
「うっせぇ、ばーか！　もう来ねえからな！」
陽介と思われる甲高い声が、幼稚な捨て台詞(ぜりふ)を吐く。
窓の外に視線を移すと、一心不乱に走り去っていくのが確認できた。
レッスン部屋に、ぽつんと残された少女。床に両足を伸ばして座り、アコースティックギターの弦を力無く鳴らす。冷静な表情は保っているが、物悲しい哀愁を背負っていた。
「陽介くんと喧嘩(けんか)したのぉ？」
「ケンカじゃナイ。ヨウスケは聖戦の重圧に耐えらレズ、敵前逃亡したダケだ」
レッスン中に口論してしまった……みたいな顛末(てんまつ)かな。
「最近、多いよねぇ。陽介くんは初心者なんだから、優しく教えてあげないと」

「……ムムッ、新兵は訓練を怠ると戦場では生き残れナイ」
「もぉ、いっつもそんなこと言ってぇ」
「強者はイツモ孤独。我もまた、栄光ある孤独ナリ」
エミ姉が呆れ混じりの溜め息を漏らす。こうして陽介と喧嘩するのは珍しくないのか、エミ姉も苦慮しているようだ。
リーゼも意地を張り、陽介を強く引き留める気は感じられない。
「まあ、次の日には陽介くんも戻ってくると思うよぉ。あの子たちは幼稚園の頃から喧嘩してばっかりで、もう慣れっこな光景だしねぇ」
「そんな感じはします。子供のうちは、本物の恋愛感情なんて気付けないですよ」
恋をしてしまったら、自分自身の気持ちからは逃げられない。
手遅れになる前に、相手が離れていく前に、意地を張らず向き合えるかどうか。
やがて自覚する恋心を、誤魔化さないで素直にぶつけられるか。
陽介が辿っている道筋は、過去の俺を複写したかのようで。
「エミ姉の両親とか、エミ姉が直接教えてあげればいいと思うんですけど」
「そのつもりだったんだけどさぁ、陽介くんの強い希望なんだよねぇ。もしかしたら、陽介くんは――」
次に続く言葉は、俺の予想と同じだった。
「好きな人と一緒にいる口実が欲しいだけ、なんじゃないかな」

どうりで、じくじくと痛痒（つうよう）を生じさせる共感をするわけだ。

ガキの幼稚な喧嘩。今のところは、それ以上でもそれ以下でもない。思うところがあった俺は陽介の影を探したが、目視できる範囲に姿は見当たらず。

こういうときは、町の便利屋に相談してみるか。

『――お前、俺のことを町の便利屋か何かだと勘違いしてっぺ？』

「えっ？　違うの？」

『――違げぇよ。ごく普通のワイルドイケメンだべや』

はあ。

『――おい、聞こえてんぞ。でっけぇ溜め息やめろっちゃ』

エミ姉んちの軒先に帰投し、俺はスマホ片手に兄貴分へと電話を繋（つな）いでいた。今日は週末だから、トミさんは休日だったはずだと期待して。

「陽介を探してるんだけどさ、どっかにいない？」

『――分かるわけねえべ。俺は杉浦（すぎうら）んちの雪かきしてるんだど』

町の便利屋じゃねーか。

「今年もご苦労様です。ついでに俺んちもやっといてよ」

『――依夜莉（いより）姉さんに言われたら喜んでやるげっども、お前は誠意がこもってないから嫌だなや』

毎年、トミさんはご年配の人が暮らす家庭を中心に雪かきして回っている。もちろん給料は支給されず、近隣住民にお願いされてのボランティアだ。

事情を話すと、トミさんはだいたい把握したような相槌の声を返す。
『――陽介んちの前で待ってれば、すぐ帰ってくんべ。あいつを摑まえたら、そっちに連れてくわ』
どうやら、陽介の家で待ち伏せるようだ。
何か困ると、すぐにトミさんやエミ姉を頼ってしまう。それでも、あの人たちは穏和に話を聞いてくれて、優しく受け入れてくれる。
「これからエミ姉んちを雪かきしたいんだけど、手伝ってくれない？」
『――元々、大雪が降る前にやる予定だったし構わねえど。エミリィの実家は無駄に広いから、むしろ手伝ってくれるとありがてぇ！』
こういうふうに、陽気な声色で付き合ってくれる。
だから俺も、困っている誰かに、迷っている誰かに、頼られるような存在になっていきたいな。地元の人々に救われた男の――自己満足なお節介だとしても。
軒先で十分ほど待った頃、トミさんの軽トラックがエミ姉の実家に到着。拗ねた子供の捕獲は予想以上に早く、表情を気まずそうに曇らせた陽介が、助手席から降りてくる。
「もう来ねえとか宣言したのに、あっさりと戻ってくるんだな」
「トミお兄ちゃんが、雪かきの人手が足りてないっていうから……親切心だよ！　というか、マジでやるの？　リーゼんちの庭って、かなり広い気がするんだけど!?」
スターリング家の豪邸を目の当たりにし、慄いている陽介。

中学の同級生から「お前んちってさ、エミリィさんちの物置かと思ってた」と、半笑いでいじられてたのを思い出す……っていうのは、今どうでもいいんだけど。

リーゼと目が合う。二階の窓枠からひょっこりと目元だけを出し、こちらの様子を窺(うかが)っていた。庭の雰囲気を偵察しているのだろう。

「陽介が戻って来たぞー。リーゼも外で雪かきしない？」

呼びかけてみるものの、いじけているリーゼは窓枠の陰に隠れてしまった。

「これは聖戦！　敵前逃亡した臆病者は死を意味スル！」

「リーゼロッテの名において命ズ。ヨウスケは帰レ！　滅ビロっ！」

「オレだって好きで戻って来たんじゃねーからな！　お前なんか知らねーよ！」

性格が捻(ひね)くれている陽介も虚勢を引っ込めない。俺と鞘音の幼少期も似たようなものだったので、どちらかといえば微笑ましいなぁ……という傍観者の視点。

フレンドリーな空気を醸し出し、リーゼと陽介を自然に遊ばせるという浅はかな仲直り作戦を始めようか。まあ、ただの雪かきなんだけどさ。

「ふふっ……トミさん、ウケるんだけど」

「は？　笑う要素なんてねーべや！　俺らの時代は、これがイケてる男だったんだど！」

トミさん、まさかの半袖短パン夏用旅中ジャージ。真冬にTシャツとハーフパンツなのも笑えるのに、袖を捩(ね)じり捲(まく)ってのヤンキー体育祭仕様なのが腹筋を苦しめる。

「センパイは、ほんとバッカだよね～。中学の頃から何も成長してないもん！」

嘲笑いながら徒歩で参上したのは、同じく旅中ジャージを着た三雲さん。さすがに冬用の長袖長ズボンとダウンジャケット、厚手の手袋という防寒装備だったけど。

「毎年、エミリィと近所の雪かきしてたんだが、今年はエミリィの音楽教室が盛況みたいでな。ヒマそうなヒナに声をかけたら、休みの日は手伝ってもらえることになったべな」

「ヒマそうなって失礼ですねっ!? まあ、正清センパイとかエミリィセンパイと違って独身貴族だし、休みの日は寝てるだけなんでいいですけどっ!」

後輩に自虐ネタでにじり寄られ、たじたじの情けないトミさん。今日は先輩後輩コンビで近所を除雪していたらしい。地元で就職している二人は、旅名川に現存する数少ない若手の貴重な戦力。どこの家庭からも引っ張りだこなのは必然なのだ。

「でも、今日みたいにセンパイと休みが合う日なんて珍しいですからね。カレンダー通りのセンパイと違って、私は世間が休日のときに忙しい職業なんで」

「いやぁ、貴重な週末の休日にありがてぇ。同級生はだいたい遠方に住んでてよ、ヒナがいてくれてマジ助かる！」

「えへへ〜っ！　私がいてくれて有難いでしょ〜っ！　もっと褒めて頼りにするのだぁ！」

休日に無給の肉体労働させられて不満かと思いきや、三雲さんはまんざらでもないらしい。彼女が晒す表情や声音に混ざった歓喜の心情が、こちらにもしきりに届く。

「今思ったんだけど、どうして二人とも旅中ジャージなのぉ？」

軒先に出てきたエミ姉が疑問を投げかける。それ、俺も激しく思った。

「最初、ヒナに手伝いを断られたんだけっども、正清センパイが旅中ジャージを着るなら考える～とか言い出してな。まあ、お安い御用だからまったく構わねぇけど」

「だってぇ、中坊に戻ったみたいで楽しいじゃないですかぁ。気分ですよ、キ・ブ・ン」

唇に人差し指を当てた三雲さんだったが、防寒スタイルのせいで色気の欠片（かけら）も感じない。

同じような格好で並ぶと、仲の良い兄妹（きょうだい）にしか見えないな。

「それにぃ、雪かきで訪ねた各家庭にスノーランタンフェスの告知もできるじゃないですかぁ。防寒着で雪かきするだけじゃ話題性もないし、地域活性化の一環ってやつですよ」

「さすが観光協会の職員だっちゃな！　いろいろと考えて行動してやがる！」

「廃校になる旅中の卒業生が、伝統のジャージで地域の手助けをする……これから作業中の写真も撮ってネット記事にしたり、地元の新聞とかローカル番組への売り込みも考えてるんですよ～！」

スマホを取り出し、ジャージ姿のトミさんを撮影する三雲さん。

「おーっ！　俺には考えつかねえ戦略だぜ！　大卒はやっぱすげーっ！」

「でしょでしょ～？　正清センパイと違って、そこそこ良い大学出てるんでぇ～」

あったま悪そうな会話が延々と聞こえてくる。

エミ姉も呆れているのか「正清さんとヒナちゃんは相変わらず大きな小学生だねぇ」と苦笑い。家の中にいったん引き返したと思いきや、

「はい、手袋と帽子。一家の大黒柱が風邪をひいたら大変です♪」

「へーい。いつも好き勝手に生きて、すまねぇ！」

バカだから肌の露出が多いトミさんに、ニット帽と毛糸の手袋を装着してあげた。

この二人が並ぶと、お似合いの夫婦にしか映らない。やはり、エミ姉と三雲さんのトミさんに関する繋(つな)がりは、方向性が異なっている——そう、漠然と印象に残った。
「ごめんねぇ。ワタシも手伝いたいんだけど、午後から子供たちのレッスンがあるの」
「エミリィは気にすんでねぇ。苦労してきた爺婆(じじばば)のために俺らが働いて、夢がある子供(ガキ)のためにお前が教える。適材適所ってやつだべな！」
「トミさんの言う通り。普通の仕事は、俺たちみたいな普通人に任せればいいんですよ」
平謝りするエミ姉を男二人がフォロー。その後、すぐに数名の小学生がレッスン受講のために訪問し、屋内へと戻ったエミ姉が対応していた。
旅名川祭り以降、入会や体験レッスンの申し込みが止まらず、春咲(はるさき)市の中心から、わざわざ親と一緒に来る子供も増えたとか。祭りで素晴らしい演奏を披露したリーゼはクラスの人気者になったらしく、今も子供たちに囲まれながらギターを弾いている。
才能溢(あふ)れる人気者とは無縁。俺たち普通人チームは屋外での肉体労働をせねば。
角形シャベルやアルミスコップが積まれたトラックの荷台。雪かき道具をせっせと降ろしたトミさんが、シャベルの柄を握り締め、
「やるべーっ！　修も早く着替えろよ、旅名川伝統のユニフォームにな！」
無駄に天高く掲げる。普通にダサいけど、俺にとっては格好(かっこ)いい。身体(からだ)を持て余しているのか、野球みたいに素振りする元ヤンに触発されてしまう弟分。
「よっし！　俺もさっさと着替えてくる！」

「ついでにお前んちもやったるど！　旅中ジャージの依夜莉姉さんと、汗だくになりながら雪かきできたら……中学生の疑似デートみたいで至福のひと時だべなぁ」

何言ってんだこいつ。後輩の母親に夢見すぎだろ。

「修くーん……俺のモチベーションアップのためにさぁ、交渉してきてくれよう」

チラチラと俺の様子を窺ってんじゃねぇ。

あの母さんが旅中ジャージなんて着るわけないだろ。コスプレ熟女になっちゃうわ。

エミ姉んちの物置……じゃなくて俺の実家に戻り、愛用の旅中ジャージにお着替え。身体に違和感なく馴染（なじ）む肌触りは、もはや着慣れてしまった証（あかし）だ。

「あん？　もしかして雪かきすんのか？」

「エミ姉の家を手伝ってくる。軽い運動はリハビリにも効果的だからさ」

茶の間で昼食のカップ麺を啜（すす）っていた母さんが、廊下を通りかかったジャージ息子の行動を先読み。

「アタシも今から自分んちの雪かきすっからよ、正清にも伝えとけ。スターリングさんちの物置も雪かきしてくれーってな」

母さんもその自虐ネタを使っていたとは。

「母さんは休日なんだし、今日は休んでいていいよ。もう若くないんだから」

「確かに若くねぇし腰や肩も最近は痛ぇんだが、てめぇに言われるとイジられてるみたいで腹立つな」

一応、心配してるのに理不尽だ。

「修だけに任せらんねぇだろ。そもそも、体力がガタ落ちしてんだからよ」

「あまり役に立たなくて、親孝行できてなくて……ごめん」

「はっ、謝る必要なんざねぇさ。お前が東京に行っている間、アタシが全部やってたんだぜ？　お前の現状は、アタシもよく知ってる……親に甘えられるときは甘えときな」

嫌な素振りの欠片もなく、母さんは穏和な表情を崩さなかった。

「トミさんからお願いされたんだけど。母さんにも旅中ジャージ着てほしいって」

「はあ？　ふざけたこと抜かしてっと雪に沈めんぞ、って言っとけ」

うわぁ、怖い怖い……。ヤンママの威圧が後退りを誘発させるとは。

「それと『六十分で一万六千円コースなんだから、それくらいのオプションはあってもいいべや！』とも必死に言ってたような……」

ごめん、トミさん。風俗店の客みたいな発言を捏造します。

「かなり前から思ってたが、あいつってよ……相当気持ち悪いんじゃね」

「それは俺も思う」

珍しく親子が同調する。あいつはそんなこと言わねーよ、と擁護してもらえないトミさんって可哀そうなのでは。

「でも、トミさんが手伝ってくれるなら、母さんの負担は相当減るんじゃない？　あの人は体力お化けだし、屋根の雪下ろしも得意じゃん」

「そりゃあ、まあ……アタシも毎日大変だし、あいつの手伝いはぶっちゃけ助かる。でもよぉ、どうして旅中ジャージなんだ？　普通のジャージじゃダメなのかよ……？」

「うーん、地元の一体感を出そうとしてるみたい。地域活性化の取り組み……なんじゃないかな？　よく知らないけど」

本当は趣味というか……たぶん性癖だけど！　ドン引き不可避だから、もっともらしい理由を並べておくぜ。
トミさん、先輩想（おも）いの後輩に感謝してくれよ。
「そもそも、旅中ジャージなんてもう持ってねぇよ。卒業したの何年前だと思ってんだ」
「俺のやつ貸すけど？　洗濯用にもう一着あるし」
「はあ……。アラフォーの女が、中学のジャージ着て徘徊（はいかい）してるのはやべぇだろ……」
明らかに乗り気ではないので、期待しないでおくか。
気が向いたらで良いんじゃないかな、と俺は呟（つぶや）きながら、予備のジャージを茶の間のテーブルに差し出して、無言のプレッシャーを母親に与えておく。
なぜなら、俺もちょっと見てみたいんだよ。
十代前半の面影が垣間見（かいまみ）えるような、母さんの姿を。

松本家とスターリング家は一つの敷地みたいなものなので、手分けして肉厚な雪の塊をどかしていくことに。
母さんが怠（だる）そうに姿を現すや否や、
「依夜莉姉さん……!?　どうしてそんなに厚着なんすか!?　溢（あふ）れ出るコスプレ感のエロさ……じゃなくて、地元の一体感を出しましょうよォ!!」
トミさん、マジで悔しそうに叫ぶ。結局、母さんは足首までの丈があるダウンを着込み、旅中ジャージなど眼中にないかの如（ごと）く平常通りの様相だった。
「うっせぇよ、クソが!!　てめぇのキモい趣味に付き合ってらんねぇんだっつーの!!」
「修!!　お前!!　俺は変態キャラみたいな印象操作したべ!?」

「いや……間違ってないでしょ。後輩の母親に中学のジャージを着せて喜ぶやつ、結構ヤバいと思うよ」
「いやいやいや!?　はあ!?　依夜莉姉さんが恥じらいながら無理してる感が、俺のヴァイブスを――うっ、あっ、あぇえええええ……!?　あっ……うわァ……あっあっ」
ウザそうに眉をひそめた母さんにヘッドロックされ、トミさんの減らず口が悲鳴に変わる……かと思いきや、なぜか幸せそうな喘（あえ）ぎ声なんだよなぁ……。
母さんの腕から解放され、雪上に横たわるトミさんの虚（うつ）ろな瞳と視線が合う。
「……すっげぇよ。依夜莉姉さんは……すべてがサイコーだったァ……」
安らかに成仏してくれ。
「こいつ、昔っから大人っぽい女性が好きでさぁ。バカは死ななきゃ治らんね！」
至福の放心状態に陥ったトミさんに、不満げな様子で近づいた三雲さん。シャベルで雪を掬（すく）い、バカの身体へ粉雪を振りかけていく。
「ほいほいっと。汚いエビフライの出来上がり～♪」
小悪魔な後輩はニタニタと嘲笑（あざわら）い、ジョウロに汲（く）んだ水を、パン粉が振りかけられたエビ……じゃなくて、雪の衣に包まれたトミさんに遠慮なく注いだ。
これ、翌朝にはカチンコチンに凍るやつですね。
「…………はっ？　ちょ、冷たっ!?　いやいや、はっ!?　ヒナ、てめぇ!?」
「えへへぇ！　ばーか！　そのまま冬眠していてくださいね！」
現実に戻ってきたトミさん。身体を覆う雪が凍り始めていた事態に気付き、無様に狼狽（うろた）えている姿を、三雲さんが腹を抱えながら笑う。

「ベーっ！　スキだらけなセンパイが悪いんですよーっだ！」

ぺろりと舌を出した彼女の悪戯（いたずら）な笑顔は、俺が初めて目の当たりにした〝飾らない素の晴れやかさ〟で。旅中ジャージとも相まり、中学時代が蘇（よみがえ）っているかのような。

過去が容易に想像できる。二人がふざけて、エミ姉が呆（あき）れながら見守る青春のひと時が。

兄妹みたいな間柄。少なくとも、トミさんにとっての距離感は。

三雲さんは、どうなのだろうか。彼女の瞳がトミさんを映すときの純情な眼差（まなざ）しは、兄へとして向けられているのだろうか。それとも――

お遊びも程々に、みんなでの楽しい雪かきがスタート。トミさんと三雲さんがエミ姉の実家、松本親子と陽介が平屋の庭に散った。

「てめぇに無理は絶対させねぇ。除雪機でも散歩させてろや」

ああ見えても心配性の母さんは、俺にシャベルの類（たぐい）は握らせず。前に押し進めていくだけで進路上の雪を吸い取り、排出口から吹き飛ばす家庭用の除雪機と散歩。庭の入口付近を丁寧に撫（な）でていく。

母さんは屋根に上がり、何層にも積もっていた雪をシャベルで降ろす。それなりの築年数を誇る木造の平屋……定期的に雪下ろしをしておかないと、重みで家屋が潰れる可能性が無きにしもあらずなのだ。

「おらおらおらーっ！　修兄ちゃん、ジャマだジャマだーっ！」

母さんが降ろした雪を、陽介がスノーダンプに乗せて近場の堀へと運搬。そのまま、雪を捨てては庭に戻ってくるの繰り返し。

時折、レッスン教室のほうをチラッと覗いては、不貞腐（ふてくさ）れた幼稚な表情を晒（さら）している。

なんだかんだ、リーゼの動向が気になるのだろう。
「はーい、正清センパイにスキありーっ！」
「いって!?　おいこらぁ！　うおっ!?　あっ、あ――――――っ!?」
隣の庭では、三雲さんがトミさんの尻に雪玉を投げつけ、やり返そうとしたトミさんが凍った地面に足を取られ、盛大に転げまわっていた。
「かまくら作っぺしーっ！　めちゃくちゃでけーやつ！」
「いいですねーっ！　かまくらかまくらーっ！　でっかいのーっ！」
両方とも先輩だけど、すみませんね。アラサーなのに本気のガキかよ。
あいつら、本格的に遊び始めた。結集させた雪をシャベルで何度も叩き、やや大きくて表面が滑らかな雪山を作っている。
一人だと真面目なのに、本来は並び立たせてはいけない二人だったのでは？
こちとら、鬼のマザーがいるために和気藹々どころか黙々の土木作業みたいじゃや。
「陽介、どうした？　そろそろ疲れたか？」
「……いや、そんなことねぇけど。ほっといてくれ」
雪を運搬する途中で突っ立っていた陽介。元気がない瞳の先には、レッスン教室のリーゼを捉えていた。伝わる。お前の気持ちは、痛いくらいに伝わるよ。
とりあえずの休憩がてら、俺と陽介は向かい合うように雪上へと腰を下ろした。
「リーゼが人気者になったから焦ってるんだろ？」
「ち、ちげーよ！　あいつなんか関係ねーって！　どうしてリーゼと繋げるんだよ！」

咽仏（のどぼとけ）も出ていない未成熟な声が、さらに上ずりまくっている。

「せいせいするぜ。わけわかんねー行動するやつの面倒を見る手間が省けたしな……」

だったら、せいせいした顔をしろ。堂々と宣言しろよ。

声を震わせながら俯（うつむ）いて、拳を握り締めているのは説得力がない。

「リーゼがクラスの人気者になる前は、お前が面倒を見ていたんだよな。お前だけがリーゼに構っていた……それが、今は違う状況になってしまったというね」

「はっ！　どうせ、みんなすぐに飽きるさ。興味本位なミーハー連中ばっかでさ、リーゼのこと……よく知らねーくせに」

「お前は興味本位じゃなかったのか？　陽介はどうしてリーゼに構ってたんだよ」

「それは……あいつが一人なのが可哀（かわい）そうで……。でもさ、あいつが大勢のやつらに囲まれた今、俺が構ってやる理由なんてねーんだよな」

奥歯を強く嚙（か）み締め、同級生相手にレッスンするリーゼを弱々しく見据える陽介。

五十歩百歩の状況に陥り、卑屈な思考が捻（ね）じ曲がったうえ〝距離を置こう〟なんていう選択肢をとったゴミクズ男が五年前にいたとか。

「構ってやる理由なんて必要か？　陽介にとってリーゼはどういう存在なのか、もう一度考えてみるといいぞ」

「どういう存在って……幼稚園からの付き合いだけど、友達ってわけでもないし……でも、放っておけねーんだよ！　見てると危なっかしくて、雲みたいにふわふわ漂ってて……なんなんだよ、すっげーイラつく！」

俯いたまま、陽介は頭を抱える。

「今は分からなくていい。お前くらいの年齢だと、まだまだ分かんないよ」

小学三年生に恋だの愛だの、理解できるはずもない。

それでも、誰かを好きだという感情は誕生し、胸の中に存在している。幼稚な脳が理解できない苛立ち。好意が分からないから、構ってほしくて悪口を言う。

ああ、俺はあいつを好きだったんだ——隣にいた相手が離れ、手遅れになってからようやく気付くのが、幼馴染という存在のやっかいなところなんだけど。

「お前がどうしたいか。リーゼと何をしたいのか……それだけは伝えるべきだと思う」

トミさんの受け売り。

最後まで迷っていた俺が、背中を押されて救われた言葉だ。

「……オレは、リーゼと一緒にいてぇだけなんだ。あいつがいないと、オレが寂しいというか……楽器なんて全然弾けないのに、あいつに構ってほしいから始めたり……」

「俺と同じようなもんじゃん。好きな人と一緒にいたいから音楽を惰性で続けて、何もせずにしがみついて、振り落とされそうになると自分から手を離すんだよな」

「うっせうっせ！　どうしたらいいんだよ……教えてくれよ」

今にも泣き崩れそうな湿った声での哀願。

「陽介が目指すべきなのは、俺じゃなくてトミさんだ。他愛もないことを喋ったり、ひたすら遊んだり、困ってるときは助けてやる。そんな格好いい男になってほしいな」

「それだけで……いいのか？　才能や情熱なんてなくても……幻滅されないのか？」

「ああ。リーゼにとっては、お前が側にいてくれるだけでいいんだよ」

すべてを理解しろとは言わない。恋愛感情を自覚し、相手に伝えろなんて不可能だ。

「お前は今、リーゼと何がしたいんだ？」
「オレは……リーゼと遊びたい！　雪の上で思いっきり駆け回りたい！　あいつといるのが、すっごく楽しいんだ！」
意を決した陽介は、抱いている無垢（むく）な想（おも）いを台詞（せりふ）に乗せた。
小学生なんてこれでいい。好きな相手と遊びたい、でいいじゃないか。リーゼの歩幅に合わせるんじゃなく、陽介の歩幅に巻き込んでしまえ。
それがトミさん流のやり方。凡人が天才相手にできる唯一無二の足掻（あが）きだ。
「リーゼ！」
一心不乱に走り出した陽介はレッスン室へ。
そこにいたリーゼの腕を握り、屋外へと連れ出す。
ふわふわと逃げて、消えていく雲のような存在。力強く摑（つか）まえられるのは、たった一人だけ。ずっと、リーゼを追いかけていた天邪鬼（あまのじゃく）な者だけだ。
二人は向かい合い、陽介は緊張した面持ちで口を開く。
「オレは、お前を連れ戻していくからな！　ずっと、ずっと、好き勝手にふわふわしてろ！」
「…………貴様は何を言ってるノダ？　理解に苦シム」
「あーっ！　変人には理解できねーさ！　要するに、そのままのお前でいてほしいってことだ！　オレが連れ戻しに行ったら、文句を言いながら帰ってこいよ！」
「……ウムム？　よく分からナイが、分カッタ！」

首を傾げたリーゼだったが、理解したふりをして頷いていた。リーゼ本人は我慢しているつもりだろうけど、頑固に結ばれていた口元は緩みきって、はっきりと上向いている。

内心は嬉しかったんだろう。いつも通り、陽介が追いかけてきてくれて。

小学生はこれでいい。背伸びした言葉や、気取った愛の台詞なんて不要。

リーゼ側の恋愛感情は皆無に等しい。音楽と妄想の戦場しか知らない少女に恋心が芽生えるのは、いつになるのだろうか。

孤高の自分を連れ戻してくれる唯一の幼馴染み。中学生にもなれば、その大切さに気付き、今までの距離感に戸惑うかもしれない。たった四年後、だ。

旅中は無くなっているだろうが、思春期の二人……特にリーゼはどう成長し、どんな夢を抱いているだろうか。

そうなったとき、二人が導き出す選択肢は——神様だけが知り、ほくそ笑んでいる。趣味の悪い妨害を仕掛けてくるかもしれないけど。

もし、成長した陽介が俺と同じ道に進もうとするなら、そのときは……。

運命の悪戯を撥ね除けるために、僅かなお節介をさせてくれ。かつて、進むべき道を見失った者だからこそ、幼い二人の行く末を見守っていきたい。

頼むからさ。それくらいの時間は与えてくれよ。

小刻みに震える左手を握り締め、濁って霞みゆく冬の寒空を仰ぎ見ながら、無意味な切望を静かに投げた。

「今のオレは、とりあえずお前と遊びてぇ！　雪遊びしてぇんだよ！」

「遊び……ダト？　それはスナワチ、血で血を洗う聖戦の幕開けなのダナ」

幼稚に怒っていた面持ちは払拭。不敵な笑みを取り戻した救世主(メシア)様は、おもむろにしゃがみ込み、小さい両手で雪を渫(さら)う。

手のひらサイズの雪玉を錬成し、目の前の陽介に掲げた。

「同志諸君に告グ。譲れないものがあるのナラ、戦うノダ」

「ああ……！　お前と共に戦うよ……！　よく分かんねーけど！」

「今こそ、聖戦のトキ！　略奪の限りを尽くシタ罪人に、救世主の鉄槌(てっつい)を下ス！」

小柄な身体(からだ)で振りかぶり、レーザービーム級の送球。

「いって!?　はあ!?　ワイルドイケメンのパッパに何すんだべや!?」

標的の尻にヒットし、白い球体が破裂した。労働をサボってかまくらを作っていたトミさん……じゃなくて、自称ワイルドイケメンのパッパは成敗されたのだ。

「コレは民衆の声。貴様らが奪った我が国を返してもらうゾ」

陽介とリーゼがサボりコンビを雪玉で襲撃。固く捏(こ)ねられた銃弾が降り注ぎ、トミさんと三雲さんは慌てて建造中のかまくらへと身を隠す。

突如襲撃されたアラサーの二人も、かまくらの陰から身を乗り出しては雪玉で応戦。リーゼたちは松本家に本陣を築き、匍匐(ほふく)前進で弾幕を回避しながら前進していた。

ついに始まったぞ。謎の戦争が！

スターリング帝国からの侵略に耐える松本地区みたいな国土の差だけど。

「大人の力を舐(な)めんじゃねーぞ！　こちとら、伊達(だて)に二十八年も生きてねーんだど！」

「クソガキどもに分からせてやりましょーっ！　大きな小学生の経験値を！」

シャベルを盾にしながら、雪玉の直撃弾を回避し続けるトミさんと三雲さん。大人げない二人が、小学生を徐々に後退させていく。

戦況は不利。誰もがそう危惧したそのとき——

「あっ、ひゃ————っ！」

トミさんの顔面に白い花火が炸裂（さくれつ）。

バカの奇声と同時に、丸められた結晶が派手に飛散した。

「はあ……アタシも歳（とし）だな。やっぱり腰にくらぁ」

屋根の上に聳（そび）え立（た）ち、顔をしかめて自らの腰を叩く母さん。新たな雪玉を右手に貯蔵し、手首のスナップを効かせて上に軽く投げたり、キャッチしたり。

研ぎ澄まされた鋭い眼光は、敵対する戦士に圧倒的な恐怖と絶望を与える戦の神。そう錯覚させてしまう冷酷な禍々（まがまが）しさ。

冷たい地面に項垂（うなだ）れたトミさんが、慄（おのの）きを込めた驚愕（きょうがく）の眼差（まなざ）しで母さんを見上げる。

「雪原の狙撃手（スナイパー）……中学時代の依夜莉姉さんは近接格闘だけじゃなく、遠距離狙撃でも恐れられていたんだど！」

息子だけど初耳なんですが。

「しかも！　旅中ジャージの着こなしを見ろ！　依夜莉姉さんの戦闘服だべっちゃ!?」

トミさんの瞳孔が開きまくり、底知れぬ興奮を隠しきれていない。

母さんは軽快にダウンを脱ぎ去り、Ｔシャツにハーフパンツという夏用の旅中ジャージ仕様を晒す。しかも、冬用の長袖ジャージを腰に巻いて結ぶという懐かしのイキリ中坊スタイル！　ちゃっかり着込んでたのか！　コスプレ臭なんてしないよ！　カッコいいに決まってるじゃん！

「争い事は血が騒いで仕方ねえぜ。松本家に戦争を仕掛けるたあ、いい度胸じゃねーか」

ニタァ……と、鋭利な犬歯を見せつけて狡猾に笑む母さん。かつて、旅中を牛耳っていたヤンママが、当時の面影を限定復活させた。

「あっ、あっ……うわァ……おっ、おっ、ぅわぁあああ……ひゃ、ぅわぁあああ……」

優美さと淫靡さを併せ持つ姉御の前にひれ伏し、恍惚に悶えて語彙力を喪失したトミさん。最高に気持ち悪いし、だっせえぞ。

「うわーっ！　センパイ、マジで使えないんですけどーっ！　私一人で勝てるわけないじゃんよーっ！」

最後の砦と化しているかまくらが松本地区から爆撃され、スターリング帝国の三雲さんは防戦一方。助けを求める声が天に届いたのか、

「よーし、今日は頑張ったご褒美に、雪遊びでもしようかぁ♪」

エミ姉がぞろぞろと引き連れてきたのは、音楽教室を受講している小学生たち。どうやらレッスンが終わったらしく、庭の賑やかな活気に触発されたらしい。

んっ、んん……!?　エミ姉にそこはかとない違和感が。

それもそのはず。俺が小学校時代に憧れていた旅中ジャージ姿のエミ姉だったからだ。

「エミ姉……！　そ、そそ、その格好はぁ……！」

「みんなが旅中ジャージだったから、アタシも着なきゃいけないかなーって空気を読んだんだぁ。どう？　まだセーフかなぁ？」
「余裕でセーフどころか、現役いけますよ。うん、エミ姉の制服を見たかったけど、ジャージもすげー魅力があるなぁ……まいったな」
さすがに卒業から十三年も経(た)てば、身体の成長に伴ってサイズもきつくなる。エミ姉の場合、特に生地が胸元に引っ張られ、大きく隆起していた。
「も、もう！　修くんはすーぐワタシのことをジロジロと見てぇ！」
「す、すみません……！　つい……あまりにも似合っていたもので」
頬(ほお)を赤らめながら、両手で胸元を隠すエミ姉の仕草もヤバい。トミさんのことを気持ち悪いキャラにしてきたが、弟分の俺も相当なんだよな……。
「エミリィもヤバいな。いや、ホントに。ああ、依夜莉姉さんも捨てがたいけど、嫁に敵(かな)うものはいねぇべな。いやいや、すげぇ」
雪上に転がっていた屍(しかばね)が、ぶつぶつと喋った。嫁のジャージ姿に見惚(みと)れるトミさんの語彙力は、もう崩壊している。共感する俺の理性も、とっくに狂っている。
「雪は大好きデス～♪　みんなで仲良く遊びまショウ～♪」
小走りでやってきたエミ姉ママ！　まだ娘の制服を着ていたのか！
「ロリとショタとコスプレママの援軍だーっ！　使えない正清センパイの代役としては充分すぎるよね！」
三雲さんの変な言い方はともかく、いよいよ本格的な雪合戦に発展。

念のために言っておくと、この場所に現役の中学生は一人もいない。地元のわんぱく盛りな小学生と、母校のコスプレをしているアホな成人ども。子供たちの純粋な騒ぎ声と、大人げない大人たちが熱く盛り上がる声が、休日のご近所に響き渡っていた。

俺は座って、眺めているだけ。
混ざりたい、はしゃぎたい気持ちは湧くけど、たぶん無理はできないから。
庭の隅っこに深々と座り、へらへらと笑い、ただ観戦しているだけ。

「……修も混ざって遊びたいの？」

ふいに感じるのは、不安定に揺れた心境を安心させてくれる存在。
ぽつんと寂しそうにしていた俺の隣に並び、そっと膝を折り曲げて屈（かが）む。
「いや、俺は見てるだけかな。これだけでも充分に楽しいよ」
「……そう。それなら、わたしも修と一緒に見てるね」
同じ歩幅で寄り添ってくれるのは、恋人よりも近い女の子。気まぐれなので、ふらっと姿を消したと思ったら、いつの間にか隣に現れる。
「……どうして、わたしには何も反応しないの？」
不満げに声色を低くした鞘音は、やや視線を落とす。意味がいまいち察せない男へ向けて、鞘音は露骨に眉をひそめた。
「……わたしも旅中ジャージ着てるの。みんなが着てたから、いったん家に戻って着替えてきたのに」

やっちまった。どうして何も触れなかったんだよ、俺の鈍感バカ野郎。

「……ごめん。気付かなかったというよりは、自然な服装だったというか……鞘音は着慣れてるイメージが強くてさ」

「……依夜莉さんとか、エミリィさんには過剰に反応してたのに」

やきもちを隠さない鞘音。俺の恥部はこっそり目撃されていたようだ。

「……以前までのわたしは、いつもジャージで色気の欠片（かけら）もなかったでしょ。そこは反省してるの」

「鞘音に色気は求めてないよ……いだい、いだい」

頬を軽く抓（つね）られる。ちょっぴり痛い。

「……中学一年で買ったジャージが、未（いま）だにジャストサイズなのも不満ね。なんか……二十歳（はたち）になっても、まるで成長してないみたいで」

「身長は結構伸びたと思うぞ。スリーサイズはあまり変わってないような……いだい、いだいって」

「……女性に対して失礼。修はデリカシーを勉強して」

ちょい怒り模様の鞘音に、また抓られる。彼氏のほっぺたが落ちちゃうんだけど。

「エミ姉はエミ姉だから魅惑の艶が生まれるのであって、鞘音みたいなスレンダー体型の女の子も好きなんだぞ」

「……ばか。貧相な身体で悪かったわね」

「いや、マジだって。今日は長ズボンのジャージだから見えないけど、短パンのときは鞘音の足をチラッと見たりするし、いでっ、あっ」

「……ば、ばか！　そんなところは見なくていいの！」

今度は恥じらいのデコピンをお見舞いされた。手放しで褒めたのに、なぜ……？
高身長のしなやかな脚線美、引き締まった細身な体型。
美しくも聡明な魅力があるのは間違いないし、憧れる女性ファンも数多い。歌唱や演奏を熟せるように日々鍛えているため、腕やお腹には適度な筋肉もついている。
本人は発育が物足りないみたいだけど、それは難解な乙女心の一つなんだろう。
「お洒落な私服も素敵だけど、田舎臭いジャージも鞘音らしくて好きだ。俺にとっては、そっちのほうが馴染み深いというか、ひゃあ!?　つめった!?」
ジャージの裾を捲られ、鞘音は冷え切った素手を俺の背中に押し当ててきた。一瞬の冷感によって筋肉がびくりと収縮し、情けない絶叫が漏れてしまったじゃん……。
「……だめ。わたしも大人になったから、私服を褒められたいの」
俺の彼女はワガママで、すぐに頬を紅潮させながら拗ねたりする。
「修の悲鳴……ひゃあって。ふふっ……可愛い」
「いやいや……いきなり冷たい手で触られたら、誰だってこうなるよ」
不機嫌になった数秒後には、口元に手を当てて慎ましく微笑む。
冷静沈着を装い、実はいろんな感情が豊富。
そんなところが、本当に可愛いんだけど。
「なんじゃあ、あいつらーっ！　人目を盗んでイチャイチャしてるバカップル許すまじ！　ぶっ倒してやるーっ！　ほげっ!?」

心の涙で憤慨する三雲さんの雄叫び（おたけ）……が聞こえた気がしたが、母さんに狙撃された衝撃で悲鳴を漏らし寝転がっていた。あの人も、ずいぶんと拗（こじ）らせてるよね。

「……イチャイチャなんてしてないよな？」

「……そうね。昔からこんな距離感だったと思うけれど」

三雲さんの難癖なのか、俺たちが舞い上がって自覚がないのか。なんにせよ、雪玉で狙われると厄介なので、目立つようなやり取りは自重しておこう。

こっそりと、二人の世界で通じ合えばいい。

「……歌詞、いい感じに仕上がってるわ。修がくれたプレゼントを、早く歌いたい」

「ああ、俺も早く聴きたい。そして、特等席で演奏したいな」

来週末のクリスマス――スノーランタンフェスが待ちきれない。当日はさやねっこのイベントもあるし、ライブの準備やリハなどで忙しいと思うけど。

仕事の合間を縫って、静かなデートでもしたいな。

ヘタレと名高い松本修でも、恋人として次の段階に進もうと決めてるんだ。

クリスマスの夜、桐山鞘音と〝ファーストキス〟をするって。

お互いを求め合う無言の空気感。俺は右手、鞘音は左手。ぎこちなく片手を差し出し、感触と温度を手探りで見つけ出し、お互いに指を絡ませて……ぎゅっと力を込めた。

自分の指の腹に、相手の指が交差するという慣れない感覚。

こういうの、恋人繋ぎっていうんだっけ。

なんだか気恥ずかしいけど、誰もこっちを見ていないので、ずっと握っていよう。
鞘音のすべてを感じられる。自分の感覚や機能が完全には侵されていないことを、奪い去られていないことを教えてくれる。
キミに抓られた痛みも、キミが悪戯する手の冷たさも、キミの体温と触れ合うことで生じる微熱も『生きている』という証明。
絶えず加速度を増幅させる胸の鼓動と、白く塗られた吐息の生温かさ。周囲の雪が溶け始めるんじゃないか……なんて、いらぬ心配をしてしまうほど。
俺の手と、鞘音の手。
ゼロ距離で重なっている肌は、じんじんと心地良い熱を帯びていた。

＊＊＊＊＊

その日の夜。俺は自室にてパソコン業務を行っていた。
外注していたＳＡＹＡＮＥグッズのデザインを確認したり、レーベルのホームページやＳＮＳを更新したりと、有難いことに仕事は尽きない。すでにファンクラブの会員にはライブの告知を済ませている。実質的には無料のフリーライブ。ＳＮＳの反響を見る限り、かなりのファンが押し寄せてくるのは、ほぼ間違いない。
三雲さん曰く、周辺のホテルや旅館も当日は予約で満室。ＳＡＹＡＮＥが生み出す経済効果は、これから凄まじいものになっていくだろう。
震えたスマホを確認すると、メッセージが届いていた。

【グッズの検品終わったどー。次はどうすればいいのや？】

差し出し人は、文面でも訛っているトミさん。

【ありがとう！　ライブ会場の見取り図とか本番の予定表を送っておくから、当日までにチェックしておいてもらえると助かる】

用件を送れば、トミさんは【あいよ！】という一言で了承を伝える。簡単な文章だけど、トミさんが感嘆符を使うだけで、いつもの野太い生声が脳内で再生された。

トミさんは可能な範囲で、レーベルの雑用を助太刀してくれている。スノーランタンフェスも、様々な仕事を引き受けてくれるというから有難い。

少ないけど給料を出す……そう提案しても、頑なに断られる。

その代わり満面の笑みで、こう返されるのだ。

お前らは楽しそうに歌ったり、おもしろいことを好きなだけやってけれ。俺たち地元民にとっては、それが何よりの報酬だおん。

あの人がみんなに慕われ、女の人に好意を持たれるのに疑問はない。

下手したら男でも惚れてしまうだろ、めちゃくちゃ格好いいもん。

トミさんの厚意に甘えてもいいかな。それが、俺にとっての恩返しになるのなら。

誰かの心遣いがあるから、自分のやるべきことに集中できる。鞘音にとって最高のステージを作り上げるという裏方の仕事に没頭できる。

デスクワークと並行し、鍵盤を用いた作曲や演奏の練習を進めていく。

鍵盤に添えた指が震える。自分の意思とは関係なしに、意思を拒絶するかのように。

モノクロのダンス場。十本の指をひたすら、懸命に躍らせる。ヘッドホンを通じて鼓膜に返ってくる音色が、脳内の理想とは微妙に異なっていて。無様なダンスと思い通りにならない旋律を、俺は怯（ひる）まずに奏で続けた。不協和音を迷わずに叩（たた）きつけた。

思考が澱（よど）むことはない。苛立（いらだ）ちはするが、きっと乗り越えられる。

楽な選択だけを散々貪ってきたツケだと開き直ればいい。これくらいのハンデ、俺たち二人なら撥（は）ね除（の）けることができると信じている。

ふと、気配に気付いて指を止めた。

耳元の音が止（や）めば、不意の静寂。デスクチェアを反転させると、ベッドに浅く腰掛けた母さんが物静かな面持ちで、こちらを見据えていた。

「部屋にいたんなら、声かけてくれればいいのに」

息子はシンセサイザーの電源を落とし、取り繕った苦笑い。演奏に集中していると、誰かが部屋に入った程度では気付くのが遅れてしまう。

「アタシは茶の間から『バカ息子〜、メシできたぞ〜』って何回も呼んだんだよ。それなのに、お前はまったく返事をしなかったじゃねーか」

呼びかけても応答が無かったので、わざわざ様子を見に来てくれたらしい。無我夢中に弾いている姿を、背後から観察されていたとしたら少し恥ずかしいな。

「あまり……お腹（なか）は減ってないんだよね」

「ダメだ。意地でも食っとかねーと、体力も落ちるし痩せ細っちまう」

やや強めな語気での忠告。母さんは持参していたものを俺に手渡し、踵（きびす）を返して部屋を立ち去った。縁側で待ってるぜ。そう、淡泊に言い残して。

母さんが俺の右手に握らせたのは、普通のアルミ缶だった。

「ノンアルコールのビール？」

缶のデザインはビールと酷似していたが、凝視するとアルコールはゼロ。母さんが部屋のドアを開けっぱなしにしたので、外部の空気が流れ込んでくる。

この匂い……もしかして。

閉め切った部屋の男臭さが、瞬時に様変わり。濃厚な味噌（みそ）と出汁（だし）の匂いは鼻腔（びこう）を駆け登り、唾液の分泌を促す。減退していた食欲が刺激され、ふつふつと沸き立つ空腹が、重い足先を軽快に操り始めた。

縁側とは、軒下に迫り出（せだ）した木板の廊下みたいなスペース。時代の流れで徐々に姿を消している構造らしいが、ウチには昔からあるので馴染み深い。

縁側の目の前は、松本家の質素な庭。日中は直射日光が差し込み、春になれば昼寝したくなるような場所だし、子供の頃は鞘音と縁側に座ってスイカを齧（かじ）った記憶もある。

「うわぁ……冷え込んでるなぁ……」

部屋から漏れる灯（あか）りにぼんやりと照らされた縁側は、寒冷な外気に晒されている。庭の地面に這（は）う残雪の薄膜が、優麗な月明かりを青白く反射していた。

ジャージに半纏（はんてん）を羽織っただけの男なので、寒さに身震いが止まらないんだが。

「おー、やっと来たのかよ。さっさと座れや」

座布団が二枚敷かれ、そのうちの一枚に豪快な胡坐をかいていた母さん。俺も母さんの隣にあった座布団へ腰を下ろす。すぐ側に置いてある石油ストーブ。心が落ち着く赤褐色の炎が手元を絶妙に浮かび上がらせ、じんわりとした放熱が身震いを打ち消した。

木造の床には、酒の瓶やらお椀の類が用意されている。いつもの台所ではなく、今夜はここで晩飯を食べるのだろう。

松本家にとっては珍妙なシチュエーションだけど、たまには風流な夕飯も悪くない。

「そういや鞘音ちゃんは？　自分の家でメシを食ってくんのか？」

「雪かきが終わったあと、いったん風呂入りに帰ったよ。夜にまた顔を出すって言ってたから、もう少し経ったら来るんじゃないかな」

「桐山んちの旦那が寂しがってるってよ。愛娘は修くんばかり気にかけて、父親との団らんが減ってる……とかなんとか嘆いているらしいぜ」

ゆらゆらと湯気が舞う熱燗を一口含み、愉快に笑い飛ばした母さん。

鞘音の父さん、申し訳ないです……。

「アタシは息子しかいねーけど、娘を持つとそうなるんじゃねぇかな。正清あたりも、リーゼに彼氏ができたらぎゃーぎゃー喚きそうだろ？」

「だろうね。旅名川祭りの打ち上げでも『リーゼはずっとパパの家で暮らすんだぁ』とか騒いでたし」

どうでもいい雑談が始まる。母さんはすでにほろ酔いなのか、くだらない話でも歯を晒しながら笑う。俺はノンアル飲料をグラスに注ぎ、眼前へと掲げた。

空気を読み取った母さんがグラスに地酒を注ぎ、俺のグラスへと啄むような接触。冬の夜空に乾杯の音が鳴り響く。ストーブで暖を取りながら、月明かりの下で母親と酌み交わす……二十年生きてきたけど、初めて味わう長閑な風情だった。

「……息子とゆったり酒を飲んで駄弁るのが夢だったんだよ」

「俺のはノンアルだから酒じゃないんだけど」

「細けーことを気にするんじゃねぇ。病み上がり野郎が、普通に酒を飲めると思ってんじゃねーよ」

ごもっともな意見すぎる。物足りないビール味の飲料で喉を潤しつつ、先程から鼻先を擽る美味しそうな匂いに視線を移した。

「あー、これか？　ちょっと待ってな」

膝立ちになり、のそのそと移動する母さん。ストーブの上に乗っていた『匂いの主』をおたまで簡単にかき混ぜた。ステンレスの鍋で静かに煮立っていたのは——芋煮。

里芋、人参、大根、こんにゃく、長ねぎ等を煮込んだ汁物の郷土料理。味付けは家庭によって違うが、松本家は味噌を好んでいる。母さんは肉が好きだから、鈍く濁りつつも煌めいたスープに、柔らかく煮込まれた牛肉も数多く沈んでいた。

俺が子供の頃、母さんは味噌汁をストーブに乗せて保温していたっけ。

「リクエストされたんでな、超久しぶりに作ってみたんだ。味は保証しねぇ」

そういえば、入院中にリクエストしていた。質素な病院食ばかりで気が滅入っていたので、母さんが作る濃い味の料理が物凄く恋しかったから。

芋煮が取り分けられたお椀を母親が差し出し、息子は会釈しながら受け取る。

「めちゃくちゃ熱いから冷まして食えよ。お前は昔っから猫舌の早食いで――」

「あっ！　あっつ！」

「冷まして食えっつってんだろ！　ガキか、おめーは！」

舌の根も乾かないうちに、熱々の里芋を咀嚼（そしゃく）して悶（もだ）えるバカ息子。紛れもない二十歳（はたち）にも拘（かか）わらず、精神年齢は未（いま）だに中学生なのだ。

気を取り直し、念入りに息を吹きかけてから、味噌を溶いた汁を慎重に啜（すす）る。

安直な表現だが、これが適切だろう。ホッとした。身体（からだ）の芯にも染み渡り、寒さに逆行した汗が皮膚（ひふ）を濡（ぬ）らす。

記憶に色濃く残る母の味。消化器官から浸透していく汁の温かさと混ざり合い、鳥肌という名の感動すら覚えた。

「母さんが作った芋煮なんて、小学生の頃に食べて以来かもしれない……」

「あんときは、町内の芋煮会で作ってたからな。お前と鞘音ちゃんを連れて行ったら『うまいうまい』って、おかわりしまくってたんだぜ」

同じ味の芋煮を食べたからか、薄（うっす）らとだけ思い出す。

雪溶けの時期に、旅名川小学校の校庭で開催されている町内の芋煮会。名前の通り、有志の親御さんが芋煮を作って町民に振る舞うという小規模なイベントだ。

中学生になった途端、大人ぶって足を運ばなくなったものの……無邪気に頬張（ほおば）っていた味や風味は、舌に根深く刻まれている。

無性に恋しくなって、無かった食欲が暴れ出し、ただひたすらに箸を動かした。お椀から口を離さず、様々な具を放り込み、下品な音でも構わずに汁を啜ってしまう。

「……おかわりしてもいい？」

「おう。アタシの息子たるもの、いっぱい食べやがれ」

瞬く間に中身が消えたお椀を母さんに渡すと、鍋からおかわりを取り分けてくれる。手料理を美味そうに貪る息子の姿を肴に、母さんはちびちびと日本酒を堪能していた。

食器と箸が擦れる音、大雑把に切られた具を咀嚼する音、熱い汁を啜る音、啜ったあとの一息……そんな粗末な音しか木霊しない空間のはずなのに。

それでも、底知れぬ不安や胸騒ぎが静まり返るような……ずっと続いてほしい時間。

「ううっ……うっ……はあっ……。くは……うぅぁ……」

どうしてなのか。掛け替えのない時間を過ごしているのに、ようやく青春を取り戻したのに、嗚咽が止まらないんだ。

「どうして泣いてんだよ。アタシの芋煮、そんなに不味かったか？」

口を噤んでいる俺の顔を、母さんが覗き込んでくる。

だめだ。言葉が喉奥に詰まり、それ以上の台詞を紡ぐことができない。

「まともな料理なんて五年間もサボってたんだぜ？　お前が実家に帰ってきて、また作るようになったんだ。ちょっと不味くても許せよな」

「……美味い。美味いに決まってるじゃん……。でも、母さんは若くないんだから、料理は薄い味付けにしたほうが……」
「やかましいっつーの。塩分が怖くて美味い炒飯（チャーハン）なんか作れるかよ」
「そう言うと……思った。母さんの炒飯……大好きだよ……」
湿り気を帯びた声が痞（つか）え、顕著に擦（かす）れてしまう。
「これで最後じゃねぇだろ。明日だって、来年だって……アタシが生きている限り、いつでも作ってやる。一人だと食べきれねぇからよ、お前も食べてくれよな」
「……うん」
大粒の涙を隠そうと俯（うつむ）いた俺の肩を、豪快に抱き寄せた母さん。
父さんが亡くなったとき、俺だけは手放さないとばかりに繋（つな）いでくれた手の感触。それを想起させる力強さで。
「いくら隠しても、アタシは誤魔化（ごまか）せねぇぞ。お前が弾いてる鍵盤の音色を聴けば、嫌でも分かっちまう……。以前の演奏には程遠いってことがな」
母さんは、それを言いたかったのか。
あれだけ実家で鍵盤を弾いていたら、やはり見抜かれてしまう。母さんは一番近くで成長を見守ってくれた人。些細（ささい）な違和感や変化も、敏感に悟ってしまうのかもしれない。
自分でも嫌になるくらい自覚していたが、認めたくなかった。十月の旅名川祭りをピークに、身体は命令を拒絶し始めた。

浸潤する病巣と比例していくように、理想の音が鍵盤から離れていく。脳内で楽曲は思い描けるのに、俺の指が体現を否定するのだ。

旅名川祭りで披露した演奏は、蠟燭（ろうそく）が燃え尽きる直前の輝き。ゴミは輝きながら散ってやる、とか抜かしたやつが、いざ直面すれば無様に狼狽（うろた）えてしまっている。

「鞘音ちゃんには……もう言ってるのか？」

「……言ってない。地元のメンバーには誰にも」

言っていない。言えない。

すでに〝完治した〟と思っているみんなを、あいつを、悲しませてしまう。

雨にすら押し潰されそうな泣き顔を、もう目の当たりにしたくない。

五年前の決別。記憶に焼き付けられた〝あの表情〟を思い返すだけで、心が張り裂けてしまいそうになるんだ。

「本当は退院だって無理やりだったのに、お前は……どうして、じっとしていられねぇのかなぁ……。生き急ぎすぎなんだよ……ゆったりと、長く生きてくれよ……」

母さんの瞳に溜（た）まった水滴が、ゆらゆらと輝き揺れる。今にも零（こぼ）れ落ちてしまいそうなそれを直視できず、俺は無意識に目を逸（そ）らしてしまって。

その切望を伝えるために、母さんは再び酒に頼ったのだろうか。不安を誤魔化すため、心労を和らげるため……また、母さんが弱い部分を曝（さら）け出している。

「ヤンママの息子だから、こんなに活発なワガママに育ってしまったんじゃないかな」

「育てかた……間違っちまったぜ」

「ごめん。俺はもう大丈夫だよ……鞘音とも約束したから」
来年も、再来年も、ずっと、冬が来たら雪遊びするって。
「好きな女の前では、精一杯の見栄（みえ）を張れ。でもな……親の前で強がるんじゃねぇ。弱いところを堂々と晒して良いんだ」
「俺は……甘えていいのかな」
「子供が親に甘えるのは当たり前なんだよ。たった二人の家族じゃねーか」
俯いていた俺の頭を、母さんはくしゃっと荒っぽく撫（な）でた。今の俺が弱音を吐ける唯一の存在であり、松本修という人間を一番知っている人。
屈折した心を檻（おり）に固く閉じ込めたとしても、柔軟に解かれてしまう。
「俺は……今が本当に楽しすぎて、怖い。取り戻したからこそ、失うのが……怖いんだよ」
これは、青春の再スタートなどではなく、時間稼ぎの末に与えられたお情け。永遠ではない。いずれ終わる青春のロスタイムだからこそ、最初の一歩をやけくそで踏み出した。
どうせ最後だから。最後ならせめて。
腐りきって発酵しかけたニートを、強制的に揺り動かした時限爆弾。
がむしゃらだった。投げやりだった。青春を取り戻せるとは思ってなくて、取り戻したあとのことを何も考えていなかった。
「失いたくない……。この幸せな日常から、また俺だけが消えてしまうのが……嫌だ……」

張りぼての見栄は綺麗（きれい）にひび割れ、素直な感情が悲愴（ひそう）となって溢（あふ）れ出る。

「なんで……どうして俺なんだよぉ……。ずっと……みんなとバカをやって笑い合いたい……。鞘音と……生きていきたい……。なんで……俺が……こんな目に……」

人間の命に、永遠という概念は存在しない。神様が与えた運命に、有限の青春に、逆らうことはできないとは分かっていても……黙って受け入れられないんだよ。

「バカじゃねーの。松本依夜莉の息子なら、クソな神様なんぞぶん殴ってやれ。それでも意地悪されるんなら、アタシが意地でも守ってやる」

「母さん……母さぁん……うっ……くっ……ううっ……」

「手間のかかるバカ息子だけどよ、めちゃくちゃ可愛（かわい）くて仕方がねぇ。アタシの前では、弱音を吐いて泣きまくっても良いんだ。たった一人の……大切な息子だからな」

泣き崩れる俺の肩を抱き、更に強い力で引き寄せた母さん。生まれた瞬間にはもう身近にいた母親の匂いや感触は、二十歳を子供に逆戻りさせるタイムマシンのよう。

「明日も、お前の好きなもんを作ってやっから。何が食いたい？」

「……母さん特製の甘口カレー……。隠し味に牛乳が入ってるやつ……」

「よっしゃ。任せときな」

明日には普通の大人に戻るから、今だけは甘えさせてくれ。マザコンとか馬鹿にされてもまったく構わない。世界でただ一人の母親に甘えられるのは、一人息子の特権だ。

俺は小学生、母さんはアラサー……みたいな。

芋煮を摘まみ、酒とノンアル飲料で何度も乾杯し、懐かしい話に花を咲かせる。ひと時だけの時間逆行気分に浸った数分間を、実家の縁側で粛々と過ごす。
子供の頃から変わらない冬の夜空。優雅に散歩している月の妖艶な光が、二人家族を見届けてくれていた。

ポケットに入れていたスマホが震え、画面にはメッセージが表示される。
「鞘音が今から来るってさ」
送信主は鞘音。今から行くね、という淡泊な一言が届いていた。
さらに、ねこダッシュのスタンプも忘れない。
「そっか。湿っぽい話は無しにして、三人でメシでも突こうぜ！　鞘音ちゃんは甘い酒が好きなんだよな？」
「俺は焼酎のお湯割りのほうが好きかな」
「ばーか、てめぇにゃ聞いてねーんだよ」
瞳に溜めた水分をスウェットの袖で拭った母さんは、庭の雪に突き刺していた缶チューハイを引っこ抜く。冷え切った甘い酒を、温かいストーブの前で飲む……庶民の贅沢だ。
「お前のはこっち。それで我慢しとけ」
同じように突き刺さっていたペットボトルを、母さんが投げ渡す。キャッチした瞬間の内部は、浮き上がった無数の泡が次々と破裂している。
透き通っている炭酸飲料。昔は頻繁に飲んでいたサイダーだった。
これは酒。これは……度数が低いサワー。自分自身に暗示をかけ、甘い酒だと言い聞かせるというトミさん顔負けの滑稽な思考が無性に楽しい。

思惑を察した母さんに小馬鹿にされていると、玄関には人の気配。いつものように慎ましい声で「……お晩です」という挨拶が聞こえた。
鞘音の家から俺の家までは、徒歩五分もかからない。しかし、メッセージの受信から到着するまでは二分もかからず。やや早いのは多少気掛かりだったものの、特に深く考えることはせず、俺は意気揚々と出迎えるのだ。
久しぶりに、三人で芋煮会でもしよう……と。

本当は怖い。寝る前は死への恐怖と戦って、望み通りにならない現状が歯痒くて、来年の予定さえも確約できないのが腹の底から悔しい。
渦巻く負の感情を口や態度に露呈し、周囲の人たちを真っ黒に染めてはいけない。気を遣われて、同情される関係など望まない。
だから、メロディを積み重ねた。
日々、滞留し続ける吐露を、歌詞として書き留めた。
鞘音へのプレゼントとは正反対——救済すらない悲恋のオリジナル曲として。

それを鞘音に渡すことは、たぶん、無い。
きっと、キミを失望させるものだから。

第四章 冬は好きだけど、きらい

スノーランタンフェス、前日。つまり、恋人がいれば胸が顕著に高鳴り始めるクリスマスイブ……とは言っても、高鳴りを実感するヒマはあまり無かった。

演奏の練習、作曲・編曲、ＳＡＹＡＮＥの広報、さやねっこの地元イベント出演、定期的なリハビリ……瞬く間に過ぎ去っていく時間は、いくらあっても足りない。

肉体の疲れは溜まっても、精神面では充実していた。鞘音が常に一緒のような状態なので、毎日がデートみたいなものだからだ。

これを言うと、トミさんや三雲さんに「惚気」といじられるけど。クリスマスの香りがする季節くらい、思いっきり惚気させてくれ。地元の親しい仲間内にしか、浮いた話はできないんだよ。

鞘音の人気や立場的に普通のデートなんて無理だし、人通りの多いところで恋人らしい仕草も自粛せざるを得ない。だからこそ、実家の近くでコソコソと手を繋いだり、二人きりになったら稀に抱き締めたりする。

秘密の共有みたいな関係が、なおさら心を躍らせた。

でも、キスはハードルが遥かに高い。恋人より近い幼馴染みだったとはいえ、当然ながらキスは未経験。恋人ということは、キスをしても不思議ではない距離……になったはず。

唇と唇を重ねるんだぞ。感触とか空気感とか……未知の世界すぎて。

そもそも、どうやって話題を切り出すんだ？　どちらかが「キスしよう」と持ちかけるのか、それとも雰囲気が身体を動かすのか。

恋愛経験が中学生レベルの俺は戸惑い、デスクに広げた歌詞ノートに悶々とした気持ちを綴っていた。いや、残務は結構あるんだけども……いったん、鞘音のことを考え出すと神経が過剰に高揚してしまい、恋愛以外は何も手に付かない。

脳に充満した蒸気を発散するために、音色や文字として吐き出すのだ。

「……中学生の初恋みたいな歌詞ね」

「まあ、俺の恋愛は中学生から成長してないし」

あれ？　自室に一人だったはずなのに、誰かと会話したんだが。

声の方向に振り向くと、すぐ真横には……ノートを覗き込むように、上半身を屈めている鞘音がいるというね。小さい悲鳴を漏らしそうになるも、情けないので押し殺した。

「……修がぼーっとしてたから、ずっと眺めてたの」

「俺は集中すると周りが見えなくなるので、声をかけてください。こっそり観察するのは遠慮してください。お願いします」

「……ふふっ、考えておく。修が呆けている顔、可愛くてずっと見ていられるかも」

これからも続けるつもりが見え見えの悪戯な微笑をもらう。

心臓に悪いから、息を殺して部屋に忍び込むのはやめてくれ。

あと「可愛い」とか不意打ちするのも勘弁。褒められ慣れていない男は、気持ち悪い照れ笑いを浮かべてしまうから。

「というか、お前が連絡なしでウチに来るのは珍しいな。いつもは律儀に、電話かアプリのメッセージをくれるのに」

「……今日は玄関先で待ち合わせしてたのに、修が出てこないから」

待ち合わせ……？

「あっ、今日はリハがあるじゃん！　すっかり忘れてた……！」

数秒の間を挟み、スノーランタンフェスのライブに伴うリハーサルがあったのを思い出す。レーベルの雑用や本番のセットリスト練習などで忙殺されていたため、記憶から抜け落ちていた。それとも、恋人を思い浮かべていたら、時間を忘れていたってやつなのか。

鞘音とのクリスマスを、のんびり妄想している場合じゃなかった。三雲さんとは旅名川（たびながわ）スキー場での待ち合わせだが、集合時間の午後一時が迫っている。

「……わたしが運転するから、間に合うと思う」

ハンドルを握って回す仕草を、ドヤ顔で披露する鞘音。その強固な自信は、どこから出てくるのでしょうか。間に合わなくても構わないので、安全運転を推奨していきたい。

鞘音の車で松本（まつもと）家を出発し、二十分程度で旅名川スキー場の駐車場に着く。平日の白い斜面は閑散としており、お客さんは一人もいなかった。

「ちょっと～、おっそいんですけど～」

腕時計を指さした三雲さんが、プンスカと仁王立ち。

下車した俺はこうべを垂れながら、三雲さんと合流した。

「言わなくても、分かってる分かってる。どうせデートでもしてたんでしょ。はっ、世間はクリスマスムードですからね～」

不満そうに唇を尖（とが）らせ、ねちねちと嫌味（いやみ）を投げつけてくる三雲さん。

「いや、違いますよ。悶々とした男子の想（おも）いを書き留（と）めていただけで」

「はぁ？　開幕から惚気てんじゃねぇ――――――っ！　悶々と仕事してる私に喧嘩（けんか）売ってんのか――――っ！」
三雲さんが発した魂の絶叫は、やまびことして跳ね返ってきた。こんなもん、吹き出さずにはいられず、周囲で作業していたイベントスタッフも薄ら笑いを隠せない。
「恋人を思い浮かべてたら、時間を忘れてた～とかそんなんでしょ、どうせさ！」
図星を指され、苦笑いで受け流す。こう他人から指摘されると、舞い上がっている自分が恥ずかしくなってきた。
後輩に嫉妬して絡むのが虚（むな）しくなったのか、三雲さんの瞳がとろんと穏和に溶ける。
「悶々としたいねぇ～。恋したいねぇ～」
「俺、三雲さんを実の姉みたいに応援してるんで。交友関係は広くないですけど、紹介くらいはしますから」
「七歳も年下に気を遣われるお姉さんっていうのも悲しいなぁ～……」
項垂（うなだ）れながら心の涙を堪（こら）える三雲さんには、強く生きてほしい。
「……修、こう見えても三雲さんにはプライドがあるの。高学歴で明るい美人を、放っておく男どもが馬鹿なのよ」
「うおーっ！　ＳＡＹＡＮＥさーん！　女の友情は素晴らしいよねっ！」
よほど嬉（うれ）しかったらしい三雲さんが鞘音に抱き着く……も、
「……すんすん、男の部屋の匂いがする！　裏切り者めがっ！」
異変を敏感に嗅ぎ取り、鞘音にも絡み始めた姿は、やはりトミさんの妹分だった。
雑談もそこそこに、俺たちはスキー場の一角に設（しつら）えられたイベント会場へ移動。

ステージテントの骨組みを天幕のカーテンが包み、巨大な重厚感が真っ白なキャンバスにどっかりと居座る。各種照明器具も骨組みに取り付けられ、アンプやモニターといったＰＡも抜かりなし。観光協会と提携しているイベント会社のスタッフが、指示の声を交錯させながら詰めの設営作業を進めていた。

「前日にいろいろやっておかないとね！　特にリハーサルは観客がいないときじゃないとできないし」

「だから今日は臨時休業なんですね。確かに、営業日だとスキー客に丸見えです」

本番の流れを確認したり、楽器を演奏してＰＡを調整したりするリハーサルは、観客がいると成り立たない。特に野外イベントの場合、周囲に関係者以外がいない状況が望ましいのである。平日は客が少なく、ナイター営業も行わない寂れたスキー場だからこそ、余裕を持った着実な準備期間を設けられるのだ。

トミさん一家は仕事や学校なので、日が沈んだ頃に来訪するらしい。

「それじゃあ、ちゃっちゃと当日の流れを復習しておこうか！」

俺たちはスキー場の様々な場所を転々と移動し、三雲さんの説明に耳を傾ける。当日のプログラム、タイムスケジュール、移動経路、待機場所など、事前に資料をもらっていた情報を、この目で実際に確認した。

「昼間はさやねっこの交流イベントがあるし、夕方からはスノーランタン作りの手伝い、夜からはＳＡＹＡＮＥのライブ……それなりに忙しいんで、覚悟しといてね♪」

ステージ周辺に戻る途中、三雲さんに満面の笑みでプレッシャーをかけられる。ハードスケジュールだけど、楽しみなのは変わりない。

忙しければ忙しいほど、俺も鞘音も負けず嫌いの闘志が燃えるってものだ。

「三雲さんにお願いがあるんですけど、リフト券売り場の近くに物販エリアを設けても構いませんか？　外注で用意したＳＡＹＡＮＥグッズを売りたいんです」

「キミも抜け目がないなぁ～。さすがはレーベルの代表になった男だ！」

「今回はフリーライブなので、収入源は物販に頼りたいなぁと」
急なお願いにも拘(かか)わらず、
「オーケーっ！　スキー場の小さなテントを貸したげる！」
「あざっす！　助かります！」
リストバンドやタオルといったグッズを売るスペース確保に成功。資金が稼げないと活動も制限されてしまうため、可能な限りの利益は求めていく。
その代わり、有意義な出資は惜しまない。すべての観客を魅了できるような最高のＳＡＹＡＮＥを演出するために。
当日はトミさんやエミ姉(ねえ)が、販売スタッフとして手伝ってくれる予定。俺は鞘音を見守り、労(ねぎら)うことに集中できるという有難さが身に染みた。
ステージに戻るや否や、鞘音は持参していたエレキギターを構え、挨拶代わりの軽快な音を鳴らす。ミキサーやエフェクターを介し、複数のアンプから放出される歪(ゆが)み。
私服に伊達(だて)メガネ、キャップを被(かぶ)っているオフ仕様の鞘音でも、ギターとスタンドマイクを手元に手繰り寄せれば孤高の降臨。普通の女の子が、シンガーソングライターとしての繊細な表情に切り替わる。
それを聴いているＰＡスタッフは、音のバランスや機材の配置などに微調整を加えながら、鞘音に何度も演奏を促す。本番と同じ環境のまま演奏してもらうことで、俺たち演者も、運営スタッフも、理想の音作りが可能になるというわけだ。
「キーボードもお願いしまーす」

俺も見惚（みと）れている場合じゃなかった。本番に演奏する曲をワンフレーズほど弾いてみたり、様々な音色（おんしょく）を鳴らしてみた。雪原の大地に響き渡るシンセサイザーは、さしずめ森の音楽会。動物たちが聴いているかは分からない。

しかし、予想以上に爽快な弾き心地を体感してしまい、壮大な感慨に浸ってしまう。

「はーい、オーケーでーす」

俺の心境など知る余地もないスタッフは、淡々と音響周りを弄（いじ）る。観客に聞こえる音、モニターから返る音など、手馴（てな）れた様子で調整を繰り返し、当日の設定に記録していた。

俺の感慨は徐々に奪い去られていく。愛機のMOTIF-ES7が遠い。鍵盤に触れているのに、触れていないような未知の不快。ホイールを押さえた指先が、奇妙な震えを起こす。

取り繕った笑顔の下で、異様な疲労と手足の違和感を隠し通す。本番のセットリストを鞘音と合わせたりしているうちに、気が付けば夕日が山脈に隠れてしまっていた。

「はあ……」

ステージの縁に腰掛けた俺は、襲い掛かる倦怠感（けんたいかん）を溜（た）め息（いき）に紛れ込ませる。頻繁に休憩を挟みながら、部分的なフレーズを叩（たた）いていただけなのに……途中で息が上がり、腕が凍りついたかのように錯覚し、左手の指が痙攣（けいれん）しそうになった。

少なくとも、旅名川祭りは最後まで気持ち良かった。興奮が限界を超えて、痛みや疲労という概念が消えていたのだろうか。

現在の後味は、苦痛。比べものにならないんだよ。劣化、または——衰退。現状の不甲斐（ふがい）ない四肢は、自分自身のものではない異物みたいだ。

「……お疲れ様」
ゆっくりと隣に座った鞘音が、タオルを渡してくれる。
「簡単に音を鳴らしただけだから、そんなに汗はかいてないけどな」
「……でも、修の顔……汗が凄い」
鞘音にそう心配され、自らの顔に手を当ててみると……不快な湿りが纏わりついた。無駄に染み出ていた汗をタオルで拭い、マフラー代わりとして首元にかけておく。
暑い、とは感じていなかった。ライブのように激しく身体を揺らしたわけでもない……棒立ちで音を鳴らしていただけなのに。
「すこぶる調子が良かったから、必要以上に弾いてしまったのかもしれない」
「……そう。それなら……いいの」
不安定な瞳孔を下向かせた鞘音。表面だけでも見栄で取り繕えているのなら、良かった。
鞘音には過度な心配をかけたくない。感情に左右されやすいボーカルに悪影響を与えてはいけない。せめて表情だけでも平静を保ち、安心させてあげないと。
退院したばかりで、リハビリも発展途上。手術と治療を経た身体は疲弊しているが、これから徐々に回復していく。そう、信じている。

すっかり日も暮れ、スキー場の照明が点灯。ステージテントが青白い光に照らし出された午後六時近くに、やかましいワンボックスカーが山道を登ってくる。
お馴染みのヒップホップがこちらに接近し、無音だった山林に轟いていた。

「うぃーっす、お晩でがすーっ！　主役は遅れて参上するぞーってな！」
下品な内装の車も煩（うるさ）ければ、挨拶の声も騒々（すがすが）しい元ヤンが、仕事終わりに駆けつけたのだ。もちろん、主役ではない。観光協会のお手伝いという清々しいほどの脇役である。

「正清（まさきよ）センパイおっそーい！　罰として、観客側に積もってる雪をどかしてくださいね〜」
「はっはっは！　そんなんお安い御用だど！　シャベル持ってくるわ！」
規模が大きめのイベントは、観光協会がイベント業者と連繋（れんけい）するため、トミさんが運営の中心になることはないが……この人は、呼べば来てくれる。
三雲さんに雪かきを指示され、快く引き受けるトミさんは、誰もが頼りたくなる町の便利屋。いや、頼りになる兄ちゃん。
嫌な顔一つせず、豪快に笑いながら、単調な作業でも率先して行ってくれる。
そして、同じ車から降りた母娘（おやこ）も忘れちゃいけない。
「ヒナちゃん、こんにちはぁ♪　ワタシたちはサウンドチェックすればいいのかなぁ？」
「ココが戦場……明日、戦士の声と亡骸（なきがら）に埋め尽くさレル聖戦の舞台なのダナ」
エミ姉とリーゼは、三雲さんに先導されてステージに上がる。
ステージの後方に聳（そび）え立つドラムセットは、事前に持ち運んでいた要塞セット。公民館のステージはドラムだけで半分は埋まっていたが、今回はステージが広いため、客席側の視点だと小規模に見えるけど……間近に立つ演者側の視点では、圧迫感が段違い。
他の楽器隊に比べて、エミ姉のフルセットが相当の面積を占めているのは明白だ。

エミ姉がスローンに腰を下ろし、リーゼはギターを持つ。
二人は早々にサウンドチェックを始め、俺と鞘音が観客側から見物していたのだが、この母娘は別格だ。基本的にリハは練習をする機会ではない。本番への環境作りが主な目的なので、適当なフレーズを流すだけ。
それだけにも拘（かか）わらず、聴き惚（ほ）れてしまう。二つのペダルを両足で執拗（しつよう）に踏むエミ姉のツーバスが突き上げた地鳴りと、モジュレーションが深めにかかったリーゼの旋律。
俺と鞘音は耽美（たんび）の息を呑（の）み、棒立ちの観客と化してしまっていた。
オールスタンディングなので椅子などはない。トミさんが必死に雪かきしている地味な平原が、幾多の観客で溢（あふ）れ返る景色は、俺たちにどんな感動を与えてくれるのだろう。
繁忙期で残業していた母さんも合流し、夜から参加組のリハは順調に進められていった。
「はい、はい、はいっ！　おら、おら、おら！　よっしゃ――――っ！」
遥（はる）か後方でシャベルを振り回してるやつ、めちゃくちゃうるせぇな。
「いや〜、疲れた疲れた。キミらもお疲れさーん」
俺たちに歩み寄ってきた三雲さんが、温かいココアを差し入れてくれる。彼女の声色は低く、蓄積された疲労がひしひしと伝わる。
旅名川の観光協会は職員も少ない。しかも高齢化しているため、若手と呼べるのは三雲さんだけだ。外注スタッフを指揮する司令塔になっていたばかりか、タブレットを持ち込んでの書類作りや力仕事の手伝いと、まさしく獅子奮迅（ししふんじん）の働き。
事前の計画・準備段階も含めると、疲弊具合も相当なものだろう。
「三雲さんの仕事は終わったんですか？」

「まだだねーっ！　でも、飲みたくなったんで飲みまーす」
待ちきれないと言わんばかりの三雲さんが口を付けたのは、どこからどう見ても５００㎖缶のハイボール。背中を仰(の)け反(ぞ)らせ、堂々と飲み始めた姿は潔いくらいだ。
「この一杯のために、今日は親に送ってもらったんだよね！　帰りはＳＡＹＡＮＥさんの車で送ってくれると助かるんですけど！　お願いっ！」
「……わたしは大丈夫です。運転技術はお墨付きなので」
「わーっ！　ホントにありがとーっ！」
誰のお墨付きなんですかねぇ……。スキー場に辿(たど)り着くまでの不安そうな前屈(まえかが)み運転を体感してくれ。お喋(しゃべ)りな元ギャルの口数も減りそうな気がする。
「家に帰るまで我慢できないんですか？　仕事中はさすがにマズいですよ」
「いーのいーの。飲まないとやってられん仕事だもん！」
静寂を掻(か)き消すのは、夜からの合流組が調整を続ける断片的な音色。
ハイボールを節操なく口元に流し込み、ごくりと鳴らした喉から漏れ出す深い息。溜め込んだ感情が凝縮されていそうな二酸化炭素の霧は、夜に吸い込まれていった。
「えへへっ、ばっかみたい」
がむしゃらに雪かきしているトミさんを横目に、けらけらと微笑(ほほえ)む三雲さん。
「センパイを見てると、明日も頑張ろうって気にならない？　疲れたり悩んだりしてる自分がバカらしく思えるっていうかさ！」
「俺も同感です。あの人がいれば、怖いものがないっていうか……心強い親友みたいな人だと思ってます」

「だよね！　昔っからああいう人でさ、大人になっても全然変わってないんだよ！」
以前から、どことなく感じていた。
トミさんを映す三雲さんの瞳は初々しく蕩(とろ)け、話す声色は軽快に弾み、ふいに滲(にじ)む笑顔は恋する少女。彼女は隙あらば――トミさんに視線を攫(さら)われてしまっている。
「前から思ってたんですけど、三雲さんはどうして地元の観光協会にいるんですか？　言っちゃ悪いですが、給料や待遇が良いわけでもなさそうですし」
「それは当然、地元が大好きで愛しているから！」
俺の質問に胸を張って答える三雲さんだったが、
「……それだけですか？　良い大学を出た人が、わざわざ新卒で選ぶ就職先ではないですよね。三雲さんを見ていて、話してみて、わたしもずっと引っかかっていました」
鞘音にも疑問符を投げつけられ、意気消沈したように押し黙る。右手に持った酒を口に含み、そのまま飲み干したと思いきや、近くにあったバケツを拾い上げた。
「大した話じゃないけど……酒でも飲まないと、たぶん喋れないからさ……」
しゃがみ込んだ三雲さんは、立っている俺たちを見上げて、
「スノーランタンの作り方を教えてあげる！」
楽しげだけど、儚(はかな)くもある意味深な誘い。俺と鞘音はお互いの顔を見合いつつ、三雲さんに促されて、大人しく膝を折り曲げることにした。

＊＊＊＊＊

「まず、バケツに一升瓶を立てます。今日は持ってないので、私が飲み干したハイボールの缶を代用しましょう」

ほうほう、バケツの中央に円柱のものを立てる……ね。

「そして、缶を立てたバケツに雪を詰めていきます。できるだけ崩れないように、手で押し固めてください」

ふむふむ、バケツに雪を詰める……と。

お客さんや子供に説明する機会が多いからか、やけに丁寧な語り口なのが違和感だ。

「バケツに雪を詰め終わったら、中央の缶を引っこ抜きます。するとどうでしょう、真ん中が空洞になりますよね」

三雲さんが缶を引っこ抜くと、バケツの雪に整った空洞ができた。

「バケツをひっくり返して、雪を抜き出してみましょう」

説明通りの行動をした三雲さん。ひっくり返したバケツからは、雪の円筒が重力によって滑り落ち、俺と鞘音は「おぉー」という間抜けな声を溢(こぼ)す。

三雲さんはポケットに忍ばせていたキャンドルを取り出し、雪上に置かれた円筒の空洞へと設置。ライターを用いて、キャンドルの芯に火を灯(とも)すと……。

「……綺麗(きれい)ね」

眉尻を下げ、瞳を細めた鞘音が静かに囁(ささや)く。

雪の円筒はオレンジ色が絶妙に透き通り、空洞内の炎が揺れると、雪を貫通した木漏れ日もゆらゆらと躍った。それはまさしく、雪結晶を器にした天然のランタン。単純なのに美妙で、暖色なのに寒冷で。

「例年は子供連れも多いから、こうやって……雪の動物さん作りを教えたりもするんだ！」

手馴(てな)れたように、三雲さんは周辺から集めた雪を両手で形作り、恐らく本番に使う用の葉っぱや木の実などを表面にちょこんと装飾。

雪結晶のひよこや雪うさぎを、いとも簡単に生み出してみせた。スノーランタンの雪結晶を透過した発光が、雪の動物をも煌(きら)めかせ、宝石のオブジェになったかのよう。

さしずめ、焚(た)き火に集まってきた森の動物たち。子供が作れる簡易なものだが、大人も瞳を奪われ、容易に魅了されてしまう。

「ほら、炎の熱で少しずつ雪が解けてさ、円筒が薄くなっていくでしょ？　そうすると、外に漏れ出る光が濃くなってくるんだよね！」

本当だ。内部の雪が徐々に解け始め、心なしか光の揺らめきを色濃く味わえる。

「あーあ、後輩どもと作る予定じゃなかったのになぁ」

悪戯(いたずら)っぽく嘆いた三雲さん。

キャンドルとライターを仕込んでいたのは、俺たち以外の〝誰かさん〟を誘うため。

恋人同士だったら、いつまでも見詰めていたい温暖な色彩。このフェスがクリスマスに開催される理由が実感できた。

家族、恋人、あるいは片思いの相手。大切な人と作ったスノーランタンを、夜の雪原に灯せば、神秘的な光の道を示してくれる。ファンタジーの入口へ誘われているかのような。

「……で、この作り方を教えてくれたのが、正清センパイ」

独特な雰囲気に流されたのか、瞬く間に飲み干した酒に酔ったのか。

「明日には忘れてくれると誓うなら『うろ覚えのおとぎ話』を少しだけ話そっか。私だけが知っている――三つの未練を」

元ギャルの先輩は、真面目な二人の後輩に重い口を開く。

どこにでもありそうで、目の前に光り揺らめくスノーランタンの炎よりもおぼろげな、ここにいる誰かさんの初恋に纏わる〝おとぎ話〟を。

「昔々、旅名川というところに『雪だるま』がいました」

静かに語り出す三雲さんは、両手を広げて雪を掻き集め、二つほど握った雪のおにぎりを重ねた。彼女が命名した名前は、雪だるま。

雪うさぎとひよこの中間に、どっかりと座らせる。

頭の部分には、削れた雪面から露出した枯草を乗せ、ご丁寧に誰かみたいなヤンキー風の短髪を真似ていた。

「雪だるまは、子供の頃から『とある旅館』のお風呂が好きで、そこに住んでいた『ひよこ』と仲良くなりました。雪だるまは、年下のひよこを妹みたいに可愛がって、ひよこも雪だるまを実の兄のように慕っていました」

なぜか、現代を模したおとぎ話。
俺も鞘音も野暮な言葉は挟まず、口を真一文字に結び、耳を傾けた。
「ひよこは、無自覚の初恋を抱きました」
木の棒を使い、三雲さんが雪上に矢印を描く。
矢印の向きは、ひよこから雪だるまへ。
「やんちゃな雪だるまは、友達と遊ぶことしか考えていません。男子小学生の思考回路なんてそんなものでしょう」
男子小学生というのは、友達に茶化されることを嫌う生き物。それに、本気の恋人が欲しいと考える年代でもないのは同性の俺が熟知している。
「ひよこは妹分として、無数にいた友達の一人として、彼の側にいることを決めました。雪だるまも恥ずかしがらないし、毎日のように一緒に遊んでも同級生に茶化されないからです。妹としてなら、友達のような後輩としてなら、ずっと一緒にいられるんじゃないかって……別に恋人じゃなくても良いかなって、ひよこは思っていました」

ひよこは、一先(ひとま)ずの現状維持を選んだ。

まだ小学生だから未熟だけど、いずれはお互いに自覚して……とか、結ばれる未来だけを無意識に夢見ていたのだろうか。

「騒がしく遊んで過ごした小学校の日々は、一歳年上だった雪だるまの卒業によって、一時的に空白となってしまいます。当時の子供は携帯電話なんて持ってなかったし、彼は男友達も多かったので、会える機会は顕著に減っていったのです」

雪だるまに、ひよこの気持ちを知る由はない。気付けない。

なぜなら、友達の一人として、妹分としてしか、ひよこを見ていなかったからだ。

そうさせたのは、ひよこ自身の責任であり、失敗であり、自業自得。

「寂しかった。ひよこは……寂しくなったんです。年に一度くらいは、二人での楽しい思い出を作りたかった」

三雲さんの視線の先には——

円筒の雪溶けによって、光度が際立ち続けるスノーランタン。

「ひよこは、勇気を出して誘いました。初恋相手のクリスマスを、独占することに成功したんです」

それが、十五年前のクリスマス。

おとぎ話なのに、架空の物語なのに、場面の想像が容易（たやす）いのはなぜだろう。

「小学六年生と、中学一年生……周囲の人から見ると、恋人同士というよりは、やっぱり兄妹（きょうだい）としか思われなくて。雪だるまも『久しぶりに妹と遊びに来た』みたいな感じだったけど、ひよこは……恋人気分を満喫してた」

そう呟（つぶや）くと、三雲さんは矢印を深々となぞる。

「彼女気取りで…………満喫してたんだ」

さっき、ひよこから雪だるまに向かって引いた矢印を、何度も、何度も。

消えないように。雪深く、刻み込むように。

「無知だったひよこに、雪だるまはスノーランタンの作り方を教えてくれました。クリスマスの夜、初恋の人と雪結晶の光を眺めていた時間を……永遠に忘れないでしょう」

おとぎ話を語っていた三雲さんから、僅かな笑顔が失われる。

「来年も二人でスノーランタンを作ろうね……そんな些細(ささい)な口約束が、照れ臭くて、緊張して、結局切り出せなかった。それが、最初の後悔になりました」

二人は幸せに暮らしましたとさ。めでたしめでたし、とはならない。

彼女の薄暗い瞳の奥が、そう悟らせてくれた。

「中学生になったひよこは、雪だるまとの学校生活を取り戻しました。そこから、また賑(にぎ)やかで楽しい日常が始まる……と、思っていたんです」

三雲さんが持つ木の棒の先端が、雪だるまの側に刺さり、深々と矢印が引かれる。

矢印の行先は——雪うさぎ。

「雪だるまと同級生の雪うさぎは、中学でも高嶺(たかね)の花(はな)でした。特に男子からの好意は凄(すさ)まじくて、雪だるまも……好意を向ける一人でした」

木の棒を摑(つか)んでいた三雲さんの右手が……凍えたように震えている。

描いていた矢印が不規則に曲がり、いったん雪を被(かぶ)せて白紙に戻してから、再び矢印で繋(つな)ぐと……ひよこをスタートとした一方通行な矢印が完成してしまう。

「ひよこは妹みたいな存在だったから……何の躊躇（ためら）いもなく相談されたんだよ。雪だるまの初恋……雪うさぎが好きなんだけど……って……」

感情移入しながら、脆弱（ぜいじゃく）な言葉を紡ぐ三雲さんは、おとぎ話という体を忘れているのかもしれない。他人行儀な語り口だったのに、時折零（こぼ）れ落ちる砕けた口調。俺と鞘音はそこまでバカじゃないので、身近な人たちの姿を架空のキャラに重ねてしまう。

無言で息を呑（の）み、刃物に心臓が擽（くすぐ）られているような鈍痛を誤魔化（ごまか）すため、無垢（むく）に輝くランタンを己の瞳に映す。

俺も、鞘音も、そして三雲さんも……見入っているふり。

「ひよこは平静を装って、生意気にアドバイスをしたんだ。雪うさぎの音楽教室に通っている子供がウチによく来てるから、そこから仲良くなってみたら？　みたいな……」

その子供とは、いったい誰なのか。

正体が分かりきっているのに、二人の後輩は言葉を発することができない。

あの小賢（こざか）しい入れ知恵は、ひよこの発案。ほとんど接点のなかった雪だるまと雪うさぎが、急接近したキッカケを作ってしまった。

これが、二つ目の後悔。

余計な助言をしていなかったら。諦めるように説得していれば。

「もしかしたら、打算もあったかもしれない。ヤンキーの雪だるまが、清楚な雪うさぎと付き合えるわけがないと決めつけて……彼がフラれたとき、ひよこが慰めれば――」

傷心につけ込んで、自分にもチャンスが巡るかもしれない。でも、未来は理想通りではなかった。雪上へ静かに引かれた矢印は向かい合い、雪うさぎと雪だるまを固く結ぶ。

一方通行の矢印は、ひよこから伸びた一本だけになってしまったのだ。

「でもさ！　あいつは男気がある人で、格好良くて、誰にでも優しいんだもん！　高嶺の花の雪うさぎだって……惚(ほ)れちゃうよね……」

複雑に渦巻く感情が暴発しかけた三雲さんだが、背後を振り返りつつ、強張(こわば)っていた肩の力を深呼吸と共に抜く。呑気(のんき)なあいつが、下手くそなラップを口遊(くちずさ)んで雪かきをする間抜けな音は、彼女に微笑(ほほえ)みを垣間見(かいまみ)せる余裕を分け与えたのだろう。

「結局、ひよこと雪だるまがランタンを作ったのは、一度だけ。翌年のスノーランタンフェスにはもう……ひよこの居場所はなかった。あの二人がランタンを作る光景はお似合いすぎて、綺麗すぎて……嫉妬もしなかったそうだよ」

雪のひよこを拾い上げた三雲さんは、雪だるまと雪うさぎのやや後ろに置く。遠くもないけど、近くもない。現状を表した三角の位置関係。

自分の隣にいた初恋の人が、違う人の隣で笑っている。気恥ずかしそうに、頬を赤らめている。スノーランタンの作り方を、別の誰かに教えている。

「……両想いを知って、ひたすら泣いた。遠くから二人を眺めて、また泣いた。家に帰ってから、布団に包まって……また泣いてた」

このおとぎ話に悪者なんていない。

三人のうち、二人が結ばれて――一人が傍観者になってしまっただけ。

だからこそ、そこはかとなく美しくて、激痛よりも悶えてしまう。

「冬は……好きだけど、きらい。忘れたい気持ちを、思い出してしまうから」

燻った不満をぶつける相手もおらず、クリスマスが巡るたびに後悔を繰り返し、未練を銀雪の景色に溶かすだけ。真綿で首を絞められているような心情から逃れられない。

「酔っ払って喋りすぎた。そろそろ、仕事に戻ろうかな！」

寒さで酔いが醒めたのか、逃げるように立ち上がった三雲さんだったが、

「肝心なことをまだ喋ってないです……！」

「……そうだったね。私……じゃなくて、ひよこが地元の脇役として働く理由……だっけ？」

衝動的に俺も立ち上がり、踵を返した彼女を呼び止めた。

「ひよこはダサくて、未練がましくて、痛い女だから。文化祭みたいなノリで準備して、終わったらバカみたいに打ち上げして、地元が大好きなセンパイの笑顔を間近で見たい。いつまでも学生気分のままで……いたいじゃん」

その真っ直ぐな瞳は、女子中学生みたいな純真無垢。

「積み重ねた学歴なんかより……青春をする口実が欲しかった。もう一度だけでもいいから、二人でスノーランタンを作りたかった。毎年、誘おうとしては遠慮しちゃうけど……一人でドキドキしてるのが楽しい……本当に痛い拗らせ女だよ……」

雪だるまの結婚から九年経っても〝沈黙の片思い〟を続けている。

積み重ねた学歴を捨ててまで、自分勝手な初恋を追い求めている。

お揃いの旅中ジャージを着せて、地元のために奔走して、無邪気にはしゃいでいる。

このおとぎ話に、ハッピーエンドが存在しないとしても。

学生時代のような日常が続くなら、好きな人が笑ってくれるなら、それだけで——

「ひよこは〝初恋の現状維持〟を、一人ぼっちでやってるだけだからね！」

振り向きざまの、美麗な笑顔。

ああ、この人の初恋は一途で、ただひたすらに純情で、拗らせかたが素敵な女性だ。

「そろそろ、潔くフラれて終わらせるべきかもしれない。告白していないから、負けてないと信じて……ひよこは『もしかしたら、まだ』なんて勘違いしちゃうんだよね。毎年毎年、あの家族が作るスノーランタンを遠くから眺めている自分が、本当に惨めで……辛い」

「三雲さん……」

「告白して失恋する前に、二人で制服デートして、最後にスノーランタンを作りたい。それが、ひよこの願いだよ。明日は、私の初恋を……ようやく終わらせるための一日になる」

それに相応しい舞台が、今年のスノーランタンフェス。

初恋を知り、ひっそりと終わった場所で……未練と羨望を吹っ切るために。

「都市伝説とか……本当に馬鹿馬鹿しいよね。あんな噂に踊らされた人なんて……大人になっても信じてる痛い女なんて……いないでしょ。身近にいたら、笑えるでしょ……」

「俺は……笑いません」

「あんなものは……大嘘だよ。片思いを両想いにすることなんて……絶対にできない」

スノーランタンに灯っていた火が、木々をも揺らす風によって脆く消え去った。三雲さんは物悲しい背中と未練の台詞を残し、一歩ずつ踏み出す。

炎の色彩を失った雪だるまと、雪の動物たち。青白く薄暗い雪原で佇み、拗らせすぎた女を黙って見送っていた。

小さな命が宿り、三人家族となった幸せな世界を、外野から見守るしかない未来。

俺は、冬の季節が永遠に訪れてほしいと願っていた。

しかし、ひよこにとっては――永遠に叶うことのない初恋の季節。

＊＊＊＊＊

前日の準備やリハーサルが終わり、集っていた人々は現地で解散。酒を飲んだ三雲さんを、鞘音の車で三雲旅館に送り届ける。
すでに時刻は午後十一時。旅名川は深い眠りの中に沈んでおり、軽自動車のタイヤが雪道を踏みつけるくぐもった音が、普段よりも格段に響いていた。
旅館の駐車場に鞘音が軽自動車を停め、同乗の三雲さんが降りる……はずだったのに、
「あー、ありがと、ありがと！　持つべきものはセンパイじゃなくてコウハイだにゃー！」
「うっわ、酒くさっ……。三雲さんの家に着きましたよーっ！」
助手席に乗っていた俺へ、後部席から覆い被さってくる始末。呼気が異様に酒臭いのは、あのハイボールのせいだけじゃない。
作業自体は午後九時頃に一段落していたのだが、『準備お疲れ様会』とかいう謎の野外飲み会がトミさんと三雲さんの提案で開始。だだっ広いゲレンデにて焚き火を囲みながら、酒や清涼飲料水を酌み交わしていた……というわけだ。
地元メンバーと過ごすクリスマスイブの夜は、数年ぶりに騒がしく、取り戻した青春を実感させてくれる。
「でも、センパイも好きーっ！　マジでカッコいいし大好きーっ！　ちゅっちゅー！」
「……ダメです。その人は修なので、三雲さんはキスできません」

「酒癖悪りぃなぁ……。鞘音、この人を早く降ろして旅館にぶち込んでおこう」
泥酔状態の三雲さんは、トミさんよりもタチが悪いというね。
「SAYANEちゃんの唇……おいちそう。味見しても……いい？」
「……絶対にダメです！　わたしの唇は美味しくないですから！」
キス魔に襲われかけた鞘音、防御態勢での必死な抵抗。
小鳥のように唇を尖らせながら、啄もうとしてきた三雲さんを半強制的に降車させ、俺と鞘音が両サイドより肩を抱えた。キス魔の次は睡魔。眠そうに目尻を下向かせた当人は、だらーんと脱力し、全体重を俺たちに預けている。
旅名川は地元民を信用し、あまり施錠しない。さすがに旅館の正面玄関は閉ざされていたが、裏口にお邪魔させてもらい、そのまま三雲さんを置いて行こうとするも、
「部屋まで連れてってぇ〜。ここに放置されたら寒くて凍死しちゃう！」
「ちょっ……！　勘弁してください……！」
もはや幼稚園の駄々っ子。呂律が回っていない困った大人が、俺に抱き着いてくる。
むくれた鞘音は、泥酔の三雲さんを引っぺがす。
「SAYANEちゃんでもいいやーっ！　お風呂一緒に入ろーっ！」
「……だ、ダメですって……！　修、何とかして……！」
季節は冬季。深夜から朝にかけて玄関先に放置すれば、翌日に死体となって発見されても不思議ではない。苦肉の策として俺が三雲さんを背負い、おんぶする形となった。

身体に不安はあったものの、長距離を移動するわけじゃないし、三雲さんの華奢な体格に伴う負荷は軽微だったため、簡易な運動としても意味を成す。

なにより、リハビリの効果を実感できたのが地味に嬉しかった。

「私の部屋はねぇ～、ここ真っ直ぐ行ってぇ～、そこの階段を上がってぇ～」

背中に密着する三雲さんの感触と体温。耳元に絶えず吹きかかる吐息混じりの指示通りに、襖で仕切られた和室までの運搬が完了。壊れ物を扱うかの如く、畳に敷かれていた敷布団へ、そっと寝かせた。

「……着替えたいんだけどぉ～。ねえ、着替えたいぃ～」

「どうぞ。俺たちはすぐに帰るんで」

「動きたくないぃ～。着替え持ってきてぇ～。タンスに入ってる赤い高校ジャージ～」

両手をあたふたと振り回す三雲さん……いや、おっきな女児。エミ姉が甘えさせてくれるお姉さんだとすれば、三雲さんは甘えてくる妹みたいな。俺より七歳も年上だけど。

鞘音がタンスを開け、収納されていたジャージを探し出し、過度に甘える三雲さんへと手渡す。赤を基調としたジャージは、トミさんやエミ姉と同じ高校名が刺繍されていた。

「あれ？　春咲高校は学年によってジャージの色が違いましたよね。どうして、一学年上だったトミさんたちと同じ色を持ってるんですか？」

俺が抱いた些細な疑問。タンスには赤と紺色の色違いジャージが並べられていたのだが、三雲さんの学年は紺色のほうだったはずだ。

「えへへぇ〜♪　正清センパイが高校を卒業するときにねぇ〜、もらったのぉ〜。センパイの香りがするんだぁ〜」

だらしなく口角を緩ませた三雲さんが、ほろ酔いの声色を軽快に躍らせる。

「着替えさせてぇ〜。ねえねえ、着替えさせてよぉ〜。一人じゃできないぃ〜」

「え、俺が？　まいったな……」

「……そんなわけないでしょ。わたしが着替えさせるから、修はあっち向いてて」

冷たく叱られた寂しい男は、二十七歳独身女性の実家部屋を探索することに。

鞘音が半開きにしたタンスの中には、旅中の制服とジャージ。クリーニング済みと思われるビニールで覆われ、ハンガーラックに掛けられていた。高校の制服やカーディガン等も収納されている。顔を突っ込んだら、フレッシュな女の子の匂いがしそう。

「……もう、こっち向いていいわ。あまり、女性の部屋をじろじろと見ないこと」

鞘音に釘を刺されたので、志半ばだけど探索タイムを切り上げた。

部屋の主は高校ジャージへの衣替えを済ませ、仰向けのまま目を開いたり、閉じたり。毛布と掛布団を被せてあげると、三雲さんは恍惚の安眠に身を委ねていった。

何気なく見回してみた感想は、エミ姉の部屋と正反対。

女子というよりは男子の部屋みたいな遊戯の雰囲気が漂い、野球のグローブやバスケットボール、ゲーム機などが無造作に転がっている。

「……正清センパイがさ、よく遊びに来てたんだよね。センパイが喜ぶからって……男子みたいな部屋にして……未だにこんな感じ」

どうやら起きていたらしい三雲さんが、放心気味に天井を見詰め、ぼそぼそと呟（つぶや）く。
名残と未練が凝縮された部屋で過ごす三雲さんは、やっぱり過去に戻りたい願望が脳に燻（くすぶ）っているのかもしれない。
トミさんが恋心を自覚する前の姿を、何度も思い返し、微（かす）かな面影に浸って。
「明日は、俺たちのライブで青春に戻してあげます。とりあえず何もかも忘れて、トミさんと楽しんでください」
「……えへへっ、嬉（うれ）しいな。持つべきものは、優しい後輩くんたちだね」
にっこりと頬を上向かせた三雲さんは、毛布にすっぽりと包（くる）まった。そろそろ日付も変わるし、俺たちも帰るために踵（きびす）を返した瞬間、
「クリスマス、晴れるといいね！　お休み！」
人型に盛り上がった毛布の中から、そんな言葉をいただく。
それでは、お休みなさい——俺たちはそう言い残し、部屋の電気を消す。

旅館の裏口から屋外に足を踏み出した途端……肌に触れると溶け消える白い結晶。気付かないほうが可笑（おか）しい。俺たちが三雲旅館に到着した頃よりも、夜空から舞い降りる粒雪の密度が増し、視界や景色を濁らせてしまう。
乗ってきた軽自動車のボディも真っ白に染まり、地面の積雪は足首にまで到達。ホワイトクリスマスと呼ぶには、度を越した過剰なサービスかもしれない。

旅名川育ちの地元民は、クリスマスの雪を賞賛しない。見飽きているのに加えて、除雪や道路状況の悪化といったマイナス面が強いからだ。

小走りで軽自動車に逃げ込み、お互いに衣服の雪を払いながら一息吐（つ）く。ふと、鞘音がスマホを弄（いじ）り、画面をこちらに差し出してきた。

「……そんな予感はしてたけど、ホワイトクリスマスになりそうね」

表示されていたのは、明日の天気予報。二十五日の日付けは大雪のマークが陳列され、イブの深夜……つまり現時刻を境に、降雪量は増え続けるという。

助手席の窓には白い壁がこびりつき、夜空を覆い隠す純白のカーテンと化した。

「ああ、本当にありがた迷惑な神様だよ。いつもいつも、自己満足なムードを演出してるつもりで、人間側の都合はまったく考えてない」

圧倒的な自然の力には、ちっぽけな人間など抗（あらが）うことはできない。どんなに理不尽な仕打ちを受けても、打破する未来を切り開くことはできない。

だから、神に祈る。矛盾だと分かっていても、抵抗の手段がないから。

杞憂（きゆう）であってくれ。

片田舎のちっぽけなイベントでも、旅名川では年に一度と誇れる聖夜の祭典なんだ。

様々な人々が準備に携わり、開催を心待ちにしている人たちがいる。乏しい人員と予算に四苦八苦しながら、着々と準備を進めてきた人がいる。

たった一人に喜んでほしいがために、地元を盛り上げようと駆け回った人がいる。

失恋未満の苦渋を思い返し、一日だけの〝初恋〟を取り戻そうとしている人がいる。

車の窓を覆う雪の隙間から、その人の姿を捉えることができた。
旅館の二階。とっくに寝ていたはずなのに、彼女は自室の窓付近に佇み、雪化粧に侵された夜空へ恋焦がれている。

明日は、ちゃんと晴れますように。

切望の眼差(まなざ)しと共に微(かす)かに動いた唇は、不機嫌な空への懇願を込めている気がした。

翌朝——旅名川の風景は白く塗り潰され、すべての交通機関が役割を放棄。過剰演出のホワイトクリスマスは、無力な人間たちを住処(すみか)に閉じ込める。
生活に必要な主要道路も深々と埋まり、歩道との境目を目視することすら困難。交通量が少ない細道は忖度(そんたく)され、除雪車が通る素振りさえ無かった。
遅くても日付が変わる頃には、天邪鬼(あまのじゃく)な冬空も泣き止(や)むという。それでも、クリスマスの日曜日は始まる前に、無情な終わりを告げた。
三雲さんの切望は無下に扱われ、年に一度でさえも主役にはなれない。
たった一つのスノーランタンにさえ、火は灯(とも)らない。降り続ける雪の流星群に押し潰され、汚泥を筆につけて塗ったような分厚い雲に阻まれ、願いの切れ端すら届かない。

午前七時三十分。

スノーランタンフェスは、正式に中止となった。


第五章
後輩くんと後輩ちゃん

実家の茶の間に垂れ流されるテレビの音。
クリスマスにも拘(かか)わらず、土曜日の朝に放送されているアニメをリアルタイム視聴していたのだが、ストーリーにまったく付いていけない。
ふいに、思い返す。最近は仕事やイベント、病院通い等で外出が多く、多忙な日々を過ごしていたため、テレビ番組を毎週のように追うという概念を取り払っていた。現在の俺に今期のお勧めアニメなどを尋ねられても、苦笑いの選択肢しか持ち合わせないだろう。
もし録画をしていたらと思うと、萎えるL字のテロップ。降雪情報や交通機関の運行状況を執拗(しつよう)に伝えているため、遊び気分の外出が不可能なレベルなのは一目瞭然だった。
自室での作曲程度はできるけど、今日は疲労回復も兼ねて大人しくしていよう。
久しぶりだな、まったりと実家で過ごす日は。炬燵(こたつ)に下半身を突っ込み、蜜柑(みかん)の皮を剥(む)き、果実を割っては己の口元に運ぶ。
「息子よぉ、アタシにもみかーん」
灯油ストーブの熱が充満した茶の間で、平和にくつろぐ親子。
絨毯(じゅうたん)へ寝転がり、炬燵に肩まで浸(つ)かった母さんが、強請(ねだ)りながら口内を開帳。仕方がないので、割った果実の一かけらを放り込んであげた。
特に何もしないのが無性に落ち着かなくて、油断すると座布団に乗せていた尻が浮き上がる。入院生活のおかげか、規則正しい早起きの習慣も身に付いており、朝に寝て夕方に起きるという怠惰なニートの面影はどこへやら。
三十分くらい前、三雲(みくも)さんからの電話が入っていた。

スノーランタンフェスは、大雪の影響を考慮して中止が決定した――と。

雪や突風にはめっぽう弱い旅名川（たびながわ）のローカル線はもちろん、春咲（はるさき）市周辺の公共交通機関さえ運転再開の目途が立たず。かろうじて除雪された国道も雪の塊が凍結し、荒々しい轍（わだち）で抉（えぐ）られている。ドライバーにとっては、最悪の路面コンディションだ。

運営側からもネットを通じて中止が告知されたし、宿泊客のキャンセルが相次いでいる状況。遠方からのファンや観光客が集まる可能性は、皆無になってしまった。

三雲さん、今頃どうしているだろうか。

昨晩の印象的な姿が、脳裏を鮮烈に過（よぎ）る。冬空に祈っている切なげな表情。俺の思考回路を占拠してしまい、惰性で視聴していたアニメの内容を覚える余地がない。

何かをやりたい。俺に、できることはないのか。

俺の立場に、もしトミさんがいたとしたら、黙って引き下がるだろうか。

漠然とした思考を攪拌（かくはん）させていると、炬燵のテーブルに置いていたスマホが振動した。

【桐山鞘音（きりやまさやね）がスタンプを送信しました】

メッセージアプリの定型文が表示され、伸ばした指先でのタップ。

たびねっこが走る。メッセージ欄を四足歩行で駆け抜ける。

信頼と安定の……ねこダッシュ。

鞘音が最近ハマっている謎スタンプだが、どうしてこのタイミングに送ってきたのだろうか。皆目見当もつかないんだけど、ねこダッシュなど不可能な天候なのは分かる。

たぶん、送信ミスかな。完全に気が緩み、テーブルにスマホを置いた次の瞬間！

玄関のドアを豪快に開いた衝撃が、地響きと化して平屋を駆け巡った。

「……お晩です」

慌てて玄関先に向かうと、雪結晶の化粧を施したような鞘音が立ち竦（すく）む。頭の天辺（てっぺん）に雪が降り積もり、アウターの肩口などにも霧雪が疎（まば）らに付着している。

ブラウンのムートンブーツも雪色に覆われ、カラーリングが様変わりしていた。

「おいおい……マジでねこダッシュしてきたのか？」

「……そんなわけないでしょ。普通に走ってきただけよ」

条件反射的に、俺は鞘音の身体（からだ）に積もっていた雪を手で払う。

雪の海原だった庭に築かれていたのは、人間に踏み固められた新雪の海溝。まさに一心不乱で突き進んできた、といった雪の裂け目が松本家（まつもと）まで伸びている。言い換えれば、人間が歩いた道筋に、深い溝が発生するほどの降雪量だという証（あかし）。

しかし、鞘音の確固たる瞳に、慄（おのの）きや怖気（おじけ）といった負の意思は微塵（みじん）も無し。

「……この程度の雪、ねこダッシュだって頑張ればできるわ。スノーランタンフェスを中止にしたのは、納得がいかないの」

「俺も残念だとは思うけど、三雲さんが独断で続行を決められる状況じゃないんだよ。県内の交通網は麻痺（まひ）してるし、遠距離から車で来られるような道路状況でもない。集客も見込めないうえに、交通事故の危険も伴う……俺が責任者でも、中止にするだろうな」

付け加えるなら、スキー場への一本道も粉雪の海に沈んでいる。生活に必要な道路ではないため、除雪の優先順位は最下位かもしれない。

鞘音はアーティストの目線、俺は主催者側の目線。相容（あいい）れはしないだろうけど、それはスノーランタンフェスという規定の概念に縛られたら、の話だ。

「……昔のわたしたちは、雪なんか怖くなかった。雪が降れば喜んで、スキー場を縦横無尽に走り回っていた。そうでしょ？」

「お前、もしかして――」

「……うん。歌いたい。わたしがそう強く願ったのだから――」

鞘音は静かに一呼吸し、自分の胸に手を翳（かざ）す。

心に抱いた前進の意思を、強く明確に誇示するために。

「……桐山鞘音と松本修（しゅう）を、何人たりとも止めることはできないの。たとえ、それが神様であろうとも」

白い吐息に書き記したのは、空気を読めないお天気への挑戦状。

そうだ。俺たちなら、二人が揃（そろ）えば、どんなことでも可能になる。

「勝手にやってやろうか。クリスマスだからこそ、地元民だけの〝冬フェス〟を」

雪原が観客で埋め尽くされなくても構わない。

虫に食われたみたいに、観客スペースが空きまくっても上等じゃん。

歌うためのステージがあって、歌いたいという信念がある。今日のために舞台を準備し、心待ちにしていた先輩がいる。好き勝手に暴れるから、好き勝手に集まれ。痛い苦しいが口癖の老人だろうが、働くことに疲れた中年だろうが、青春時代に帰らせてあげよう。

そうと決まれば、スマホにて発信。真っ先に頼るのは、あの元ヤンしかいない。

「トミさん、ちょっと相談に乗ってくれない？」

『――おう、なんだなんだ？　面白そうな遊びを企(たくら)んでんだべ！』
　大人の悪ガキがつるむと、眠っていた子供心が盛大に躍り狂う。明らかに興味津々なトミさんへ事情を説明。協力の要請を難なく受け入れてくれた。
『――エミリィとリーゼにも伝えとくわ。トミ・コネクションを最大限に活用してやっから、期待してけろ！』
「さすがトミさん！　ほんとに助かる！」
　トミ・コネクションとかいうネーミングセンスはともかく、地元民に愛されたトミさんの人脈は心強く、頼もしすぎる。どこかのお偉いさんとか、社長とか、そういった類(たぐい)の権力は必要ない。欲しているのは、単純な力仕事の人手。
、、、、、、、、、、、、、
旅名川の冬には当たり前な作業を手伝ってくれるだけでも、本当に助かるのだ。
　それでも、トミさんだけに頼るわけではなく、俺自身も様々なアクションを起こす。物事を率先し、発信源として引っ張っていけるようになりたいから。
　俺は皆のおかげで変わり、地元という場所に救われて成長できた。肉体労働は戦力外でも、小賢(こざか)しい思考は機敏に働く。今こそ、恩返しの姿を行動で示すとき。
　肝心の三雲さんに伝えようと電話をかけるも、留守番サービスに繋(つな)がってしまう。何度電話しても、やはり三雲さんの声が返ってはこなかった。だいたいの地域は徒歩で行ける範囲なのが、旅名川の数少ない利点。こうなれば、直接伝えるのが手っ取り早い。
「三雲さんにも伝えてほしいんだけど、三雲旅館に行ってくれるか？」
「……うん。分かった」
「ねこダッシュなら、あっという間に着くと思う」

「……もう、あのスタンプ使わない。修がバカにしてくるから」

　ほんのり不機嫌になった鞘音を宥(なだ)めつつ、以心伝心のアイコンタクト。再び、雪の海原を切り裂きながら、鞘音は三雲旅館へと邁進(まいしん)していった。

「鞘音に負けちゃいられねぇ！　俺もねこダッシュしていくぜ！」

　妙なハイテンションになってきた俺は、防寒装備に早着替え。

　電話でも済ませられる用事にも拘わらず、くすんだ鈍色(にびいろ)の屋外に飛び出す……も、重量級の雪に足を絡め取られ、派手にすっ転んだ！

　つ、冷てぇ……アホみてぇ……。松本修を模(かたど)ったクレーターが、雪上に完成した。

　だが、少年時代にも味わった雪塗(まみ)れの感覚は嫌いじゃないかも。まさか、大雪の最前線に疾走して、幼稚に転んで、無駄に楽しいと思える時間が訪れるなんて。

　二ヵ月前までは、引きこもりの一人ぼっちだったゴミクズ男が、だ。

「おい、大バカ息子！　てめぇ、こんな天気にバカじゃねぇのか！」

「大丈夫だよ！　クリスマスの俺は無敵だから！」

「はあ!?　育て方を間違っちまったぜ、まったくよ！」

　鞘音との会話が茶の間に筒抜けだったらしく、血相を変えた母さんが玄関先に駆け寄ってきたものの、俺はもう驟雪(しゅうせつ)に身を投じ、庭を出発するところ。太ももまで雪に埋もれた両足を、迷わずに漕(こ)ぎ続けた。

　説教はあとで聞くから、馬鹿の無謀を止めないでくれ。

　今しかできないことを、やりたい。全力で命を燃やし、毎日を後悔なく生きたい。

来年にはもう、この馬鹿はいないかもしれないから。

「キミは馬鹿じゃないのかぃー？」

語尾を伸ばす気の抜けた口調だが、俺の行動に呆れているのはひしひしと伝わる。半身を真っ白に侵食された男が、息を切らしながら訪問してきたのだから無理もない。

いたって平凡な二階建ての木造民家は、杉浦教頭の家。雪男みたいなやつが引き戸の玄関を開いた瞬間、茶の間にいた教頭が啜っていた緑茶を吹き出しかけていた。

唇も血の気が引いた紫に変色しているだろうが、ニット帽、手袋、ダウンといった防寒装備は身に纏っているので、冷え込みによる影響は思ったより軽い。

「母さんにも、めっちゃ言われました。大バカ息子って」

「依夜莉にも言われるだろうねー。あいつも中学時代は馬鹿やってたけど、息子も見事に血を受け継いでいると確信したよー」

「いや、母さんよりは普通に近い人間だと思いますけど！　あの人、未だに屋根の上から雪玉をガチで投げるくらいガキっぽいんで！」

褒められているというよりは、皮肉混じりの嘆きを漏らす教頭。徒歩十分以内の距離に住んでいるのは知っていたので、積雪に苦戦した以外は容易に会うことができた。

「教頭先生に、協力してほしいことがありまして――」

こんな悪天候の中、世間話をしに来たわけじゃない。要件を簡潔に伝えると、教頭は考える素振りも見せずに、ただ頷く。

「はっはっは、勝手に冬フェスを開催するとは……ロックだねー」
教師というお堅い立場上、苦言を呈されるかと思いきや、愉快に笑われる。
「旅中(たびちゅう)の生徒にも声をかけてみようじゃないかー。チケット即完売の歌姫が、地元民だけの特別ライブをしてくれるなら、生徒たちも喜んで手伝うと思うぞー」
「……ありがとうございます！　よろしくお願いします！」
謝辞の言葉を述べ、深々と頭を下げる。
「松本君に朗報があるよー。少しずつだけど、雪が小降りになっていると思わないかい？」
「うーん……確かに昨日の深夜に比べたら、視界が良くなった気がしますね」
ここに着くまでの道中を回想してみる。心なしか、雪の粒が小さくなり、鈍色(にび)に吹雪(ふぶ)いていた情景が遠方まで見渡せるようになっていた。
「天気予報によれば、これから少しずつ天気は回復するらしいよー。もしかしたら、キミの冬フェスとやらは実現が可能かもしれないねー」
「そうらしいですね。でも、夜にはまた降ってくる可能性が高いみたいで……時間との勝負になります。だから、人手が早急に欲しいんです」
「ランタンフェスの中止は残念だったけど、冬フェスのためなら老体に鞭(むち)打って頑張るとするかねー。僕もキミたちの古参ファンだからさー、頼ってくれて嬉(うれ)しいよー」
教頭の眠そうな声に、若干の喜楽が滲(にじ)む。
俺も地元の寛容さに心温まっていたのだが、ダウンのフードを背後から鷲摑(わしづか)みされた。
「おい、くそ、バカ、ボケ。杉浦んちで何してんだ、こら」

ぅわぁ……汚い語彙だらけの鬼に捕まってしまった。メンチ切りのシワを眉間に刻んだ母さんが、わざわざ追走してきていたのだ。

「鬼に捕まってしまった悪ガキみたいだねー」

「そうなんですよ……普段は向こうがガキなのに、怒るときは鬼ママンなんですよ。俺のほうが常識人なんですよ」

へらへらしていた俺と教頭だったが、

「てめぇら、仲良く雪に沈められてぇんだな」

「すみませんでした」「すみませんでした」

男二人は速攻の平謝り。

鬼ママンのドスが効いた威圧にビビり、口数が露骨に減る情けなさよ。

「……協力する」

「……えっ？」

素直じゃない母さんが、懸命に絞り出した台詞。

俺は思わず、上ずった声で聞き返してしまう。

「アタシも協力するっつってんだよ！　お前らが、冬フェスとやらを開催できるようにな」

母さんの頬が赤らんでいるのは、寒さだけのせいじゃなさそうだ。恥じらいの視線を逸らしながらも、母さんは協力を申し出てくれる。

「俺、母さんの息子で幸せだよ。誰が鬼ママンなんて言ったんだか……」

「尻出せ。再教育してやる」

ひえぇえええ……鬼の形相がやっぱり恐ろしいよぉ。

「アタシと杉浦が町内を回れば、協力してくれるやつも増えてくんだろ。正清(まさきよ)ほどフレンドリーじゃねぇが、アタシも町のガス屋さんなんでな。だいたいは顔見知りだぜ」

「母さん……」

「本来、祭りっていうのは地元民が作り上げるもんだ。都会の洒落(しゃれ)たクリスマスなんかにゃ負けてらんねぇよな」

粋な計らいに多大な感謝を。俺の母さんは、他の誰にも負けない最高の母親だと自慢できる。言葉の使い方と仕草と服装がお淑(しと)やかになれば、もう言うことはないな。

「おっしゃ！　いっちょやったるかぁ！」

悪戯(いたずら)に笑んだ母さんが両腕を振り上げ、両拳をかち合わせる。中手指節関節の乾いた打撃音をゴングに、俺たち三人も各々の役目へ。教頭が家電の受話器を持ち、母さんが桐山家に進路を取り、俺は〝とある場所〟へと向かった。

大人たちは、学生時代のような若々しい意欲を瞳に宿す。

もはや、開き直りの領域。クリスマスなのに、実家でケーキを食べるだけじゃ物足りない。クリスマスだから、特別なイベントを作り上げたい。

いい歳(とし)の大人でもさ、無邪気なガキみたいに喚(わめ)いて、叫んで、みっともなくはしゃいだ一日があっても罰は当たらないだろう。

神様の機嫌を損ない、露骨に邪魔されたとしても。

クリスマスのせいにして、運命とやらに喧嘩(けんか)を売ってやりますか。

スキー場へと続く一本道の入口。俺が到着した頃には、援軍が続々と集結していた。
「よお、こっちは戦闘態勢が整ってるど。いつでもいけるべさ」
物理的に上から目線。それもそのはず。トミさんが蟹股（がにまた）で乗車していたのは、農家最強のマシンと名高いトラクター。普段の農業仕様ではなく、除雪用アタッチメントやバケットを装着したとあっては、もう無敵としか言いようがない。
当然ながら、一台だけの戦力では終わらなかった。
「おっ、修くん！　オラも倅（せがれ）に負けてらんねぇどや！」
トミ親父（おやじ）、息子より新しいトラクターで緊急参戦。
大規模な畑と水田を保有する豊臣（とよとみ）家は、旅名川の一位二位を争う農業大国。トラクターを始めとした農業兵器の保有数も、一般農家を凌駕（りょうが）しているのだ。
「まだまだ、トミ・コネクションを舐（な）めるんでねぇ。近所の農家はだいたい友達だぜ」
とろい速度のトラクターで、続々と乗りつける歴戦のドライバーたち。
全世界よ、括目（かつもく）せよ。これがトミ・コネクションだ。
想像以上に豪華な面子（メンツ）なので、頬の引きつりが収まらない。旅名川が誇る農家オールスターが大集合だもん。
乾いた笑いが堪（こら）えられないって。
退屈しないな、旅名川というところは。
侵入を拒まんとする分厚い雪の層に埋もれてしまった一本道を前に、農家オールスターが不気味な微笑（ほほえ）みを交錯させる。彼らは、雪を一掃するために選ばれたエリートなのだ。

毎年、彼らは雪かきという戦場を生き延びてきた。歴戦の戦士が放つ眼力は、俺の心裏を慄かせ、後退りさせてしまうほど。

「道が無ければ切り開くど！　豊臣家の長男に付いてこいや！」

トミさんの雄叫び。意外とナルシストなトミさんは、無駄にキメ顔を意識しながら先陣を切ろうとしたが、トミ親父のトラクターに行く手を阻まれた。

「お調子者っこの！　リーダーはバレー部のエースだったオラに決まってっぺっちゃ！」

「親父、あぶねぇごだや！　そっつはやんねくてぃがす！　邪魔だでば！」

訛り丸出しの親子喧嘩を撒き散らし、トラクターで幅寄せバトルするのやめーや。

「というか、ヒナが来てねぇべっちゃ！　あいつの指示が聞こえないと調子狂うんだが」

「三雲さんは音信不通……というか、家に引きこもってると思う。鞘音が三雲旅館に行ったんだけど、まだ帰ってこないんだ」

「あいつのガキっぽい性格を考えると、イベントが中止になっていじけてるべな。目先の仕事が片付いたら、俺が直談判しに乗り込んでやるぜ」

お馴染みのガキ大将な笑みを垣間見せたトミさん。

「あいつのためなら尽力を惜しまねぇ。困っているあいつを、俺はいつでも助けたい」

皮肉だ。三雲さんの後悔は、トミさんの初恋を後押ししてしまったこと。トミさん自身は恩義に感じ、借りを返そうとしている。もう、三雲さんの恋心には応えられないのに。

「トミさん、ここは任せてもいいかな？　まだ、やらなきゃいけない仕事が残ってるんだ」

「おう、雪かきのプロフェッショナルに任せておきな。その代わり、お前らからのユニークなお返しも期待してっからよ！」
ああ、期待してくれ。雪かきは戦力外だけど、切り開いてくれた道の頂点に、一夜限りの夢を描いてみせる。クリスマスにだけ現れる〝冬の幻想〟を。
これは、地元への恩返し。
そして、告白もできなかった傍観者を初恋の季節へ、恋焦がれた女の子へと戻してあげるための、些細(ささい)な自己満足だ。

＊＊＊＊＊

俺が三雲旅館に足を運んだのは、鞘音がなかなか帰ってこないため。メッセージを送っても既読が付かないし、電話をかけても呼出音が延々と流れるだけ。
まさか……遭難？　徒歩圏内の距離で？　いくら視界不良だったとはいえ、生まれ育った土地のご近所では道に迷わないだろう。鞘音が隠れポンコツだったとしても。
念のため、様子を見に伺った三雲旅館の正面玄関にて、社長の爺(じい)さん……分かりやすく言えば、三雲さんのお爺さんと対面し、鞘音の所在を聞いてみる。
「桐山さんちの鞘音ちゃん？　ウチの雛子(ひなこ)に会いに来てっけども」
ひょうひょうとした返事をもらい、ほっと胸を撫(な)で下(お)ろす。

敷居を跨がせていただき、三雲さんの部屋へ。二人はいったい何をしているのか……襖の陰に身を潜めながら、恐る恐る覗いてみた。
「う、うぐっ……うえええええええええええええええええええええええええええええええええん！」
耳を劈いたのは、号泣。二十七歳とは到底思えない唸るような涙声が、こんもりと盛り上がった布団の中から絶えず響き渡っている。
状況的に、駄々っ子みたいな泣き声の正体は、あの人しかいないんだろうけど。
「……修、どうしたの？」
俺に気付いた鞘音が、布団のすぐ側で正座していた。
「鞘音がなかなか戻ってこないし、連絡も返ってこないから様子を見に来たんだ」
「……ごめんなさい。三雲さんの泣き声が煩くて、着信音が聞こえなかったかも」
「布団の中に蹲ってる謎の物体、やっぱり三雲さんだったのか……」
予想はしていたけど、いざ三雲さんと分かると苦笑せざるを得ないな。引きこもりの悪化版みたいな拗らせ方をしているのが、俺より七歳も年上の先輩なので。
「……ぐすん……ひっく……そこにいるのは松本君……？」
「はい。三雲さんと鞘音の様子を見に来たんです」
「……SAYANEさんの隣に座って」
俺の声だと悟った三雲さんが、布団にすっぽりと包まりながら語りかけてくる。
「えぇ……？　俺もですか？」

「……どうして嫌そうな反応なんだよぉ！　私の愚痴を聞きにきたんでしょ〜っ！」

鞘音は愚痴の聞き役に徹していたらしく、俺も付き合わされることに。数分ほど様々な方面の不平不満を垂れ流されたが、最終的にはこの文言に行きつく。

「あーあ……年に一度のチャンスなのに……こつこつと準備してきたのに……。どうしてこうなるかなぁ……」

時折、嗚咽（おえつ）を漏らしそうになる三雲さん。悲観と諦めが混在した感情が、悲涙に変換されて溢（あふ）れているのかもしれない。三雲さんにとっては、恋する少女の時間を取り戻せる唯一の日。それが失われた精神的な不安定さは計り知れないだろう。

「吹っ切りたかったのに……告白して、華々しく散りたかったのに……意地悪な神様はそれすら……許してくれない……ひどいよぉ……」

泣き止（なや）みそうだったものの、トミさんの話題が絡むと、言葉の節々がずぶ濡（ぬ）れになり、呼吸音すらも滲んでくる三雲さん。

「アナタたちも分かるでしょ。エミリィセンパイは……本当に良い人で、誰にでも優しく、思いやりもあって、悔しいとか嫉妬さえも馬鹿らしい。恨みつらみを向ける相手もいない……」

この三角関係の末路に、悪者はいない。最後に残ったのは、結ばれた二人と、結ばれる舞台にすら到達できなかった一人。結ばれた二人は、取り残された一人の恋心にすら気付かず、親しい妹のように接する。それが、現状維持を選んだ——代償。

「また……傍観しているだけの一年を過ごさなきゃいけないの……？　私にも望みがあるなんて勘違いしたまま……初恋に延々と縛られて……もう、嫌だよぉ……」

鞘音も苦渋の表情で押し黙ってしまい、華奢（きゃしゃ）な肩を震わせる。

「初恋は実らないっていうけどさ……正清センパイも、エミリィセンパイも、幸せになってるじゃん！　キミたちもそうだよ！」
　絞り出した声で叫ぶ三雲さんだったが、
「どうして……私だけ……何年も同じところに立ち止まってるんだろ……」
　弱々しく萎(しぼ)み、枯れていく。
「未練だらけの幼稚な部屋なんて見たくない……。第二ボタンの代わりにもらったジャージなんて着たくない……。オマケ扱いみたいに写る過去の写真なんていらない……」
「三雲さん……」
「あいつより素敵な彼氏を作って……全部捨てたい。都会の街に住んでさ、そこそこの企業に転職して、あいつを忘れるような恋をしたい。そうしないと、いつまでも想(おも)い縋(すが)って……胸が締め付けられて……苦しくて……ダメになっていく……から……」
　未練に縛られているからこそ、三雲さんは哀願する。トミさんの口から、初恋の終末が告げられる瞬間を。逃れられない現状維持を壊す手段が、他には見出(みいだ)せなくて。
「永遠に進めないなら……ほんの一瞬でも戻りたいよぉ……」
　静観する鞘音と同様に、俺もまた、三雲さんにかける生意気な助言も、角砂糖のように甘い言葉も持ち合わせていないけど、すんなり諦められるほど完成された人間でもない。
「三雲さんが諦めるのは勝手ですけど、俺たちは物足りないんです。せっかくのクリスマスと用意してくれたステージ……実家でケーキとシャンパンだけじゃ面白くありません」
「……無理だよぉ……今朝、確認したもん。スキー場の道が雪で埋まってるもん……」

もぞもぞと、布団に包(くる)まれたイモムシが畳を這(は)う。
正座していた鞘音に近づき、太ももに顔を埋(うず)めていた。
「SAYANEさんの太もも……あったかいなりぃ。良い匂いもするぅ」
「……な、何してるんですか！　セクハラはやめてください……！」
「あーっ！　もう少しだけ！　あと五秒！　センパイに逆らうんじゃねーっ！」
逃げようとする鞘音の股下付近に、しがみ付く布団のイモムシ。どうやら、愚痴を溢(こぼ)したおかげで心境が多少なりともスッキリとしたみたいだ。
「……夜になったら、たぶん誰かが起こしに来ます。三雲さんは頑張りすぎたので、それまでは休んでください」
「SAYANEさん……クールな顔に似合わず優しいね……」
「……前から思っていたんですけど、呼び方が他人行儀で固いです。わたしは同じ中学の後輩なんですから、呼び捨てにしてくれたほうが自然ですよ」
「それなら、俺のことも呼び捨てにしてもらって構いません」
ごろんと横たわった三雲さんが布団を捲(めく)り、むくんだ顔だけを晒(さら)す。今朝からずっと泣いていたのだろうか、涙袋の周辺には、ほのかな薄紅が差し、痛々しさを感じてしまう。
「それじゃあ……後輩くんと後輩ちゃん」
目尻を濡(ぬ)らす一筋の雫(しずく)を袖で拭った三雲さんは、俺たちを『後輩』と名付けて、
「私のことは『雛子先輩』って呼んでいいからね。みっともなく大泣きして、情けなく愚痴ったのに、背中を押してくれる後輩がいてくれて……私は幸せだな」

ぎこちない微笑みを見せ、こちらに安堵（あんど）を与えてくれた。

「雛子センパイは少しだけ寝ます……。起こさなかったら目覚めませんので……」

そう言うと、雛子先輩は静かに息を吐（つ）きながら瞳を閉じる。あっという間に寝息が聞こえ、身体（からだ）の至るところも微動だにせず。永眠と瓜二（うりふた）つな深海の睡眠に堕（お）ちた姿は、さしずめ眠れる和室の美女。ちょっとやそっとの衝撃では、睫毛（まつげ）も揺れない。

期待と不安。昨晩はあまり眠れなかったのかな。

遠足前の子供みたいに、明日は晴れますようにと祈って。

一途（いちず）を拗（こじ）らせすぎて、ひたすらに頑張りすぎて、危なっかしい中学生の妹……そんなイメージだけど、なぜか放っておけず、守ってあげたくなってしまう年上の先輩がいる。

初恋の相手に寄り添うのは、非の打ちどころがない女性。二人には愛娘（まなむすめ）が生まれ、成就する未来は失われた……に等しい。

終わりのない現状維持に懊悩（おうのう）し、それを壊すことでしか新たな可能性を見出せない人に、俺たちがしてあげられることは――

三雲旅館の正面玄関から屋外に出た俺と鞘音。深々と積もり続けている雪の情景を汚す黒のワンボックスカーが、融雪剤のおかげで凍結していない路肩に停車した。

現在、昼下がり。気温は相変わらず氷点下を匂わせているが、雲の切れ目には薄（うっす）らと太陽光が浮かび上がっている。教頭の言う通り、降雪が緩まる時間帯が訪れるかもしれない。

事前に連絡済みの俺と鞘音がワンボックスカーに乗り込み、ブロンドの髪を持つ運転手がスリップしないように発進させた。

「ありがとう、エミ姉（ねえ）。このままスキー場に直行でお願いします」

「はーい、了解しましたぁ♪　シートベルトはちゃんと締めてねぇ」

トミさんの愛車を操るのは、もちろんエミ姉。

ニットのセーターを強引に押し上げる豊満な胸元は、斜めに横断するシートベルトにより、エミ姉の無自覚な肉感と艶を強調させている。

これが、エミ姉のパイスラという天然記念物。ぜひ、記録映像に残していきたい。

「終焉（しゅうえん）が訪れようとしてイル。白き灰に侵サレタ世界は、間もナク眠りにつくころダロウ」

助手席にはゴスロリの救世主（メシア）様。両足をパタパタと振り上げ、遊び足りなそうに身を捩（よじ）っていた。おやつ代わりの笹（ささ）かまを齧（かじ）り、ほっぺを膨らませて咀嚼（そしゃく）している。

スキー場への一本道に差し掛かると、俺を含めた一同は妙な感動すら覚えた。二時間前の通行止め状態とは見違えるような整った路面に変貌し、車両の通行も余裕で可能なほどに雪の海原が一掃されている。不揃（ふぞろ）いな粉雪は散乱しているものの、スタッドレスタイヤなら問題なく進めるだろう。

「正清さんたちはホントに凄（すご）いよねぇ。仕事人というか、困っていれば何とかしてくれるみたいな安定感があるよぉ」

「旅名川が誇る農業オールスターなんで、これくらいは当然ですよ」

「……どうして修が自慢げなんだか」

エミ姉は感心し、俺は得意げに胸を張り、そんな俺に鞘音が呆(あき)れる。さすがのリーゼも窓に頬(ほお)を押し付けながら「ナン……ダト？　ナニが起きたノカー!?」と驚愕(きょうがく)し、自分の円(つぶ)らな眼(め)を疑わざるを得ない。

しっかし、本当にすげぇ。二時間程度だったら、一本道の三割まで除雪できたら御の字という想定だったのだが……車が奥深くへと進行を続けても、トラクター集団の姿を捉えられない。すでに、昭和の遺産的なロッジやレンタルショップの跡地が待ち構えている。

もう着くぞ、旅名川スキー場に到着しちゃうぞ。

まさか……あのオールスターは、たった二時間で道を切り開いたとでも言うのか。

俺の「まさか」は的中した。仕事人は背中で語る。スキー場までの道は完全に除雪を終えているばかりか、ライブ会場にも降り積もった膨大な雪の排除に着手していた。

「ふいぃ……仕事中の一服は最高だっちゃなぁ……」

しかし、彼らも普通の人間。キリの良いタイミングで休憩に入り、トミ親父(おやじ)を始めとしたオッサン集団は恍惚(こうこつ)の顔で煙草(たばこ)を嗜(たしな)んでいた。

俺たちが車から降りると、煙草を吸わないトミさんが駆け寄ってきて、

「待ってたどーっ！　そろそろ昼飯にすっぺしーっ！　お腹(なか)ペコペコなんだやーっ！」

男子小学生も顔負けのわんぱくな笑顔を振(ふ)り撒(ま)く。

純粋な瞳の輝きが眩(まぶ)しすぎて、家庭持ちのアラサーという事実を時々忘れそうになる。

「一先(ひとま)ずはお疲れさまぁ♪　お腹が減ってるのは分かるけど、まずは手を洗ってきてねぇ」

「へいへーい。エミリィは真面目だっちゃなーっ！」

「正清さんが不真面目なんですよぉ。お腹壊すと大変だからねぇ」

美人嫁に指示されたバカ旦那は潔く引き返し、雪上をスキップしながら手洗い場に消えた。疲れた素振りすら見せず、大きな小学生ぶりは健在なのが清々しい。

スキー場経営者のご厚意で、一時的に開放してもらった休憩所へと移動。持参してきたランチボックスを、エミ姉がテーブルに広げる。

「これ、皆さんのために作ってきましたぁ。よろしければ、たくさん食べてもらえると嬉しいですっ♪」

そう。エミ姉とは事前に相談し、昼食の弁当を作ってもらっていた。肉体を酷使するトミさんたちに、多少なりとも英気を養ってほしかったからだ。

きつね色に揚がったエビフライ、甘く焼いた卵焼き、男子が大好き鳥の唐揚げ！　鮮やかな色彩に装飾されたお弁当が食欲を増幅させ、歓喜の声をあげたオッサンたち。

しかも、エミ姉という旅名川の至宝が手作りしたとあっては、年甲斐もなく頬張るのは必然だった。止まる気配がない。雪かき隊の割り箸は、我先にとオカズを狙っている。

「サンドイッチとおにぎりもあるので、ゆっくりよく噛んで食べてねぇ。特に正清さんはいつも食べるの早いからさぁ」

和食派、洋食派、どちらのニーズにも対応している心遣いよ。俺の母さんだったら、巨大な炒飯おにぎりを乱造していたに違いない。

「うぐっ？　おりゃはべづぬふつむだどおもむけれぼぼ」

「ほら、それぇ。ハムスターみたいにほっぺたが膨らんでるよぉ、もぉ〜」

まともに喋(しゃべ)れないほどの食べ物を、口内に詰め込んでいたトミさん……エミ姉に可愛(かわい)く叱られてやんの。まあ、気持ちは分かるけどね。エミ姉の手料理は、愛情というスパイスが激ウマだもん。

「……聖なる秘薬もあるゾ！　喉の渇きに飢えた民衆は哀願するノダ！」

首元にぶら下げた紐(ひも)付きの水筒を、眼前に掲げるリーゼ。

「リーゼちゃん、オラのコップさ注(つ)いでけろ〜」

「分かッタ。ギリギリまで注ぐカラ、絶対に零(こぼ)すナヨ」

トミ親父の紙コップにお茶を注ぐ孫のリーゼだったが、表面張力を使い、零(こぼ)れるか零れないかの瀬戸際を狙っているらしい。

「リーゼちゃん！　こ、零れるど！　お爺(じい)ちゃんのお茶が零れちゃうべや！」

「泣き言は聞きたくないノダ。一滴でも零しタラ、十字架に吊(つ)るス」

ジジイと孫娘が、和気藹々(わきあいあい)と何してんだか。

「修くんと鞘音ちゃんも、もしよければ食べて食べてぇ。いっぱい作ってきたからねぇ」

エミ姉にランチボックスを差し出されたので、お言葉に甘えよう。大して労働してないけど。俺と鞘音はベンチに隣り合って座り、ツナサンドを齧(かじ)る。咀嚼(そしゃく)するたびにパンと混ざり合うマヨとツナが、舌の上で絶妙に蕩(とろ)けた。

「……修はサンドイッチ好きなの？」

「うん、嫌いじゃないよ。タマゴとかツナ、カツサンドも好きかな」

「……修が食べてくれるなら、エミリィさんに教えてもらって……今度作ってみる」

「マジで？　めっちゃ楽しみに待ってる！」
予定外の嬉(うれ)しい口約束が結ばれ、俺の心も小躍りを禁じ得ない。
「うんうん、教える教えるぅ。修くんへの愛情をいっぱい込めれば、美味(おい)しいサンドイッチができるからぁ♪」
「……エミリィさん、恥ずかしい台詞(せりふ)は禁止でお願いします。わたしは料理に愛情を込めるような惚気(のろけ)た女じゃないですから」
「うんうん、うんうんうん♪　台詞はともかく顔は素直でよろしいねぇ」
「……冬は冷え込むので、顔が赤くなって困ります。それだけです」
お堅い言葉とは裏腹。耳まで紅潮する鞘音に、ただ頷(うなず)きながら微笑(ほほえ)むエミ姉。
「ここまでは順調だげっども、ライブ会場はだだっ広いべ。スキー場への道路みたいに細くねぇがら、一筋縄じゃいかねぇべな」
温かいお茶でごくりと喉を潤し、一息吐いて懸念するトミさん。ステージは一メートル以上の高さに位置し、天幕という屋根も一応はある。設置済みの音響類はカバーを被(かぶ)せていたため無事だが、ステージから降りると腰あたりまでは埋まってしまう積雪量。
山の天気を舐(な)めてはいけない。住宅地からはそこまで離れていないのに、たった一晩で悍(おぞ)ましい白銀に侵食されてしまうのだ。
「それに、雪がめちゃくちゃ重てぇっちゃな。雪質が湿ってるっつーか、水分が多い感じだからよ、ジジイどもがヘバってきてる。あと、雪置き場が足りねぇ」

農家オールスターは、トミさんを除くと六十代以上が大半。昼休憩中も疲れた疲れた（こわいこわい）と、自分の腰を叩き（たた）ながら苦笑いしている。

「イベントを実行するには、ステージ周辺と観客スペース、駐車場を整備してほしいんだけど……いけそうかな？」

「おいおい修くん、誰に言ってんだ？　トミ・コネクションの精鋭が集まってんだからよ、余裕に決まってんべや」

右腕を折り曲げ、力こぶを執拗（しつよう）にアピールしてくるトミさん。

「それに、頼もしい援軍がそろそろ到着する頃だおん」

よっこらせ、と立ち上がり、屋外を見詰めながら意味深にそう呟（つぶや）いた。和やかな昼食タイムを挟み、午後の作業に入ろうとしていた俺たちの足元に、地響きにも似た衝撃。

「おい……マジかよ」

続けざまに接近してくる野太い排気音。

仕事を依頼した俺でさえ、想定以上の本気度に驚愕（きょうがく）の眼差（まなざ）しを隠せなかった。

ガス屋の名前が書かれた６ｔトラックと、巨大なバケットを装備したホイールローダが、一本道を登ってきたからだ。

「よお、調子はどうだクソジジイども。冬眠せずにやってっか？」

運転席の窓を開け、そこから投げ出した右腕をだらんとぶら下げているのは、何を隠そうウチの母さん。格好良さと美しさを兼ね備えたトラック運転手のヤンママ参上は、おじさんだらけな現場の士気を視覚的に奮い立たせた。

「よーし、わたしも久しぶりに本気出しちゃおっかな！」

自家用ホイールローダを運転していたのは、鞘音の母さん。俺が子供の頃に、桐山家の広大な土地を鞘音の母さんが除雪していたことを思い出す。

さすが、旅名川ナンバーワンと名高い農家の嫁。大型特殊免許も取得済みだぜ。

「……わたしの母さん、最高に痺れるわね」

鞘音が呆然と感激していた。お淑やかそうな容姿とのギャップが、アーティスト独特の感受性を刺激している……らしい。

それと、もう一人。母さんのトラックより降りてきた人物がいた。

「ステージの準備は任せてクダサイ。音楽関係は得意分野デス」

来たーっ！　スターリング家のグランドマザーが！　いや、エミ姉の母親なんだけど、リーゼから見たらお祖母ちゃんに相当するので。

交通網が麻痺してるので、外注のスタッフは旅名川に来られない。それに、公式イベント自体を観光協会が中止にしたため、仕事もキャンセルになっているはず。

特に音響周りは専門の知識が必要なので、若い頃は音楽家だったエミ姉ママに代役を依頼したというわけだ。

「配線周りから再確認したり、念のためサウンドチェックもしなきゃいけないんですけど、引き受けてくれますか？」

「困ったときはお互い様デス。ＰＡは任せてクダサイ♪」

親指と人差し指で輪を作り、肯定の意思を示すエミ姉ママ。

役者が揃（そろ）い踏み。旅名川の三大美人ママたちが、俺たちの冬フェスを彩ってくれる。各々が作業の場所に散り、後半戦が始まった。

トラクターで雪をどかす農家オールスター。ホイールローダのバケットを巧みに操りながら雪を掬（すく）う鞘音の母さん。荷台に積まれていく雪を雪捨て場にトラックで運ぶウチの母さん。ステージ周りの雪をシャベルで払い、複雑な音響類を再確認していくエミ姉ママ。

爽やかな汗が滴る大人たちの戦場を、一先（ひとま）ずは任せることにする。

「俺たちは、自分たちの仕事をしよう。大袈裟（おおげさ）かもしれないけど、いつまでも語り継がれるようなステージにするために」

「……うん。一緒に頑張ろうね」

鞘音の手を取ると、向こうも握り返してくれた。母さん以外のバンドメンバーは、トミさんの車に乗り込み、いったん住宅街へ引き返す。

帰路の道中、スキー場への一本道を、徒歩で登ってくる長蛇の列と遭遇した。

気を効かせたエミ姉が車を一時停止させ、垢抜（あかぬ）けない青臭さが漂う容姿の列を率いていた初老男性を引き留める。

「教頭先生、ありがとうございます。お手数おかけして申し訳ありません」

「ほっほっほ、全校生徒……とまではいかないけど、思ったよりは集まってくれたよー。このまま、正清たちに合流すればいいのかいー？」

「はい。現場は平均年齢がだいぶ高いので、若い学生の手助けは有難いです。よろしくお願いします」

愉快に笑う教頭と会釈し、エミ姉の車は再び発進。地元の中学生と小学生で構成された列の進行方向とは反対へ突き進んでいく。

教頭ならではの情報網を使い、集めてくれたのだ。中学の教員と小学校の教員も、きちんと引率として同伴しているので、安全面も問題ない。

そして、トミさん一同が道を切り開いてくれたからこそ、学生戦法は活きたのだ。

「楽しみにしてるから！　リーゼ！　オレは目の前で見てるからな！」

学生の列に追従していた陽介（ようすけ）が、擦れ違う車に気付き、反転して咄嗟（とっさ）に叫ぶ。

リーゼは窓を開放し、身を乗り出して十字を切った。リーゼなりの「期待してくれ」みたいなメッセージなんだろう。

中止になるはずだったＳＡＹＡＮＥのライブ。楽しみに待っていた地元の住民が、未来ある学生が、快く協力してくれる。

ふつふつと、沸き立つ緊張。そして、興奮の武者震い。

たぶん、ステージに立つ側は同じ感情を共有しているはずだ。

エミ姉の実家に帰還した俺たちは、レッスン部屋に缶詰め。時間が許す限りの音合わせとパフォーマンスの最終確認を推し進めた。

松本修が思い描く冬フェスは、固定概念に縛られない。俺たちが『面白そうだ』と確信したことを、文化祭みたいなノリで披露し、観客を心の底から盛り上げるだけだ。

ほんの一瞬でもいい。一日だけの幻想でもいい。

どんな苦悩も、　未練も、　後悔も、　誰かに忘れさせてあげることができるのなら。
理不尽に与えられた青春の余命にも意味があったと、　何度も、　何度も、　思えるよ。

最終章　気付かないふりをしてね、センパイ

私が〝センパイ〟と呼び始めたのは、あの人と行ったスノーランタンフェスだった。

正清（まさきよ）お兄ちゃん、という幼稚な呼び方が段々と恥ずかしくなり、私が中学に進んでも普通に使えるから、という理由で〝センパイ〟が定着した。

今思えば――呼びかたとか、敬語とか、どうでも良い体裁ばかりに捉われていた。小学生なりに、試行錯誤して勇気を出した結果と言えばそれまでだけど。

妹分として、親しい友達として、しがみつこうとしたからかもしれない。

女子と親しげに話す男子を、他の男子小学生はすぐに茶化（ちゃか）す。あいつが嫌がるのを恐れた私は、女の子らしかった長髪をショートに切り、異性という枠を自主的に外れていた。

そうすることで、あいつが普通に遊んでくれる。周囲のからかいを気にせず、普段通りの親しい関係を維持できる。今思えば、小学生らしい浅はかな思惑。センパイは同調圧力で私を避けたり、付き合いかたを捻（ね）じ曲げる人じゃないのに。

小学生時代の写真は、あまり見たくないし、見せたくないかな。女子と映るシーンより、センパイを中心とした男子と映るシーンの割合が圧倒的。私の服装や髪形も、初見の人には男子と間違われるほどだしね。まあ、同級生との思い出話としては笑えるけどさ。

センパイは一つ年上。生まれるのが一学年だけ遅かったという現実が、二人を一時的に遠ざけた。私が小学六年生になったとき、センパイは旅中（たびちゅう）に進学してしまったのだ。

「私も来年には入学するし、正清お兄ちゃんも寂しがらないでね！」

卒業式では、励ましという建前の照れ隠しを贈った気がする。寂しいのは私のほう。泣きそうだったのを、必死に誤魔化(ごまか)した一幕だと思う。

案の定、センパイと過ごす時間は減少の一途。別々の学校という状況に加えて、友人が多いセンパイの楽しそうな下校風景を何度も目撃し、多少なりとも遠慮したのだろう。

「ねえ！　お兄ちゃんはお風呂入りに来た？」

自分の両親や祖父母へ、同じ質問を毎日のように投げる。放課後と週末は実家の三雲(みくも)旅館を手伝いながら、お客様用の正面玄関を行ったり来たり……たまにセンパイが顔を出してくれるのを、日々心待ちにしていた。無邪気に駆け寄って抱き着いていた過去の恥部は、今でもセンパイにからかわれる。

恋心は無かった。いや、自覚していなかった。

親しい兄を慕う好意。私は家族愛の範疇(はんちゅう)だと思い、自らの気持ちを疑っていなかったのだが、心境に些細(ささい)な変化が生じたのは――小学六年の冬。

冬休みの気配が漂う教室、クラスの女友達がスノーランタンフェスの話題で盛り上がっていたのだ。いまいち反応が乏しい私に、マセた女子は解説してくれる。

「ここで好きな人とスノーランタンを作ると、永遠の愛が結ばれるんだってさ」

安直すぎる都市伝説でも、子供はすぐに信じ込んでしまうもの。友達が姦(かしま)しく騒いでいるのを横目に、私は半信半疑だった。

恋愛という概念が分からなかったし、異性として好きな人も特にいない。クラスの男子はガキっぽくて、愛だの恋だの叫ぶような対象でもなかったんだけど。

年上の正清お兄ちゃんとなら、行ってあげてもいいかな。

あいつのクリスマスは、同類の友達と過ごす男臭い日に決まっている。

どうせ、優しい私くらいしか相手にしてくれる女の子はいないでしょ。

家族を誘うようなイメージで、気軽に話題を切り出せばいいだけ。私はあいつの妹的な存在……恋愛感情じゃない。そう、流行(はや)りの話題に乗り遅れないための人生経験だ。

「お兄ちゃん！　こ、今度……今度のクリスマスね？　い、いい、一緒に……‼」

旅館で会うたび、しどろもどろ。

単純な誘い文句なのに、なぜか緊張して喉に絡む。一緒に――の続きを、あいつの前でようやく言えたのは、クリスマスの数日前だった。

「おう、ヒマだし構わねぇど！　お前と遊ぶのも久しぶりだっちゃな！」

雪よりも白い歯を見せたセンパイのやんちゃな笑顔は、今でも大切な記憶。

慣れないスカートを穿(は)き、精一杯のお洒落(しゃれ)を意識した私は、胸の高鳴りと未知の高揚感を抱きつつ、待ち合わせ場所に向かった。

永遠に結ばれるという言葉の意味を、いまいち理解していない幼稚な子供のままで。

早く大人になりたいな。

そうすれば、今まさに抑えられない感情の正体も理解できるはず。

ふいに漠然と、そんなことを思い耽(ふけ)ったのは覚えている。

「四月からは私も中学生なので、これからは〝正清センパイ〟と呼びますね」

スノーランタンフェスの帰り道。家族みたいな砕けたタメ口も、後輩らしく敬語に直す。センパイは少し寂しそうだったけど、悪い気はしていなかったらしい。

センパイ、来年もまたランタンを一緒に作ってくれますか?

これしきの言葉が、なぜ痞(つか)えていたのだろう。

家族みたいな相手を誘うだけなのに、顔が火照(ほて)って動揺を押し殺せないのだろう。

答えは単純にして明快。

あいつに対する想(おも)いが、家族とは異なる領域に達したというだけのこと。

恋愛初心者の三雲雛子(ひなこ)は、正清センパイに初恋を捧(ささ)げ、恋心を知ったのだった。

＊＊＊＊＊

一年遅れて、私も中学の制服に袖を通す。依夜莉(いより)さんの影響からか、センパイは短髪を黄金色に染め、肩で風を切っていた。今思い返しても、ジワジワと笑える鉄板ネタだ。

センパイは、どんな女の子がタイプなんですか?

内心は心臓が破裂しそうなほどの高鳴り。でも、平然を装いながら好みのタイプを尋ねると、正清センパイはアホ面で唸(うな)りつつ、決まってこう答える。

「ガキっぽい俺を引っ張ってくれそうな、髪が長くて大人っぽい女の子だべな!」

センパイの後ろを付いて回っていた私とは、真逆。友人や家族に「彼の妹みたいだね」と言われることはあっても「彼女みたいだね」とは絶対に言われない。

どうしてだろう。発育が足りないのかな？

「ふむふむ……メイクとかファッションって難しいな～……」

中学一年の当時は身長も低く、容姿も垢抜けていなかったので、密かにイメチェンを画策していた。まったく手入れをしていなかった眉を細く、消える寸前まで薄く剃る。

母親のアイブロウを勝手に借り、眉毛を描き足すという大人のテクも覚えた。

携帯電話なんて持ってない。少ないお小遣いでヘアカタログやファッション誌を買い、最新の情報を逐一仕入れた。

「つーちゃんと同じ髪型にしてください」

中学一年の夏休み、生まれて初めて足を踏み入れた春咲市の美容室。

ファッション誌の読者モデルを指さし、同様のド派手な盛り髪を要求したんだけど……彩度が高いブラウンに染められ、毛先が巻きに巻かれ、ヘアスプレーでふわふわと固められた髪型を鏡で目の当たりにしたら、自分の顔なのに知らない人みたいで気持ち悪い。

「でも、これで大人っぽくなったかな？　なったよね？」

芋臭い中学一年生には、都会のキラキラしたモデルが理想の大人。そう信じて疑わなかったから、私はギャル街道をひた走ってしまう。膝丈より長かった制服のスカートを、股下から測ったほうが早い短さにしてみたり。

外見だけを変えればいい。そんな上辺だけの思考が、ガキっぽいというのに。

染髪は校則で禁止されていたので、進路指導室に呼び出されたことも。センパイと私は不良カテゴリーに括られ、二人まとめて生徒指導の体育教師に怒られる。

「ヒナ……お前、その髪型どうしたのや？　ギャルみてぇに盛りまくってよ」
「べっつにー？　私も中学生になったし、都会のギャルとかに憧れるんですー」
未(いま)だに違和感のあるウェーブの毛先。
人差し指でくるくると巻き、センパイの質問を軽く受け流す。
「豊臣(とよとみ)はバカだからともかく、三雲は成績もそれなりに良かっただろ。それなのに夏休みが明けた途端……髪を染めたり化粧をしたり、何があった？」
「先生は知らないんですかぁ？　夏休みデビューってやつですよぉ」
対面に座る先生を挑発するように、組んでいた足を組み替える。あからさまに短くなったスカートから、白い生足を太ももまで露出させた。
ほら、センパイ。私の美脚に括目して。中学二年の欲求不満な男子だったら、いやらしいエッチな視線で舐(ねぶ)っていいよ。
表情は挑発を意識してるけど、やっぱり慣れてないので恥じらう。センパイに大人の余裕を伝えるために、羞恥は捨てないと……。ああ、でも恥ずかしい。
先生が目のやり場に苦慮していると、正清センパイが私の足を見て……一言。
「ヒナ……夏は暑いからって、スカート短くしすぎだど？　下着が蒸れるんだったら、お前の母ちゃんに頼んで、通気性のいいパンツ買ってもらえ」
…………はあ？　お前は私のお兄ちゃんかよ。
「ばーか！　さいてーっ！　センパイって女心を分かってないんですね！」
「ちょ……!?　な、なんでそんなに怒ってんのや!?　俺が何したんだべ!?」

ぽこぽことセンパイの肩を小突く。ギャグとかではなく、センパイは本気で私の下着事情を心配してくれた。呆れ混じりの溜め息しか出ない。

「それと、芳香剤みたいなの付けてっぺ？　お前の温泉みたいな匂いが好きだけどなぁ」

「芳香剤じゃなくて香水です！　こ・う・す・い！　女の子に対して『温泉の匂い』とか失礼ですよ、ねえ！」

「う、うえぇ……？　入浴剤みたいな匂いって言えばいいんだべか？」

「そういう問題じゃなくて！　ほんとバカだ、この人は！」

そういう飾らない素直さが素敵でもあり、もどかしくもあるけど。

二人揃って反省の態度が無く、やかましい雑談していたので、業を煮やした先生に叱られる。でも、センパイと一緒に怒られる時間も、悪くないなと思ったり。

「三雲は優秀だと思っていたんだが、失望したぞ。そんな生徒だとは思わなかった」

先生は首を横に振りながら、失望の溜め息を隠さない。

「今すぐ髪を切って黒く染めてこい。そうしないと、授業に参加することは許さん」

「は、はあ？　だったら黒染めだけでもいいじゃないですか！」

「髪が長いから、チャラチャラと弄りたがるんだろ。バッサリと切れば、そんな気も起こさなくなるんじゃないか？」

「い、嫌です……髪を切るのは……だって――」

センパイは、髪の長い女性が好きだって言っていたから。先生の大柄なガタイと威圧的な態度に怯み、私はすっかり萎縮して怯えきってしまった。

「おい、センセーよぉ。てめぇにヒナの何が分かんだよ」

でも、そこで立ち上がるのがセンパイ。鬼にも似た形相で先生の胸ぐらを掴(つか)み上げる。
「こいつはガキだから、背伸びしてお洒落してぇ年頃なんだよ。女の命みたいな髪を切れとか、てめぇは何様のつもりなんだ、こら」
胸の鼓動が、いつまでも止まらない。惚(ほ)れ直した。心底嬉(うれ)しすぎて、恋する視線が左右に揺れた。今度は先生が圧倒され、センパイはトドメと言わんばかりに宣言する。
「頼むよ、センセー。俺が坊主にするから、見逃してやってけろ」
翌日、センパイは近所の床屋で丸坊主にしていた。私は謝ったけど、センパイは「シャンプーが楽になったど！　野球部に入れるべか？」と、自然な笑顔を絶やさなかった。
センパイは人気者。老若男女問わずに仲睦(むつ)まじく話すし、オラオラ系の友人も多い。
たまに上級生や先生と喧嘩(けんか)はしていたけど、顔はそれなりに整っていて、子供みたいな笑顔が絶えないセンパイに惹(ひ)かれている女子も何人か知っている。
「ねえ、豊臣くんって付き合ってる人いるの？」
なぜなら、女友達にセンパイの素性を聞かれる機会が結構あるからだ。私とセンパイが仲良しなのは周知の事実らしく、私に仲介を依頼してくる。
愛想笑いの底に、仄(ほの)かな苛立(いらだ)ち。
、、、、、、、、、、
なぜ、誰も私を恋人だと勘違いしないのだろうか。私はそれなりにセンパイと喋(しゃべ)る場面も多くて、学校でも様々な人に認知されているはずなのに。
「それじゃあ、豊臣くんに好きな人はいるの？　雛子なら知ってるでしょ？」

「……ははっ、たぶんいないんじゃない？　あいつ、恋愛とか興味なさそうだし」
センパイに恋人はいない。それは確実だと断言できる。
しかし、好きな人がいない……とは自信を持って言えなかった。私たちは色恋沙汰の話をしないし、こちらから聞くのはちょっとだけ、怖い。
だって――もし、センパイに好きな人がいて、それが私じゃなかったら。
ダサすぎるよ、三雲雛子。
何でも知っているふりをして、実は知るのを怖がっているなんてさ。
「そういや、雛子。夏休み明けてから、ずいぶんと大人っぽくなったよね？　化粧とか今度教えてよぉ～」
友達には褒められる。大人っぽいとか、お洒落とか、持て囃される。
本当に言ってほしい人には、褒められてないのが不満。センパイと馴れ馴れしいのがいけないのだろうか。妹感というか、恋愛対象外の後輩感みたいな印象を無くせば、センパイも私を異性として……意識してくれないかな。

＊＊＊＊＊

残暑も緩くなってきた一年生の秋。
兄離れ……じゃないけど、センパイの後ろを徐々に追っかけなくなった。
妹系後輩からの脱却という側面もあったし、私が一歩下がれば、今度はセンパイが追いかけてくれるのではないかという安直な目論みもあったからだ。

「あっ、聞いてくださいよぉ、センパ――」
学校の廊下で出会っても、以前のような気安い絡みを堪え、
「豊臣センパイ、おはようございまーす」
普通の挨拶に上書きした。律儀に苗字で呼んでみたものの、違和感が喉奥に滞る。
「どうした、ヒナ？　最近、元気がないみたいだげっども」
「いやいや、別に三雲雛子は通常営業ですってば」
「あ〜、分がったど。便秘なんだべぇ〜？」
何言ってんだ、このバカ。
「ちょっと待ってろ。鞄に便秘薬が入ってっから、持ってきて……って、いだっ！　何すんだ、おい！」
「ばかばかばーか！　どうして、あんたみたいなやつがモテるんだよーっ！」
数回ほどのローキックをかまし、私はその場を無様に走り去った。アダルトな美女を目指すどころか、デリカシーのない挙動に腹が立ってブチ切れる始末。
心配してほしいんじゃないんだよ。髪型が似合ってるとか、香水変えたよねとか、些細な好意の見え隠れを褒めてほしいのに！
ああ……振り回されてる。あの能天気なバカに、いっつもいっつも。
午後からも授業があるんだけど、無性にムカついたので、そのまま学校を飛び出す。外見は初心者ギャルでも、勉学や性根は真面目。授業をサボったのは初めてだった。
「……はあ。買い食い、買い食いっと」

深海よりも深い溜め息を秋風に溶かし、公民館の自販機で紙パックのイチゴミルクを購入。人生初の買い食いに若干ビビりつつも、周囲に誰もいないので、迷わずにストローをぶっ刺す。サボりからの買い食い……中学生なりの、ちょい悪なストレス発散だ。

最寄りの児童館に移動し、滑り台の頂点に一人で体育座りする寂しい女子中学生。

ストローを甘噛(あまが)みしたまま、苺(いちご)の果汁をねちねちと吸い上げた。

はあ……どうして、こんなに空回りしてるんだろ。試行錯誤しながら髪の毛を弄(いじ)って、長々と店員に相談して高価な服を買い、無駄に早起きして化粧に勤(いそ)しんだりさ。

私のほうが遥(はる)かにバカじゃん。

すでに飲み干した紙パック。ずずず、と汚い音を響かせて啜(すす)り続ける。

「センパイのばっかやろぉおおおおおおおおおおおおおお!!」

からりと乾いた青空に、乙女の鬱憤を手加減せずひたすら遠くへ、ぶん投げた。

いくら叫んでも、声というものは発した瞬間に消えるもの。

この場にいない苛立ちの元凶には届かないはずだったのに、

「こんな近くにいるんだから、大声で叫ばなくても届くべっちゃ」

なぜ、あんたはそこにいるのかな。

目線をやや下に落とす。滑り台を下った出口の前に、正清センパイが仁王立ちしているではないか。恥部を晒(さら)した照れ臭さで頬(ほお)が火照(ほて)り、まともに直視できない。

「……いつから、そこにいたんですか？」

「お前が滑り台に登って、ふて腐れたツラのまま、ジュースをちゅーちゅーと吸い始めたくらいだべな」

火照るどころか、顔が焼け爛れそうなほど熱いんですが。
「このっ……！　目の前にいるなら教えてくださいよ……！」
滑り台に乗せていた右足を振り上げ、履いていたローファーを蹴り投げるも、
「はい、当たんねえよーだ。農業で鍛えた類まれな運動神経を舐めてんべ」
軽々と躱されてしまう。
「それとな、お前が右足を振った瞬間、パンツ見えたど。白いの」
「…………!!」
咄嗟にスカートを押さえるも、下着を見られてしまった事実は変わらず……。猛烈な恥ずかしさとか、ムカつきとか、いろいろな感情が大渦を巻いてる！
「おい……？　ヒナ……？　待て待て……！　うおっ……！」
私は半泣きを誤魔化すために、子供用の滑り台を勢いよく滑り降り、のうのうと出口に立っていたセンパイの脛へと盛大なドロップキックをかました。
地面は舗装されていない砂。丈夫なセンパイはビクともしなかったものの、非力な私だけが跳ね返され、地面に尻もちをつく。
ああ、惨めすぎる。空回りしてるなぁ、今の私。お尻もじんじんと痺れてるし。
「センパイ……ムカつく」
「なんでだべ……？　さっぱり思い当たる節がねぇんだげっども」
一人相撲の情けなさが加速する。

大人になりたいのに、子供っぽく泣きべそをかいてしまう。

「立てるか？　怪我（けが）とかしてねぇか？」

「……立てません。お尻が痛すぎます。二つに割れました」

打ち付けたお尻が痛いのは本当だけど、歩けないほどじゃない。私の心に燻（くすぶ）っている妹の甘えが、大袈裟（おおげさ）な表現を選んでしまった。

「しゃーねーな。ほれ」

幼少期から変わらない。私が駄々（だだ）をこねると、センパイはでかい図体（ずうたい）を屈（かが）めて、背中を差し出す。年齢を重ねていくにつれて、面積や体積が肥大していく身体（からだ）。小学校低学年までは私のほうが身長も高かったのに、いつの間にか、追い抜かれてしまった。

「中学生でおんぶは恥ずかしいですよ。同級生に見られたらどうするんですか？」

あくまで不本意という建前を忘れずに。

私が望んでいる、という思惑を悟られるのが恥ずかしいので。

「別に構わねぇべや。俺たちが付き合ってるなんて囃（はや）し立てるやつ、学校にいねぇって」

「まっ、そうですけど！　兄妹（きょうだい）みたいですもんね、私たちは」

センパイが何気なく言った気遣いの台詞（せりふ）が、私の胸に針の先端を打つ。じくじくと、時間をかけて粘着質な痛（いた）痒（がゆ）さが浸潤してきた。

私がセンパイの背中にもたれ掛かり、体重を預ける。数年ぶりのおんぶなのに、センパイの制服に染みついた汗とカップラーメンの男臭さも、制服越しの体温も、岩山のように波打つ筋肉の感触も、未知の焦燥と針の痛みに奪われた。

現状維持は楽だけど、有りのままの感情を吐き出せないのも、一種の拷問。

「学校に戻るのか？　それともサボって帰るのか？」

「……帰りまーす。このまま、お姫様みたいに運んでください」

「貧相でワガママなお姫様だっちゃなぁ。りょーかい」

「貧相な身体で悪かったですね。これからもっと成長して、ダイナマイトボディになる予定なんですよ」

鼻で笑うな。今に見ておれよ、鈍感野郎め。

呆(あき)れた様子のセンパイだったが、私を背負ったまま、ゆっくりと歩を進める。言動はガサツ極まりないのに、振動をなるべく抑えているという紳士な思いやりが、彼の大きな背中越しから十分に伝わった。

「お前、ずいぶんと重たくなったたっちゃな」

「は、はあ!?　失礼ですよ！　センパイはマジで！　ホントに！」

「い、いや、小学生の頃に比べたら成長したなって意味だど！　暴れんな！　てか、めちゃくちゃ元気じゃねぇか！」

両足をジタバタと前後に振ると、センパイは眉を八の字にしながら困り果てていた。デートなんかじゃなくても、デート気分。三雲雛子だけの特等席なのだ。

「最近のお前さ、可愛(かわい)くねぇぞ。男の俺には分からねえが、たぶん無理してっぺ」

「余計なお世話です……。女子の気持ちは女子しか分からないんですよ」

「それなら、男子の気持ちを伝えとくわ。以前の飾らない素直なヒナのほうが、何倍も可愛いと思うど」

虫の鳴き声が木霊する田舎道。センパイは私を背負い、亀にも劣る速度で帰路を辿(たど)りながら、顔だけ振り返って白い歯を見せた。

「……夏休みデビューした私、結構モテるんですよ？　何回か告白されてるんで」

好きな人がいるような、いないような。そう曖昧に濁しつつ、丁重に断ったけどね。

「男子にも好みがあるからな。少なくとも、お前をおんぶしている男子は興奮しねえ」

やんちゃな悪ガキの笑顔は、私に燻っていた針を取り払う唯一の方法。どの教科書にも、医学書にも掲載されていない私だけの治癒魔法。センパイの〝可愛い〟は、異性としてではなく、身近な妹分として……嬉(うれ)しい反面、複雑な胸中を隠しつつ、地味なセクハラ発言の報復として、センパイの頭にチョップしておいた。

　マイナス思考を張り巡らせても精神が摩(す)り減るだけ。センパイとの時間はこれからも続いていくだろうし、高校も同じだとしたら焦る必要はないかな。

　現状維持――高校生くらいになったら、告白してみよう。そうしよう。私にもあいつにも、恋なんてまだまだ早い。どちらも内面が幼稚だし、あいつは色恋に鈍感っぽい。

　いや、私が告白なんて負けた気がする。高校に通う頃には、読者モデルも顔負けなお洒落(しゃれ)さんになっている私に、向こうから告白させようかな。

　そして、小生意気に言い返すんだ。ちょっとだけ、考えさせてくれない？　ってさ。

　ヤキモキさせて、散々焦(じ)らして、結局はオーケーしてあげるんだけどね。

　なんか良くない？　小悪魔チックな後輩みたいで。

無理やりに関係の進展を図ろうとして、今の絶妙な距離感を壊したくないもん。

異性として意識せずに、今年も堂々とクリスマスの予定を奪ってしまおう。センパイには一緒に行く相手なんていないだろうし、私が誘ってあげないと可哀そうでしょ。

お互いが大人になるまでは、妹みたいな後輩のままでいいや。

「センパイは、好きな人とか……いるんですか？」

それでも、これだけは聞いておきたい。確かめて、暫くは安心していたい。

「なんだべや、突然。ヒナらしくねぇな」

「いえ……センパイのことを気になってる物好きな友達がいるので、一応聞いておいたほうが良いかなーと」

これは嘘じゃない。私が知りたいわけじゃない、という建前は取り繕う。

「答えは読めますけど。遊ぶことしか頭にないセンパイは、恋愛なんて興味ないですよね」

んなもん、いるわけねぇべや。

そんな回答が返ってくるとばかり思っていた。すっかり、心の防御を解いていた。

「……まあ、お前だけには言ってもいいかなや。誰にも言うなよ」

「えっ？」

なに、この雰囲気は。どうして、センパイは言い辛そうに恥じらっているの？

「いるど。好きな人」

私は押し黙ってしまう。次に続く言葉を、早急に欲した。

「ずっと目では追ってたんだげっども、他の男子に茶化されるのが嫌でな。中学生になったら、どんどん大人びてきて、綺麗になって……俺の気持ちを抑えられなくなってきた」

「……名前とか教えてくれたり……します？」
「ばーか。恥ずかしいから、まだ言わねぇよ！　もし成就したら、最初に教えてやっから！」
センパイは珍しく頬に朱色を差し、笑って誤魔化す。
おんぶされているので、私のだらしない悶（もだ）えた表情はセンパイに見えない。
私は――センパイの肩に顔を埋（うず）め、緩みまくる口角を必死に隠していた。ずっと目では追っていた、中学に入って大人びてきた。それだけの抽象的なヒントだったけど、私は自分に都合のいい解釈に擦り寄せてしまって。
本人がいるのなら、それしか語れないよね。センパイもピュアなところがあるじゃん。
もしかして、センパイは私のことを。
今思うと、呆（あき）れるほど滑稽で、究極にダサくて、涙が出るほど悲惨。
三雲雛子の舞い上がった勘違いは、間もなく壊される。
数週間後、恋愛素人のセンパイから、恋愛相談を受けるという最悪の形によって。
どうして、あんなアドバイスをしてしまったんだろう。
真剣に恋愛相談を受ければ、あいつがフラれたときに逃げ帰ってきてくれるとでも、考えていたのだろうか。
私のもとへ、傷心を癒やしに戻ってくれるかも……醜い打算が、運命に嫌われたのかな。
私は負けていない。勝負すらできなかったのだ。
冬の季節、出会い目的の女友達グループに誘われ、仕方なく参加したスノーランタンフェス。センパイは「好きな相手を誘って告白する」と決意していた。
「センパイ、知ってます？　あの場所でスノーランタンを作った男女は、永遠に結ばれるらしいですよ」
小賢（こざか）しい私が、事前にアドバイスをしていたからだ。

どうせフラれる。女心を理解していないセンパイが、高嶺の花(たかねのはな)と付き合えるわけがない。
自分を宥(なだ)めるために願望を唱え、不穏に荒れる心拍を抑えようとする。安っぽい都市伝説を吹き込み、当たって砕けさせるような行動を促す。
狡(ずる)い。汚い。醜い。醜悪な思惑を攪拌(かくはん)させたまま、友達と旅名川(たびながわ)スキー場を訪れた。
実家にいると心身が落ち着かず、底知れぬ憂鬱に手を引かれてしまうから……はっきりと審判を下してほしかったのかもしれない。
裏を返せばチャンス。センパイの初恋が実らず、一人寂しく棒立ちしていたら、何食わぬ顔を維持した私が自然に駆け寄り、スノーランタンを一緒に作ってあげよう。
私が、私だけが――センパイを分かってあげられる。そろそろ、自覚してくれるんじゃないかな。三雲雛子は妹分ではなく、恋人にしたい女の子だったんだ……ってさ。
永遠に結ばれるのは、最初にスノーランタンを作った私とセンパイでしょ。
自己中心な思い込み。滑稽な勘違い。惨めで痛すぎる妄想。
なぜ、どうして、なんで。理想通りにならなかったのかな。
大人っぽい容姿に生まれていたら、センパイは惚(ほ)れてくれたのかな。
同級生として生まれていれば、年下扱いされないフラットな関係だったのかな。
センパイと出会うのがもっと遅かったら、異性として意識してくれたのかな。
生家が旅館じゃなければ、頻繁に会う妹分として恋愛対象外にされなかったのかな。
生意気に恋愛相談なんて引き受けなかったら、今も私だけのセンパイだったのかな。
泥沼の三角関係に持ち込んでいたら、それなりに戦えたのかな。

センパイが将来に迷っていたとき、打算的な行動で恋仲を破綻させていれば。

初恋を言葉にして、きちんと真正面から告白していれば。

「俺はエミリィさんのことが、好きだ」

二人がスノーランタンを作り終え、無事に点火したタイミング。センパイが初恋の相手に告白し、彼女が満面の微笑みを返した瞬間を——雑踏に身を潜めた私は、遠目から眺めているしかなかった。

スノーランタンを作った男女は、永遠に結ばれる。

あんなものは、嘘っぱち。だって、私の願いが叶わなかったんだもの。

あいつの隣に私以外の人がいるクリスマス。

嫌だ。嫌だよ。何度でも教えて……スノーランタンの作りかたを教えてよ。

私のお兄ちゃん、私だけの……正清センパイ。

初恋を自覚した冬は、好き。

初恋が終わった冬は、きらい。

エミリィセンパイとは、私が高校生になったあたりで交流が始まった。二人のセンパイと同じ春咲高校に進学したため、旅名川駅を経由するローカル線を使った通学。春咲駅に到着するまでの五十分近くを、私たち三人はボックス席で駄弁るのが日課になる。

エミリィセンパイは笑顔と善意の天使なので、馴れ馴れしい後輩も可愛がってくれたけど……当時の私は、したたかな打算を秘めていた。

正清センパイに邪魔者扱いされないよう、エミリィセンパイにも近づいたのだ。

二人は本当に優しい人だから、気兼ねなく接してくれたよ。私自身は……二人の背後霊と化す自分自身に、二人きりの機会を奪う強欲さに、薄汚い自己嫌悪が差していた。
私の高校生活は、背後霊みたいなもの。
キラキラしていた青春を、煩(うるさ)く茶化(ちゃか)しながら見詰めていた。
センパイたちだけの微糖な思い出になるはずだった数々の写真やプリ画に、気安い後輩という異物が横入りする異常さを、当事者の私だけが自覚していた。
邪魔者扱いせず、嘘偽りのない笑顔で私を受け入れてくれた二人の人柄が大好きで、無自覚な優しさが、三雲雛子の狡い傷口に塩を塗られているみたいで。
こんなはずじゃなかったのに。こんな痛みは、知りたくなかったのに。
いつ終わるんだろう。私は、いつ終わらせることができるんだろう。
答えを見出(みいだ)せないまま、私がいてもいなくても変わらない日々が続いていく。

お邪魔虫な私の高校二年生が過ぎ去り、センパイが高校を卒業する日。
卒業式を終えた三年生が、昇降口前の広場や中庭に集い、在校生や先生と雑談しながら別れを惜しむ。校舎の窓から見下ろすと、卒業証書用の円筒を持ったセンパイの姿もあった。私は一心不乱の全速力で校舎を駆け抜け、階段を跳ねるように降り、肩を上下させて息を切らし、校庭側の広場にいたセンパイのもとへ。
センパイは地元での就職を決めた。私の進路次第では、暫(しば)しの別れになるかもしれない。
そう考えると、胸に不愉快な鈍痛が生じる。とっくに身を引いた傍観者でも、仲睦(むつ)まじい恋人同士に縋(すが)る愛想笑いの道化を演じていても、走らざるを得ないほどの焦燥と動悸(どうき)。

高校時代の末期くらいは、ちゃんと青春しなきゃ……と。

「センパイ！」

帰ろうとしていた当人を背後から呼び止めると、踵（きびす）を返してくれて。

「センパイの第二ボタン……もし余っていたら、私にください」

告白なんてとっくの昔に諦めたけど、ほろ苦い思い出だけでも形に留（とど）めておきたい。

「ごめんな。第二ボタンはエミリィにあげちまった」

当然の結果だった。制服の第二ボタンは、好きな人に贈るもの。よく見ると、センパイのボタンや校章はすべて譲渡済みらしく跡形もない……幅広い人気を物語る結末だ。

「でもな、高校のジャージは誰にも譲ってねぇど。お前なら着てくれそうだと思ってな」

私のために……残しておいてくれた。ホント、優しいお兄ちゃんみたいな人。

欲しい。去りゆくアナタを、すぐ側（そば）に感じられるものだから。

「しょーがないですね。センパイのジャージなんて、私くらいしかもらわないですよ」

センパイにもらった赤基調の高校ジャージは、私の寝間着に任命してあげた。

同じ学び舎（まなや）で過ごす時間は失われ、二度と廻（めぐ）らない。付き合っていた二人に弾（はじ）き出されないよう、へらへらと付き纏（まと）っていただけの高校生活に、私だけが置き去り。

自分が主役の甘酸っぱい青春など、どこにも存在しなかった。

翌年、大学生になった私は長かった髪を切り、ショートボブに。もはやセンパイ好みにする理由もないし、気持ちを切り替えるという古典的な意味も少なからずあった。

吹っ切りたい。新たな恋で書き換えたい。大学ではそれなりに出会いもあり、サークルや合コンなどで知り合った異性から好意を寄せられることも多々あった。

それでも、私は……他人の純粋な好意を受け入れることができずにいる。口先では新しい恋愛を望むのに、偽れない本心は拒絶を示し続けてしまって。

故郷を離れるべきか、思い悩んだ就活。最終的に地元の観光協会を選んだのも、センパイへの執着と未練が原因の行き当たりばったり。

俺とお前で地元を盛り上げて、毎日が文化祭みたいな楽しい町にしてやろうぜ。

気遣ったセンパイが飲みに誘ってくれて、純粋に引き止めてくれたのが……嬉(うれ)しかった。

彼が何気なく弄(いじ)ったスマホの壁紙が愛娘(リーゼ)だったのには息が詰まり、現実逃避をしたくて直視できなかったよ。

エミリィセンパイに似てるしさ……心情的に結構きついじゃん。

私と結ばれていたら、子供はどんな顔になってたんだろ。

たぶん私に似ていて、とびきり可愛(かわい)いよね、きっと……。

センパイのアホな部分を受け継いだら困るなぁ……。

センパイの結婚から九年経(た)った現在も、恋焦がれている。もう何も抵抗できないのに。

実らない初恋を忘れたいけど、忘れられない。身勝手な自分自身が、大嫌いだ。

していたら。していれば。根拠のない仮定と未練に浸るだけの人生。勝負の土俵にすら上がらなかった三雲雛子は、現状維持という名の敗戦処理を全うする役割しか、ない。

冬が来るたび、恋を知らなかった頃の無垢(むく)な銀世界を思い描く。

スノーランタンの作りかたを――忘れたい記憶と共に、思い出す。

＊＊＊＊＊

徐々に袂（たもと）を別（わか）つ上下の瞼（まぶた）。冷え切った酸素に晒（さら）された瞳が、薄暗い情景を認識する。
仰向（あおむ）けで見上げる木造の天井は、見慣れすぎた自分の部屋。
死んだように、深海に沈んだように、私は眠りに落ちていた。
どうして、目覚めたんだろうな。幸せだった空想を夢見ながら、孤独に凍死しても別に構わなかった。この夢の続きは、望んでいない。この先は――悪者がいない悪夢。現状維持を選んだ私一人が、現状に取り残されただけの未練。
目覚めない眠りを続けるくらいなら、夢を見ない絶命を選ぶかもしれない。
町は真っ白に塗り替えられ、準備してきたイベントは中止になり、二十七歳の私は実家でいじけている。ヤバいよね。拗（こじ）らせすぎ。
「あーあ……センパイのばーか」
毛布や布団の他に、乾燥した空気も抱いていたため、喉が砂漠と化していた。ここにいるはずのないセンパイに、悪口をぶつける声も細く擦（かす）れている。
電気が消えているのに、真っ暗ではなかった。消し忘れたテレビの画面が青白い光を放ち、部屋を不気味に薄暗くしているらしい。電源を入れた覚えはないけど……。
むくり。冷蔵庫の水を取りに向かうため、上半身を起こす。

テレビの前には――人間のシルエット。

寝ぼけ眼（まなこ）が一瞬にして覚醒し、生唾を飲み込み、全身から汗がぶわっと吹き出す。

「ようやく起きたと思ったら、人をバカ呼ばわりって……酷（ひど）いっちゃな」

「…………えっ!?」

その！　バカ丸出しな訛（なま）り声は！

電気の紐（ひも）を引っ張り、部屋全体が照らされる。

私は眩（まばゆ）さに瞼を震わせながら、厚かましい人物とご対面した。

「よお、いじけた眠り姫様を迎えに来たぜ」

夢の続きは、現実に引き継がれるのだろうか。もしかして、違う未来の世界線に迷い込んでしまったのか。

私の身体（からだ）は二十七歳。今着ている服も、鞘音（さやね）ちゃんが着せてくれた寝間着。過去の時間軸に戻ったわけでも、未来が変わったわけでもない。

紛れもない現実。旅中の制服を着た正清センパイが、ふてぶてしい胡坐（あぐら）をかき、あろうことか私の部屋でテレビゲームをしているなんて。

格好つけた顔で決め台詞（ぜりふ）を口走っていたけど、テレビゲームを一時停止（ポーズ）しながら言うシチュエーションじゃないでしょ。もっとさ、王子様みたいにさ……もう、信じられない！

心底ムカつく。腹が立って仕方がないのに、

「……どうしてセンパイがいるんですかぁあああ……うえぇ……ぐっ……うう……」

貴重な水分を塞（せ）き止めていた呆然（ぼうぜん）が、歓喜に移り変わり、脆（もろ）い理性が制御不能。

目ヤニだらけのみすぼらしい瞳を、感涙の濁流に沈めてしまう。

「なんで泣いてんだよ。おかしなヒナだな」

「うえぇ……だってぇ……センパイがぁあああ……ううっ……うえっ……はあ……」

ふいに頭を撫（な）でられ、正真正銘の妹分に戻ったわたしは、さらに号泣してしまう。嗚咽（おえつ）でしか返答ができないという、恥部の大安売り。

「しっかし、ヒナの部屋は変わってねぇなぁ。ゲームソフトも、昔のままだべっちゃ」

いつ、あなたが遊びに来てもいいように。

私は部屋の時間までをも、冬の景色みたいな氷漬けにした。

「あと、お前の寝間着！　俺の高校ジャージをまだ着てんのか！」

「うう……うるさいですよぉ……。私が何を着て寝ようと勝手じゃないですかぁ……」

「いや、年頃の女の子なんだからよ……もこもこの可愛いルームウェアとかあるっちゃ？」

もこもこのルームウェアとやらより、センパイが色濃く染みついているジャージが好き。

恥ずかしくて言えないから、枕に顔を埋（うず）め、喜怒哀楽の洪水状態な表情を隠した。

「これ、エミリィからの差し入れ。お前が腹減らしてるんじゃないかって、心配してたど」

突然、センパイが差し出してきたお弁当袋。二つのたまごサンドがラップに包まれ、同梱されていたメモ帳の切れ端には『ヒナちゃんへ。お腹が空いたら食べてください』という手書きメッセージと共に、デフォルメされたひよこのイラストが愛らしく微笑む。

「……勝てない……勝てっこなかったんだよぉ……うぇええええ……うっ……」

もしゃもしゃ。たまごサンドを口いっぱいに頬張りながら、みっともないボロ泣き。

ひよこがいじけている間に、雪うさぎは他人を気に掛ける。両者には決定的な差がいくつもあり、同じなのは性別だけ。理解してる。私が男性だったら、たぶん惚れてるもん。

「エミリィの料理に勝てる住民は、なかなかいねぇげっども。自慢の嫁さんだおん！」

「……うう……センパイ……ムカつくぅ……」

「なんでだよ!?　乙女心は無農薬野菜よりもデリケートで困るどや……」

困惑するセンパイ。アナタが……理解する必要はない。私は絶対に教えてあげない。

「ぐちゃぐちゃな顔を洗って、さっさと着替えろよ。消えかけた灯を蘇らせた自慢の後輩が——青春時代の俺とお前を、熱烈に招待してるど」

意味が分からない。別に分からなくてもいい。

今日だけは特別なので、流されるままに遊びまくっちゃおう。

十二月二十五日、クリスマスのせいにすれば許される。

恋人気分になっても、制服デートのつもりでも、許してください。

もう一度、燃え上がった初恋は、神様だろうが邪魔させない。

私の青春は、もう止められない。
タンスから引っ張り出した懐かしの代物。
十二年ぶりに袖を通すも、意外と身体に馴染む着心地だった。純白のブラウス、紺色のスカート、胸に旅中の校章が縫い付けられたブレザーは、二十七歳だとコスプレの領域だよね。正清センパイの学生服姿とか、芸人のコントかと思ったもん。
まあ、他人の目なんてどうでもいいや。
制服デートが学生だけの特権とか、誰が決めたのかってハナシ。
すっぴんは嫌なので、押入れに閉じ込めていた化粧ボックスを開封。ギャルメイクの道具一式を滑らかに取り出し、ヘアアイロンの準備も抜かりない。エクステがあれば、髪の長さも再現できるのに。
車の中で待たせてごめんね、センパイ。女の子はデートの準備に時間を要する生き物だから。付き合いの長いセンパイなら、分かってくれるはず。
「なっげぇよ、おーいっ！　いつまで化粧してんだ！」
「女が化けてる途中に入ってこないでよ、バカ男が――――っ！」
この男……一ミリも分かってない。相変わらず乙女心を理解していなかった。
痺れを切らしたセンパイが部屋に戻ってきて、幼稚な口論が勃発。これが三雲雛子と豊臣正清の関係。外見だけを飾ろうとしても、容易に見破られる。
エミリィセンパイ相手にはたぶん晒さない、兄のような素の部分。私には平気で晒してくれるのが嬉しくもあり、恋愛対象外という立場を痛感もするけど。

それでも、好きな人の前では一番可愛い女の子でありたいから、髪の毛をゆるふわに巻く。流行りのメイクを真似る。年甲斐もない制服のミニスカを穿く。

靴箱の奥底から当時のローファーを掘り当て、ハイソックスを纏った足を挿入。玄関の床に爪先をノックし、かかとを押し込むという久しい感覚は高校卒業以来で。

今度は大人しく旅館の正面玄関先で待っていたセンパイに、ぶーぶーと文句を撒き散らされながらも、私は浮ついた雰囲気に身を任せ、こんな提案をしてみる。

「センパイ、歩いて行きません？　中学生は車なんて運転できないじゃないですか」

センパイは「それもそうだな！」と賛同してくれたけど——片思いの本音を、アナタは知らない。徒歩のほうが二人きりの時間を、数分でも長く感じることができるから。

中校生になりきった二人が歩き出し、森閑とする地元道で肩を並べる。他愛もない世間話や思い出話に花を咲かせ、お互いの笑い声を交わす制服デート……未だに実感が湧かず、夢の続きを見ているみたい。今年の聖夜で最も幸せな女の子は私かもしれない。

あれだけ舞い降りていた雪の粒が、ひと時の眠りに落ちている。どなたかによって雪の壁が一掃された登り傾斜の一本道は、私たちを緩やかに迎え入れるかのよう。

雪原に佇む古城。薄目にしてピントをボカせば、そんな風情も匂う廃墟のロッジ。

ひしひしと、漂ってきている。鼓膜を酔わせる歓声が、乾いた空気を痺れさせる。一時間……いや、数十分だけ美しい顔を覗かせた冬の星空。

天空の瑠璃色を挑発するかの如く、鮮烈に突き抜けるムービングライトの軌道。迫り上がってきた高揚感に全神経を逆撫でされ、頭の天辺から足の先までも熱く滾らせた。

冬の大地に降り立った瞬間、私は言葉を失う。
身体の芯より、じわりと浸透する感動を表す絶妙な比喩が思いつかない。
「スノーランタン……こんなに……」
スキー場という名の大雪原。
至るところにぼんやりと浮かび上がっていたのは、豆電球にも類似した淡い光。ステージの照明器具が無かったとしても、足元に佇む微光が重なり合い、暗闇の私たちに色を宿すだろう。地元の家族連れ、夫婦、友達同士、学生の恋人同士。各々が身を屈（かが）め、雪の欠片（かけら）に明かりを灯（とも）す。ホワイトクリスマスに、これ以上の相応（ふさわ）しい景色はない。
「修（しゅう）と鞘音が発端になって、地元の総力が集まったんだど。お前が頑張って宿した、年に一度の灯を絶やさねえようにな」
「なにそれ……私は幸せ者かよ……」
涸（か）れ果てたはずの涙が、瞳の表面に膜を張ってしまい、熱を帯びた目頭を押さえる。
ここは、観光協会に用意してもらった場所じゃなくなった。
お節介な後輩くんと後輩ちゃんが、そして平均年齢高めな地元の人々が、再び火を灯してくれたクリスマスの小さい奇跡。
制服の正清センパイに先導され、旅名川の中学生を模した私は、
「ふふっ……なにあれ……笑えるんですけど」
ふいに襲い掛かる失笑を堪（こら）えられない。

雪原に聳(そび)え立つステージを、ぎこちなく右往左往していたのは、さやねっこ。地元の小学生がわらわらと集い、心底困った様子で狼狽(うろた)えているのがシュールだ。

ぴょこ、ぴょこ。跳ねるように移動したさやねっこだけど、足を滑らせて豪快に転倒！　かと思いきや、咄嗟(とっさ)の前転で回避！　さやねっこ、凄(すご)い！

「この使い魔は社会のゴミ扱いされてイタ。魚の食い逃げは挨拶代わリ。カバンはペッタンコに潰して使うのがカッコイイと勘違いしてイタ。サヤネッコは救世主(メシア)が調教したノダ」

アドリブで突飛な境遇を捏造(ねつぞう)するゴスロリ通訳さん。イベント自体は中止が発表されているため、満員御礼とはお世辞にも言えないけど、数百人の地元民が温かい拍手を送る。

小中学生は指を差し、幼い顔つきをシワくちゃにさせながら笑っていた。

泣き腫らしたばかりの私も……笑っていた。後輩くんと後輩ちゃんは、拗らせ泣き虫な雛子センパイを元気づけるために、さやねっこを――連れて来てくれた。

「ホウ、命知らずメ。救世主の聖剣が革命の矛先になるゾ」

さやねっこが挑発のジェスチャーを繰り出す。売られた喧嘩(けんか)を買ったリーゼちゃんがギターを構え、両者が相対することで始まったのはギターのセッション。即興のフレーズを弦に宿し、己の魂が弾き鳴らす音や歪(ゆが)みを、無防備な観客の鼓膜へ容赦なく抉(えぐ)り込む。

観客スペースの前方に佇む人影は、スマホを片手にステージを撮影する後輩くんとエミリィセンパイ。さやねっこのイベントを、ライブ配信しているのだろう。

さやねっこの知名度アップのため。そして、止(や)むを得(え)ず来場できなかった人々のために。

「お前のお洒落タイムが長いからよ、修の発案でさやねっこが間を繋いでくれてたんだぜ。ダンスしたり、ギターを弾いたり、ビンゴゲームをしたりな」
「いじけた私を待っててくれたんだ……。本当にみんな……優しくて良い子だなあ」
天候もいつまで安定しているか不明。早々にライブを始めても良かったのに、こんなメンタルくそ弱ダメ女を待っててくれていたなんて。
「依夜莉姉さんに腕相撲で勝てたら、ほっぺにちゅーっ！　って即興の企画を俺が提案したら、依夜莉姉さんに腹パンされたけどな！」
「うわぁ、センパイは気持ち悪いですね～。割と冗談抜きで」
「俺だけじゃねぇど！　おっさんたちが隊列を成したが、全員撃沈した……」
「結局、腕相撲やったんですか！　男って生き物はこれだから……」
呆れを通り越して、頬が引きつってしまう。あと、依夜莉さん強すぎでは。
私が到着したのを視認したからか、さやねっこと通訳さんはステージの裏へ。ボケっと突っ立っていた私に、センパイが蠟燭とライターを手渡すと、
「スノーランタンの作り方、知ってっか？」
口元を綻ばせて、そんな質問をしてくる。知らないわけないじゃん。あなたと二人で過ごした最初で最後のクリスマスに教えてもらったんだから。
「……忘れちゃったので、センパイが教えてくださいよ」
それでも、何食わぬ顔で知らないふり。
「しゃーねーな。俺が教えてやっから、一緒にやっぺし！」

センパイが笑顔で教えてくれるのを、待ち望んでいた。十五年間、現状維持のまま、待ち続けていたから……恋の神様、これくらいの儚い恋人気分を味わっても良いですか。

「センパイは……長い髪と短い髪の女性、どっちが好みでしたっけ？」

忘れたふりをして、自然に問いかけてみる。

「ん？　やっぱり髪が長くて大人っぽい子が好きだなや」

「えへへっ、そういえばそうでしたね！　エミリィセンパイみたいな髪に憧れるなぁ」

悪戯に笑い、私は自分自身の襟足を指先で撫でた。昔はもっと長かったのになぁ……と、こっそり哀愁に浸りつつ、私たちは身を屈め、中学生に擬態。駄弁りながら雪と戯れた。

お互いが制服を着て、青春時代の余韻に意識を預け、過ぎ去った時間を巻き戻す。

今なら、恋人に見えるかな。クリスマスに二人だけのスノーランタンを作っていれば、特別な間柄だと勘違いされるよね、きっと。

今日の三雲雛子は、世界一可愛い。だって、恋をしているんだもの。

こんな後輩を独占できるという光栄を、センパイは嚙み締めてほしいな。しかも、独身で彼氏なし。これから先、正清センパイより素敵な男性と付き合ったとしても、嫉妬や文句は受け付けません。

「おっし！　そろそろ火を点けるべさ！」

共同作業で作った、一つだけのスノーランタン。銀のオブジェに臙脂の炎が灯されたとき、照らし出される恋煩いの女は――共有した美しい世界に、幼かった記憶に、おぼろげな炎と共に消えゆく初恋の季節に、ただただ、酔いしれた。

終わらせられる。今なら、私を縛り付けていた〝初恋〟という鎖を、断ち切れる。

「センパイ！」

言うんだ。ずっと最深に隠していた想(おも)いを、告げるんだ。

初恋を終わらせることができたなら、旅名川とは違う遠い町にいこうかな。そこそこの会社に転職して、そこそこの賃貸物件に住んで、センパイよりも素敵な男性と結婚する。

それが……何も壊れない、誰も傷つかない、最善の選択なのに。

「正清……センパイ……」

「おう、どうした？」

センパイの無垢(むく)な瞳に映る反転した私は、酷(ひど)く脆弱(ぜいじゃく)な表情で。

「少し……冷え込んできましたね」

不本意の証(あかし)。私は新しい恋愛を望まず、初恋の延長を無意識に求めているらしい。

「だからコートを着てこいって言ったべっちゃ。それなのに、お前は『お洒落は寒さとの戦いなんですよ～』とか抜かしてよ。そういえば、昔っから薄着だったよな」

呆れたように苦言を呈すセンパイだったが、自分のブレザーを脱ぎ出して、

「へっへっへ、俺の体温を分け与えてやるど！　臭かったらごめんな！」

私の物悲しい背中へ、羽織るように着せてくれた。

　懐かしいな、センパイの中学時代がこびり付いた男臭さ。センパイの家、昼食の弁当、遊んだときの砂埃(すなぼこり)……ポケットには、数十年前の色褪(いろあ)せたポケットティッシュと、どろどろに溶けた飴玉(あめだま)。捨てろよ。タンスの肥やしだったからか、ほんのりと防虫剤の香りもする。そして、おんぶを彷彿(ほうふつ)とさせる体温も、ちゃんと残っている。温かい。

結婚しても、私以外の想い人がいても、センパイ自身は何も変わらなくて。
「……制服デートみたいですね。私は不本意ですけど！」
「年に一回くらいなら、悪くないんじゃねぇ？　エミリィとリーゼは修たちに横取りされちゃったし、俺の相手をしてくれないんだおん」
優しい……大好き。センパイ、大好きだよ。何回も、何回も、惚れ直してる。
「仕方ないですね！　正清センパイみたいな困った人には、私みたいに物好きな後輩しか付き合ってくれませんよ！」
「ライブを一緒に見る彼女がいねぇんだ。寂しい男に付き合ってくれると嬉しいんだげっども」
「うっせーわ！　ぼっちなんかじゃねーわ！　楽器の演奏ができないだけだわ！」
腹を抱えて、お互いに笑いこけた。ダメだなぁ……三雲雛子。
捨てられないよ。捨てられない。何十年経とうとも、この時間が幸せなんだもん。
三百六十四日が傍観でも、未練しかなくても、たった一日だけの幸せのために。
そんな人生でもいいのかなって。
「中学の頃、センパイに都市伝説の話をしたじゃないですか。あれ、デマなんですよ」
「はあ!?　俺とエミリィが結ばれたのは、スノーランタンの奇跡だと思ってたど……」
うわっ……この人、今まで信じてたのか。センパイは純粋なアホだなぁ。
「根拠もない大嘘です。だって……私の初恋は報われませんでしたから」
絶えず舞い降りる結晶を仰ぎ、ぼやきを漏らす。恩恵の無い都市伝説なんて嘘と同類だ。
「お前をフッたやつは、女を見る目がねぇダメンズに決まってるおん。忘れちまえ！」

悪戯に笑んだセンパイが励ましてくれて、妹分の頭を撫でてくれた。
「困ったダメンズなので、早く忘れたいんですけど。ムカつくほど女心を弄んで、たまに格好良くて、子供みたいな笑顔が可愛くて……女を見る目がないですねぇ」
自覚していない張本人に、惚気(のろけ)と嫌味(いやみ)の変化球を投げつけるのが精一杯。
「俺で良ければ、いつでも恋愛相談してけろ。お前のおかげで、エミリィに告白する口実と勇気をもらったんでな。いくら恩を返しても足りねぇべ」
違うよ、センパイ。
私は……アナタの初恋が実らないようにって願ってた。
「照れ臭くてずっと言えなかったけっども、ありがとな！　俺の初恋を叶(かな)えてくれて！」

センパイは屈託のない照れ笑いを届けてくれたけど。
「私の初恋を叶えてくれないセンパイなんて……だいっきらい」
私が返した台詞(せりふ)は、聞こえるか聞こえないかの小さな悪口だけだった。お調子な軽口を叩(たた)いた瞬間、ぼろぼろに泣き崩れてしまいそうだったから。

浮ついていた会場の雰囲気は、がらりと一変。いち早く察知したセンパイが示した指先に釣られ、私もステージに視線を移す。
氷結した景色を両断するムービングの光が左右に散り、無数に散開していたＰＡＲライトも不規則に点滅。ステージを這(は)うフットライトも猛々(たけだけ)しく目覚め、主役を顕著に誘(いざな)った。

『──本日は大雪が降ったにも拘(かか)わらず、お集まりいただきまして、本当にありがとうございます。様々な人たちのご厚意があり、様々な手助けがあって、旅名川・冬フェスの開演を迎えることができました。本当に感謝に堪えません』

マイクを通じて謝辞を述べる後輩くんの声。

『──これから雪がまた降るようですが、皆さんの時間が許す限り、お付き合いしていただけると幸いです。地元の力が作り上げたステージを、心行くまでお楽しみください』

会場のボルテージが上昇の一途を辿(たど)っていた次の瞬間、雑音は綺麗(きれい)に消え去った。

照明器具が全消灯(カットアウト)──地元民が待望した開演の合図となる。

『──クリスマス、わたしは大切な人から一曲のプレゼントをもらいました』

スノーランタンの光だけが膨れる雪原に響き渡るのは、後輩ちゃん……いや『アーティストのＳＡＹＡＮＥ』が、語り掛ける声だけ。

固唾を呑(の)んで見守る観客へ、絵本を読み聞かせるみたいに。

『──この冬は嘘偽りなく幸せで、また来年も遊ぼうって約束をしました。再来年も、五年後も、お爺(じい)ちゃんお婆(ばあ)ちゃんになっても、永遠に巡ってほしい季節になったと思います』

私とは真逆。

冬は、思い出してしまうから、きらい。

『——永遠に結ばれない冬は嫌い……わたしは、そんな人を知っています。初恋を忘れたいのに、クリスマスが来ると思い出してしまう……それでも、初恋相手に喜んでほしい、笑顔が見たい……という理由だけで、地元のために尽力する生き様を、その拗らせかたを、わたしは素敵だと思います。格好良いとさえ感じます』

そんな拗らせかたをしている人がいるなんて、他人事ながら笑えてくる。

『——叶えたい永遠と、消したい永遠。わたしが歌詞に込めた想いを、皆さんに捧げます。それでは、新曲を聴いてください』

ＳＡＹＡＮＥの初恋は、未来にも巡る。私の初恋は、過去にしか巡らない。

相容れない対極の感情を紡いだ冬の詩。それが——

『——Everlasting』

曲名が告げられると同時に、骨組みへぶら下げられたＰＡＲライトが点灯。幻想的な冬の景色へ、五人の姿が映し出された。

我が目を疑う。五人の服装が、私やセンパイと同じで。

ＳＡＹＡＮＥ、後輩くん、エミリィセンパイ、リーゼちゃん、依夜莉さん……全員が旅中の制服を着用し、学生バンドかと見間違えそうなほど。

はっと勘付いて見渡せば、ほとんどの旅中生が制服を着ていた。掘り出した制服や借りた制服なのか、明らかに現役中学生じゃない卒業生も同様の服装。

私は錯覚を起こしてしまう。すぐ隣には制服のセンパイ。私とセンパイが結ばれていた世界線の過去ではないか、と。

聖夜だけの奇跡。明日には消える冬の幻想であっても、センパイが隣に立っているのは、一緒にスノーランタンを作ったのは、紛れもない現実なのが幸せすぎて。

こんな季節は、永遠に来ないと悲観していたから。

「後輩くんめ……粋な計らいをしてくれるじゃん」

バンドメンバーはもちろん、地元民にも根回ししたのは、たぶん後輩くんたちだろう。

持つべきものは、やっぱり可愛い後輩だよね。わたしの屈折した想いまで歌詞にしてくれる女の子もいるし、舞い上がってもいいのかな。

最後に一度だけやってみたかった、制服デートだと胸を張ってもいいのかな。

後輩くんの指を発信源に奏でられるのは、アコースティックピアノの導入。

羽根で擽（くすぐ）るような力遣いなのに、音を味わう器官が鷲摑（わしづか）まれる。彼が鍵盤を撫でるたび、水面（みなも）に水滴を落とされるかのよう。全身の皮膚に、流れる血に、張り巡らされた神経に、快感の痺（しび）れを伴う波紋が波打つ。76鍵をスプリットで使い分けたストリングスやエレピ、ブラス系の音色（おんしょく）も、聴く者たちの感応を抱き締めて離してくれない。

サイズが合わない制服を着ているため、もはや萌（も）え袖のリーゼちゃん。

しかし、萌え袖で隠れた手元は難解な軌道を楽々と描き、小気味が良い付点八分のディレイが、観客の涙腺を煽(あお)って離さない。氷を砕かんとばかりに歪(ゆが)む白玉、ブリッジミュートで繊細に刻んだメロディ。ゴスロリ幼女の六弦が震わす音色は、バラードの透明度をぶち壊さないよう緻密に計算されていた。

これまた、制服姿の依夜莉さん。特にスカート姿が新鮮すぎて、中高生やオジサンたちを魅了している。本人はやや恥ずかしそうな苦笑いだけど、キャッチーなギターリフに重低音を付加するベースは、憂愁を伴うバッキングの邪魔をしない絶妙な隠し味。

引き締まった腕を振り上げるエミリィセンパイ。装飾音符(フラム)からのタム回しという鮮やかなフィルをヘッドに描く。音の谷間を技巧的に、それでいて円滑に繋(つな)ぎ合わせ、見事な橋を架けた。八分、十六分、八分。変化するビートに対応しながら打ち込む冷静な熱情。お淑(しと)やかさと茶目(ちゃめ)っ気(け)、妖艶な大人らしさ。そして、何よりも優しい音。

正清センパイが魅(ひ)かれるのも仕方ないよ。エミリィセンパイは、女性の私から見ても憧れる理想像で、私が真似(まね)したくてもできなかったもの。

それでも、今日だけはセンパイをお借りします。クリスマスを言い訳にして、制服デートをしているのは、三雲雛子の特権だ。

ＳＡＹＡＮＥが静かに口遊(くちずさ)んだ歌詞は、女性視点の悲恋。初恋の人と結ばれ、二人だけの思い出を増やしていた矢先、永遠の別れが訪れる。二人が好きだった季節は——冬。

女性は、雪原を探す。思い出したくない悲愴(ひそう)な別れだったのに、遊んだ雪原を、孤独に探す。もういなくなった好きな人が、幻想でも現れますように、と。

そして……冬が来るたび、消えてしまった人へ告白する。
初恋の感情を取り戻し、忘れないために。忘れたい想(おも)いを、絶対に忘れないために。
瑞々(みずみず)しく濁った視界と、頬(ほお)を滴り落ちる雨模様。せっかく施したアイメイクやファンデーションが水浸しになってしまっても、止めどなく溢(あふ)れ出す嘆賞は収まらなくて。
ずるいよ、こんなの。曲名にも込められた冬のストーリーを、バラードの旋律に投影してしまう。忘れなくていい。諦めなくていい。初恋を義務的に吹っ切る必要なんてない。
二度と叶わない未来だとしても、片思いに消費期限なんてない。一生を賭けて恋焦がれるのは、私の自由なのだから。
耳を塞いだとしても。
ＳＡＹＡＮＥが直接、心に語りかけてくるみたいに。
これが、彼女なりの応援だとしたら、私も少しだけ……前に進まなくちゃね。
無様に泣きじゃくっていた私だけど、古びたティッシュで綺麗に拭き取り、アウトロが終わりそうなタイミングで——ステージに見入っていたセンパイの横顔に告げる。
「三雲雛子は、正清センパイのことが大好きです。たとえ、初恋の矢印が向かい合ってなくても……あなたを永遠に片思いし続けますので、また……髪を伸ばしますね」

ライブ音に掻(か)き消されて相手には聞こえてないだろうけど、私が満足したのだからそれで良し。告白の返事をもらっていないのだから、私は失恋をしていない。チャンスがあるのだ。クリスマスが巡るたびに、何度も好きになればいい。そして、何度も初恋に浸ることができる。一方的に時間を巻き戻し、一年に一度だけ自分勝手に恋をする。

あなたの答えは、絶対に聞きたくない。

私が一人でドキドキする権利だけは……奪わないで。お願い。

狡賢(ずるがしこ)い恋心に気付いても、気付かないふりをしていてね、センパイ。

年上のお姉さんに生意気なサプライズを仕掛けた後輩くんにも、一言だけ物申さないと。

演奏が終わり、次曲への準備中を見計らい、

「傷心の雛子センパイがいたとしても、絶対に惚(ほ)れるなよーっ！」

くの字にした左手をメガホンの代わりに添えて、曖昧な台詞(せりふ)を叫ぶ。

シンセサイザーの前に凛々(りり)しく立つ後輩くんは、当然ながら首を傾(かし)げて困惑していた。

これからも愚痴らせてほしいな。

後輩くんと後輩ちゃんくらいにしか、情けない姿を晒(さら)せないんだよ。

お酒なら雛子センパイが奢(おご)るので、辛(つら)くなったら付き合ってくれると嬉(うれ)しい。あんなに素晴らしい旋律を紡いで、どストレートな歌詞をぶつけやがったんだもん。

私を少しだけ、ほんのちょっぴりだけ、奮起させた責任はとってくれないと。

時計の針が午前零時を指せば、クリスマスが終わり、主役ではなくなる。
着ている制服（ドレス）が、ただの衣装（コスプレ）に様変わりしてしまう。
シンデレラ気取りの拗らせ女は、あと数時間もすれば傍観者の妹分に戻るけど。
雨模様の泣き顔は、みっともない。奇跡の終わりは、快晴の笑顔で迎えよう。
私の〝現状維持〟は、一方的な青春の延長戦。

髪を伸ばし始めた三雲雛子は恋する少女。
冬に恋焦がれる一人ぼっちの初恋を始めることにするね。

エピローグ

人工的に焚かれた炎が、雪原の中心に燃え上がる。スキー場経営者の許可と協力を得た俺たちは、四束ほどの薪を組み上げ、着火剤を用いて火種を作り、躊躇なく着火。人間の背丈よりも高い猛火の柱が、夜空に昇ったというわけだ。

キャンプではないが、キャンプファイヤー。スノーランタンフェスではやらない事柄でも、これは勝手なイベントなので、打ち上げも派手にやらせてもらう。

旅名川・冬フェス……これだと、字面が平凡すぎて味気無い。

TABINAGAWA Everlasting Snow。これが正式名称となった。

地元民が数十人ほど残ってくれたので、運転手じゃない人は酒を飲んだり、家族連れは後夜祭みたいに炎の周囲でフォークダンスを踊ったりしていた。

「みなさーん、できましたよぉ♪　結構熱いので、フーフーしてから食べてくださいねぇ」

皆を呼ぶ穏和な声の主はエミ姉。

声の方向には簡易テントと長方形の折り畳みテーブルがあり、エミ姉、ウチの母さん、鞘音の母さん、エミ姉ママという美人妻の四名が並び立つ。制服姿なので人妻感は普段よりも控えめ。若作りなコスプレイヤー感が際立つ人妻たちは、カセットコンロに乗せられていた大鍋を、おたまで掻き混ぜていた。

絶えず靡いている濃厚な湯気に釣られ、簡易テントに続々と集う地元民。拡散した味噌の匂いを手繰り寄せるように、俺と鞘音も配膳待ちの列に並ぶ。

「母さんが切った具材、ニンジンとゴボウでしょ？　切りかたが大雑把(おおざっぱ)だし」

「いちいち、うっせーよ。母のまごころに感謝しながら食え」

美人妻たちが作った芋煮を、母さんが紙椀(わん)に取り分けてくれた。安い紙椀に浸透した蓄熱を、凍(い)てついた素手で受け止めれば、薄紫に澱(よど)む指先が火照(ほて)っていく。

あ、あったけぇえええええええええええ……ほわぁああああああ……。

猫舌なので息を吹きかけ、赤味噌と肉・野菜の旨味(うまみ)が溶け込んだ汁を啜(すす)った途端、身体(からだ)を流れる微熱のさざ波。体内に籠った熱源が、氷点下近い外気温の抱擁を撥(は)ね除(の)ける。

地元民は芋煮を突(つつ)く割り箸を休ませず、幸福の溜(た)め息(いき)で美味(うま)さを表していた。

「……修(しゅう)の提案には驚いたけど、たまになら芋煮会も悪くないね」

鞘音も芋煮の汁を堪能し、慎(つつ)ましい一息。ほんのりと微笑を浮かべ、満足感を隠さない。

俺は『打ち上げを芋煮会にしたい』と提案した。つい先日、母さんと芋煮を食べた出来事が発端。地元の農業と畜産で育った食材をふんだんに使い、地元の人々と芋煮会をすれば、楽しそうだと思った。地元農家と交渉し、頭を下げ、快く食材を提供して頂いたのだ。

配膳が一段落したエミ姉は、小学校のママ友たちと賑(にぎ)やかに立ち話。

ウチの母さん、鞘音の母さん、エミ姉ママが、スキー場から借りたビールケースに腰掛け、芋煮を肴(さかな)に雪見酒を始めた。エミ姉のスペア制服を借りた故に、萌え袖状態のリーゼだったが、ゆっくり食事もできないほど、同級生に囲まれて賞賛や喝采を浴びている。

「お前ら！　リーゼは疲れてんだから休ませてやれよ！」

「陽介（ようすけ）くん、いっつもリーゼちゃんとケンカしてるくせにぃ〜」

「う、ぅるせぇ！　オレだって、たまには優しいところもあるんだっつーの！」

同級生と口論する陽介……相変わらず素直じゃない。ライブ直後のリーゼを労（ねぎら）うべく、周囲をうろうろと彷徨（さまよ）ってたのだが、同級生に先を越されてしまって焦ったみたいだ。

「おうおう！　もっと大きくしてやろうぜ！」

「そうですねぇ！　ビッグなサイズの胴体にしてやりましょーっ！」

新雪を踏み固める低音と、騒ぎ声がやかましいのはアラサーの二人。トミさんと雛子（ひなこ）先輩が、制服姿で雪玉をごろごろと転がす。もしかしなくても、雪だるまを作っている。

天気予報の通り、次第に天気はご機嫌斜め。まだ本降りではないが、突っ立っているだけで、頭の天辺（てっぺん）や肩が牡丹雪（ぼたんゆき）で白く染まってしまう。それでも、明日は日曜日。各々が風邪など恐れず、残り数時間のクリスマスを過ごしていた。

「……修はフォークダンスを踊らないの？」

「俺は遠慮しておくよ。ここで温まりながら、皆を見ているだけで楽しい」

「……そう。わたしもここにいる」

三つ並べてベンチ代わりにしたビールケースに、俺たちは腰をやや丸めながら座っていた。すぐ隣には、もちろん鞘音がいてくれて。

目の前で視界を不鮮明に遮るのは、薪を情熱的に燃焼させる荒れ狂った炎。夕焼けとはまた違うオレンジの発光が、俺たちに同様の輝きと心地良い暖を分け与える。

「中学の運動会では踊ったよな、フォークダンス。俺とお前でさ……ぎこちなすぎるステップ踏んで、観覧してた母さんたちに笑われたっけか」
「……あれは修が下手くそだったの。わたしは完璧だったわ」
「いやいやいや、お前が『基本という概念に縛られたくない』とか言い出して、アドリブのステップを踏み出したからだろ。俺のほうが完璧だったからな」
「……そんな発言は覚えてない。わたしはもっと普通な子だったはずなの」
精神年齢が中学生の二人。くだらない責任の押し付け合いが、五分ほど続いてしまう。
「ほっほっほ、桐山さんは普通の子ではなかった気がするねー」
いつの間にか隣に立ち、愉快に笑い飛ばしたのは教頭だった。たまたま後ろを通りかかり、俺たちの話が聞こえていたらしい。
「やっぱり教頭先生もそう思いますよね！　中学の鞘音は変な子でしたよね！」
「変な子……というよりは、常識に縛られないというか自由だったねー。教師陣は結構苦労してたんだけどさー」
「……その節はご迷惑をおかけして、大変申し訳ありませんでした」
今さら反省した鞘音が、教頭にぺこりとお辞儀。教頭は「別に気にしてないからー」と、穏和な口調で宥めた。
「夜も遅くなってきたし、学生たちはそろそろ帰らせるよー。今日は肩や腰が痛くなるくらい楽しませてもらったー」

地元の観客と一体化した教頭は、血管が浮き出た細腕をぶん回したり、首が圧(へ)し折れそうなヘドバンをしたりと、激しい曲では大暴れしていた。

まだまだ長生きするぞ、この人は。音楽が絡むと人格が変わるもんな。

「俺たちのほうこそ、本当に助かりました。教頭先生にはお世話になりっぱなしで……感謝してます」

「いいよいいよー。僕も好きでやってることだからー。また、何かあったら遠慮なく相談してくれー」

教頭や引率の教師たちは、小中高生を引き連れて去っていく。時刻は午後九時を疾(と)うに過ぎているため、ここから先は大人の時間なのだ。

「おいおいおい、杉浦(すぎうら)ァ。アタシへの挨拶を忘れてんじゃねーのかァ？」

「うわぁ……こうなるから早く帰りたかったのにー。松本(まつもと)君、桐山さん……た、助けてー」

逃げ遅れた教頭が、ウチの酔いどれ母さんにガッチリと捕獲されてしまう。

定年間近の老人では逃げられないと思われる腕力で肩を抱き、怯(おび)えた子羊と化した教頭を美人ママ会に連行していく。

俺と鞘音は、見て見ぬふり。すまない、教頭……松本家の女王には逆らえない。忙(せわ)しなく騒々しい空間もあれば、静かな時を有意義に過ごす者もいる。

松本修と桐山鞘音は後者。沈黙の中に一つ二つ、他愛(たあい)もない会話を交え、二人で同様の景色を眺め、誤差の無いタイミングで微笑(ほほえ)む。

それだけなのに、渇望しない。恋心が万遍なく満たされていく。

「よーっし！　第二回、依夜莉（いより）姉さんと腕相撲して勝ったらほっぺにキッス大会、始めるどぉおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！」

打ち上げ開始から二時間も経（た）つと、参加者のテンションも異常な方向へ。

あったま悪そうな大会が、トミさんの一声で再開されるみたいだ。

「かかってこいや、エロオヤジどもがァ！　全員、容赦なく返り討ちにしてやるぜ！」

ライブ前のときは嫌々だったのに、現在のほろ酔い母さんはノリノリなんだよなぁ。

近所のオッサンにキスする母親というのも、ビジュアル的に悍（おぞ）ましいから、ウチの母さんは勝ってくれないと困るが。

「依夜莉姉さん……もう一回……もう一回だけお願いしゃす！　制服の依夜莉姉さんにキスされるのが、子供の頃からの夢だったっす！　今日しか叶（かな）えられねえんすよぉ！」

「いいぜ、正清（まさきよ）。腕が圧し折れても責任はとらねぇからなァ！」

母さんとトミさんの試合が白熱しているのを、俺と鞘音は白い目で受け流す。特にトミさんの夢が、しょーもなさすぎて……呆（あき）れ笑いを禁じ得ない。

「はあ、あんなに張り切っちゃってさ。男ってバカだよね～」

同じように呆れ眼（まなこ）を隠さない雛子先輩が、俺たちのもとへ。派手に盛った髪、気合いの入ったメイク、着崩した制服のギャル容姿なので、見慣れるまでに時間を要すだろう。

普段の社会人な雰囲気とは違い、こっちの雛子先輩も魅力的というか……近寄られると、顕著に動悸（どうき）がする。

快美な香水が鼻腔（びこう）を撫（な）で、男の本能をこれでもかと擽（くすぐ）られた。

「男という性別だけで一括り（ひとくくり）にしないでください。俺は腕相撲に参加してませんし」
「それは自分の母親だからでしょ〜？　エミリィセンパイと腕相撲だったらどうする？」
「……………………参加しませんよ」
「……修、どうして即答できないの」
やや考え込んだ男に、鞘音がきっついジト目光線で燻（いぶ）ってきた。雛子先輩の質問が意地悪すぎるんだよ。こんなの……健全な男子ならね、迷うよね。
「この町はさ……みんなが温かくて、いいところだよね」
「俺も、そう思います」
たはは、と微笑を溢（こぼ）した雛子先輩は、轟々（ごうごう）と滾（たぎ）る猛火を瞳に映す。
「ほんのちょっとだけ〝おとぎ話の後日談〟を聞いてほしいな。三つ目の後悔の話を」
そう言うと、雛子先輩は仁王立ちしたまま、ストロング系の缶チューハイに口を付ける。
ごくり、ごくり。喉を数回鳴らしたあと、靄（もや）がかかった白い息を牡丹雪に混ぜた。
「ただの傍観者となってしまったひよこにも、最初で最後のチャンスがありました。それは、高校三年の冬……雪だるまが、雪うさぎと別れるかどうか、悩んでいたのです」
知っている。最も信頼する兄貴分に聞き知らされた。その人は実家の農家を継ぐため、そして相手の夢を邪魔しないために、潔く身を引こうとしていた時期があった。
「ひよこは、ひたすら迷って……打算的な思惑も過（よぎ）っていたけど、背中を押してあげる道を選択しました。苦悩を断ち切った雪だるまは、雪うさぎに結婚を申し込んで、二人は幸せに暮らしましたとさ。めでたし、めでたし」

ひよこは雪だるまにエールを送り、消えかけた恋に火を灯(とも)した。別れるように促せば、ひよこと結ばれる希望が芽生えたかもしれないのに。

誰も傷つかなかった〝現状維持〟の結末を回想しているであろう雛子先輩は、とある一点を遠い目で見詰める。

「横取りなんて……できないよ。あの二人……いえ、三人の笑顔を見てたらさ……未練はあっても、後悔はないって……今この瞬間なら思えるかな」

薄倖(はっこう)な眼差(まなざ)しの先には、中央の炎を周回するようにフォークダンスを踊っているトミさん、エミ姉、リーゼの三人家族。九年前のひよこが関係を壊していたら、一家の笑顔は存在していなかっただろう。振り向かせるのではなく、背中をそのまま押してあげた。

ひよこが選んだ未来は、いずれ後悔をしないために受け入れた未練。

「後輩くんたちはさ、どうしてひよこに手を差し伸べてくれたの？」

「俺は……この町に、地元の人々に救われたんです。自分の人生すら未(いま)だにあやふやですけど、今度は俺が……恋に苦しむ誰かのために尽くしたかった。それだけです。過ぎ去った時間は巻き戻らないけど、取り戻すことはできると思うから。俺が……そうだったから」

「やだな……素敵な後輩くんに出会っちゃった気がするぞ」

「大したことはできませんでした。俺にできたのは、みんなに頭を下げるくらいで」

卑下する後輩の肩に乗せられたのは、悴(かじか)んで赤らむ先輩の手。

「いいや、大勢がキミに動かされたんだと思う。センパイとか地元の人も言ってたよ？　後輩くんは地味な雑用を黙々とやってたって。大量の野菜や調理器具を準備したり、冷たい水で洗って皮を剝(む)いたりさ。イベント全体の用意と進行を仕切ったのもキミでしょ？」
「俺は天才側じゃないので、トミさんと雛子先輩を手本にしているだけです。それに、その情報は少しだけ間違ってますね」
「……修は〝黙々〟とやってないです。『野菜の段ボールが重い』とか『水が冷たすぎて手がもげそう』とか『そもそも冬は寒すぎ』とか、小声での愚痴も多々ありました」
「ふふっ……あはははっ！　さすがは元ニート！　それでこそ、ダメな私の後輩だ！」
鞘音の補足説明を受け取った雛子先輩は、俺の肩をポンポン叩(たた)いての抱腹絶倒を返す。
「一日だけでも中学時代に戻れたのは、贅沢(ぜいたく)すぎる幸せだったよ。夢なら醒(さ)めないでほしいなぁ……って、ひよこは嘆いてるかもね」
ひよこを語るときは、あくまで第三者目線なのが往生際の悪い先輩らしい。私はまだ負けてない。告白の返事がもらえてないから。
それが、終わりなき初恋(Everlasting)。誰も傷つけない、傷つかない、一方通行を拗(こじ)らせた青春。
「永遠に結ばれるなんて嘘(うそ)っぱちだと思ってたけど、憐(あわ)れんだ神様が……いや、キミたちがクリスマスのお情けを与えてくれたから……少しだけ、信じてみようかな」
雛子先輩の目元は少々腫れていたけど、とっくに泣き止(や)んだ表情は晴れやかで。
「大抵の初恋は実らないものですよ。俺もそうでした」

イギリス人お姉さんに抱いた初恋は、どこかの恋敵に攫(さら)われてしまった。

「でも……いずれ、初恋の相手よりも好きになれる人が現れます。それまでは、初恋に縋(すが)るのも悪くないんじゃないですかね」

「そんな人、現れるかなぁ。私の好みは一つ年上で、お兄ちゃんみたいで、短髪の元ヤンで、自称ワイルドイケメンで、黒いワンボックスの車が好きで、ヒップホップが好きで、長い髪の大人っぽい女性が好きで、デリカシーが無くて、よく笑ってくれて、喋(しゃべ)りかたが訛(なま)っていて、困っていたら助けてくれる……そんな自動車工場勤務のお気楽バカ男だよ？」

「……好みがピンポイントすぎて、憎たらしい顔が思い浮かぶんですけど」

鞘音の鋭いツッコミ。俺と雛子先輩が吹き出し、腹筋が割れそうなほど笑う。

困った先輩だ。拗らせかたが手遅れで、末永く片思いを続ける予感しかしない。

「今日は……ありがとね！　ウチの爺(じい)ちゃんが車で迎えに来たし、一夜限りのシンデレラは、そろそろ村娘に戻りまーす」

冗談めいた軽口でお茶を濁した雛子先輩は、残りの缶チューハイを一気飲み。

お役御免とばかりに、左手をひらひらと振りながら歩き出す。

「明日からの三雲雛子は、他人の恋路を応援するお姉さん。いっぱい、いっぱい恋しなさい、可愛(かわい)い後輩たち。メリークリスマス！」

雛子先輩なりの粋な後押しを置き土産に、遠ざかっていく小柄な背中。次第に炎の明かりが届かなくなり、彼女の姿を照らし出すものは何もなくなった。

トミさんと雛子先輩が作った雪だるまの頭頂に、ちょこんと置かれた雪ひよこ。正面から抱き締め合うことはできないけど、恋人より近い距離に、ひよこはこれからも——

俺も、鞘音も、当たり障りのない同情や励ましはしない。苦悩した雛子先輩が導き出し、最終的に受け入れた後日談を見守っていくだけ。そのうえで、先輩に過度な心配や叱咤(しった)をされないよう、後輩の二人は〝ちっぽけな夢と等身大の日常〟を育んでいけたらいいな。

「鞘音、一緒にスノーランタンを作らないか？」

重い腰を浮かし、雪面へと屈(かが)み込んだ俺が、鞘音に向けての手招き。

「……うん。いいよ」

淡泊な一言を頷(うなず)きに添えて、鞘音も正面に屈む。幼稚園児みたいに雪を捏(こ)ねたり、ぺたぺたと押し固めたり。

普通の円筒では物足りないから、造形を拘(こだわ)ってみる。

「鞘音はさ、スノーランタンの都市伝説を信じる？」

雪を地道に押し固めながら、雑談混じりに問いかけてみる。

「……信じない。そこまでロマンチストじゃないもの」

即答。あくまで冷静に透き通った声音。

「……わたしたちの人生は、自分たちで育んで、もがき苦しみながらも足掻(あが)いて、お互いの想(おも)いを重ね合った結果だと確信してる。永遠に結ばれる未来は、自らの手で掴(つか)むものよ」

その通りだ。得体の知れない迷信のおかげにするなんて、俺もご免だね。

「わたしがスノーランタンを作るのは、修との思い出になるから。ただ、それだけなの」

「明日も、明後日も、何年後も……同じ思い出話ができるように、素敵な火を灯そう」

中高生向けの安い都市伝説なんて無関係。俺たちが楽しい。二人の距離感で過ごす〝恋人の時間〟が大切だから、人目も憚らずに惚気て、雪のオブジェを積み重ねるんだ。

十数分後、完成したクリスマスツリー型のスノーランタン。大きさは膝丈に届かない程度だけど、空洞に仕込んだキャンドルに火を灯せば――俺たちの顔に、ぼんやりとしたオレンジ色が差す。鞘音の瞳に反射した淡いハイライトは、彼女の美顔を端麗に惹きたてた。

惜しいな。左側の世界が鮮明だったら、キミの綺麗な微笑をもっと賞玩できるのに。

「……初恋は実らないらしいけど、わたしの初恋は叶ったの。修の初恋がわたしじゃないのは、少しだけ不満だけど」

仄かな愛情と嫉妬が垣間見えた鞘音へ、許しを請う苦笑いを返す。

「……来年も一緒に火を灯してくれるって約束すれば、わたしは許してあげる」

「ああ、約束する。来年も二人で――」

鞘音が差し出した右手の小指に、俺は右手の小指を結ぶ。手袋を外した素手は凝り固まり、軽度の霜焼けで赤らむ。

それでも二人の体温を分かち合えば、冷たく悴むことはなかった。ずっと結んでいたいけど、お互いが名残惜しそうだけど、指を切らないと約束は交わせない。

「……指切った」

――子供っぽく鞘音が囁いたのを合図に、そっと、小指の体温が離れた。

メリークリスマス。お互いの視線で酌み交わし、終わりかけた聖夜へ祝杯を捧げよう。

午前零時に近い時間帯――クリスマスが、もう間もなく終わる。
睡魔を同伴した瞼が、自分の意思に反してきた。ライブ後は痛快な疲労感に支配されていたものの、暖炉にも似た焚き火の温もりも相まって、身体と脳が睡眠を求めている。
「……修、眠くなってきたの？」
「……ちょっとだけ、疲れたかもしれない」
うとうと。頭部が重力に引かれそうになり、瞳も虚ろな俺を気遣ってくれる鞘音。トミさん一家や母さんたちの仲睦まじい声が、快然とした子守唄になり誘われてしまう。
「……一緒に帰る？　わたしは車で来てるし、お酒も飲んでないから」
「いや……まだ帰りたくないな。もう少し……このままでいたい」
せめて、クリスマスが続いている時間は、思い出の詰まった制服姿の恋人と。
「……わたしに寄り掛かってもいい。修は頑張ったから……特別ね」
「すっげぇ嬉しい。それじゃあ、お言葉に甘えようかな」
彼女からの素敵すぎる提案を、無下に断る彼氏はいない。右隣に腰掛けていた鞘音の引き締まった太ももへ吸い寄せられるように、俺の上半身は躊躇なく折り曲がる。
「……そこじゃないの。貸すのは肩のつもりだったのに」
俺は欲張りなので、膝枕がいい。季節的に生肌ではないけれど、ストッキング越しに伝わる柔軟な弾力。冷たく凝り固まった右頬に、じんわりと浸透する完美な微熱。
一秒、一秒……機械的に過ぎていく時刻は、零時までのカウントダウン。俺は睡眠欲に従い、関節の強張りを解き、ゆっくり、ゆっくりと、両瞳を重い瞼で覆い被せた。

「鍵盤の音色……どうだった？　鞘音が褒めてくれるくらい……弾けてたか……？」

もう、瞳を閉じている。押し黙った鞘音が、どういう表情をしているのか分からない。

「……うん。修はいつだって、わたしを支えてくれてる。修が一緒にいるだけで……わたしは気持ち良く歌うことができたよ」

鍵盤の音色に関しては、触れてくれない。俺は、ちゃんと弾けてたのかな。

徐々に声量が下降してしまい、はっきりと聞き取れなくなっていく。俺が睡魔に支配され始めたのか、鞘音の声が顕著に擦（かす）れているのか、もはや定かではない。

しかし、聖夜の静寂を可憐（かれん）に汚す僅かな息遣いに――

「だから……いなくならないでください。お願いだから……」

潤みきった暗愁の〝ひとり言〟が、ひっそりと滲（にじ）んでいた。

環境音の囀（さえず）りすら、自分の感覚から離れる。意識の外側に、流出していく。

蓄積した疲労を溜（た）め込んだ身体が、一時的な眠りにつこうとしている。

…………。

…………。

「……もう、寝たの？　修、起きてる……？　寝てる……よね？」

これは、鞘音の声。遠慮気味に、囁きかけている。

「今度は、修のほうから……してね」

左頬に、微(かす)かな感触。

瑞々(みずみず)しいものが、ふいに触れた――気がした。

たぶん、雪粒ではない。触れられた頬に、ほのかな熱が残されていたから。

離れかけた意識が戻ってくる。思わず顔を上向かせると、可愛らしくて優美な顔が数センチの距離に。膝枕していた鞘音が上半身を屈め、淡紅色の何かを添えていたらしい。

「……起きてるなら言って。ずるい」

心なしか、顔を赤らめながら不機嫌になってしまう。

照れ隠しが得意な彼女のしなやかな髪を、櫛(くし)で梳(と)かすように……そっと、撫(な)でた。

「ごめん。お詫(わ)びに……今度は、俺のほうからするよ」

「……うん。それで、おあいこ」

先程とは、正反対。

鞘音が瞳を閉じ、静かに迎え入れてくれて。

「鞘音……好きだ。初恋よりも……愛してる」

「わたしも……修のことが、ずっと好き」

穏やかに、確実に、惹かれ合う。お互いの唇も、恋人の欲求に従い引かれ合う。

十二月二十五日。

午前零時、二秒前くらい。

銀雪の大地と、蕭々（しょうしょう）たる淡雪が映える深夜に――

俺たちは、初めてのキスをした。

あとがき

恋愛は告白してフラれるより、想いを告げずに諦めるほうが多いかもしれません。
度胸が無かったり、相手には想い人がいたり、話題のネタにされるのを嫌ったり、今の関係が壊れることを恐れたり……告白を諦める理由は、人それぞれです。
雛子のように〝現状維持〟を選ぶというのは、思い返すと私も結構ありました。怖いんですよね。今まで通りの関係ではいられなくなるかもしれないので。
キミの忘れかたを教えての二巻は、そういった感情を率直に表現したいと思ったのです。
過去に縛られ、もがき苦しみ、逃げ続けた果てに摑んだ恋物語が一巻だとしたら、二巻は現状維持に留まり続けた失恋未満の後日談。三雲雛子という女性が長年に渡り抱えていたものを、胸の中に押し殺したままの初恋を、冬という真っ白な季節に描きました。
雛子は修たちにとって陽気な先輩、正清たちにとっては妹分の後輩という二面性を持つ万能な存在で、様々な表情や感情を表してくれるため気に入っています。
正直、本文を書いているときは心境がきつかったです。一巻が〝取り戻した青春〟という救済のエピローグへ向かうのに対し、二巻は〝完全に終わっている初恋の結末〟までを描写するので、雛子に感情移入してしまい、書き進める手が重たくなりました。
しかし、正清とエミリィの恋物語や雛子の心情を、すべて書くにはページが足りない。
今回は雛子視点の回想を一欠片ほど見せましたが、エミリィを含めた三人が過ごした学生時代を三百ページで

書きたい……確約はできませんが、もし機会がありましたら、三角関係にも満たなかった過去編を、いつかお届けできればと思っています。

もちろん、修にも少しだけ成長がありました。正清に嫌々連れ回されていた男が、周囲の人間を巻き込む側になろうと奔走する姿は本当に地味なんですけど、恋人の鞘音と育む不器用な恋模様と共に見守っていただければ幸いです。

そして、今回も素敵すぎるイラストに感銘を受けてばかりでした。フライ先生によって鮮やかに彩られた世界に魅了されてしまいます。冷静に語っていますが、イラストが届く度に「あっあっ……フライ先生……す、すごいよぉ……」と拝んでます。

この作品は登場人物の平均年齢が高いため、制服を着ればコスプレになるうえ、学園ラブコメのような未成年特有の甘酸っぱさはありません。

それでも、地元の仲間と酌み交わして駄弁ったり、二度と戻らない過去を嘆いて懐かしむ日々が『大人の青春』として読者さんの瞳に映ってくれますように。

スノーランタンは火を灯すと綺麗なので、興味がある方はぜひ作ってみてください。

まだ、物語はエンディングを迎えていません。

青春のロスタイムが終わる——その瞬間まで、書き続けられることを願っています。

あまさきみりと

電子書籍特典　書き下ろし短編

『エミ姉の部屋にお泊りする男』

俺の初恋はエミ姉だが、二十歳になった現在は『心から信頼できる美人お姉さん』という存在に落ち着いていた。

だから、こうして堂々とエミ姉の実家に入り浸っても罪悪感は皆無だし、エミ姉の部屋で二人きりになっても許される。鞘音が作詞をしている間、俺は編曲を手伝ってもらっているだけ……怪しい行為は何一つとしてないのだ。

「ワタシの部屋は防音だし、深夜でも気にせずに作業できるからねぇ♪」

俺を弟のような存在として接するエミ姉は、無防備な台詞を平然と言う。

「え……？　泊まってもいいんですか⁉　エミ姉の部屋に⁉」

「んっ？　修くんが乗り気なら徹夜でも良いよって意味なんだけどぉ、それは泊まるってことになるの？」

首を傾げるエミ姉が素敵すぎて。

「男女が密室で一夜を過ごすのは、お泊りです。ああ、テンション上がる。楽しみだぁ」

「修くんが興奮する気も分かるなぁ。修学旅行の夜とか、無駄にワクワクしたよねぇ」

理解しているようで分かってない！　その純粋さが可愛いなぁ！

恋愛感情はないとはいえ、やっぱり俺の胸は顕著に高鳴るし、異様な憧れがあるのは子供の頃から変わっていないらしい。

今日は昼間から作業していたのだが、夜九時を回ったあたりにリーゼが睡魔に襲われ、トミさんの新居へ帰宅した。

正真正銘の二人きり。いや、厳密には一階にエミ姉の両親がいるけどさ。

部屋の隅には、エミ姉が結婚するまで使用していたベッドもあるし、謎の動悸が収まらねぇ……。卑猥な妄想は自重するが、もしエミ姉がうたた寝していたら、ベッドに寝かせてあげよう。俺も大人になったんだ、という紳士な一面をエミ姉に見せたい。

「修くんもやる気満々みたいだから、今日は徹夜で作業しようねぇ！」

「うっす！　真面目に作業するっす！」

鍵盤に向かい、俺は黙々と音作りに打ち込む。隣にいてくれるエミ姉にアドバイスをもらったり、良いフレーズが出来たら褒めてもらったり。

数年の時を経ても変わらないエミ姉の優しさ、家具の配置、部屋の香り、エミ姉が使う愛機の弾き心地。それらが音楽教室に通っていた頃を彷彿とさせ、音色に没頭してしまう。

…………。

ゆっくり瞳を開けると、天井の壁紙。カーテンから漏れる射光が眠気を吹き飛ばす。

昨晩はエミ姉と二人で作業していて……深夜に眠くなってきて。

記憶が途切れる寸前、俺は弾いていた鍵盤に突っ伏していた。少しだけ休憩するつもりだったのに、そのまま熟睡してしまうとは。

むくりと上半身を起こし、ようやく気付く。

エミ姉のベッドに寝かされてるじゃん！

どうりで心地良い香りと肌触りに包まれていると思ったんだよ！

「おはよう、修くん。温かいスープを作ったんだけど、修くんも飲む？」

ベッドサイドにはマグカップを持ったエミ姉が座っており、微笑んでいた。

この人には大人になっても敵わないな——心の中で苦笑し、コーンスープの湯気が揺らめくマグカップを受け取った。

著者　あまさきみりと

忘れられない初恋、伝えられなかった想い。
あなたにはありますか？

イラスト　フライ

東京都在住。漫画家、イラストレーター。
書籍の挿絵やキャラクターデザインを中心に活動中。

カバーイラスト／フライ
カバーデザイン／百足屋ユウコ＋たにごめかぶと（ムシカゴグラフィクス）



あ-10
3-2

キミの忘れかたを教えて2

あまさきみりと

角川スニーカー文庫

　好きな人と永遠に結ばれる。そんな迷信が伝わるスノーランタンフェスに参加することになった修たち。フェスを企画してくれた三雲さんは過去、その迷信に想いを寄せた一人で……。

　奏でる音楽が再び奇跡を起こし、様々な気持ちを紡ぐ――。

「才能を持った幼馴染の女の子から無様に逃げ出した経験を持つ主人公の境遇が、凡人として他人事に思えず惹き込まれました。――星野流人（ほしの）（読書メーター）」「どんな形であっても無意味な時間はなく、未来は分からなくても儚い優しさが詰まった読後感は素敵。――みかこ（読書メーター）」

　一巻発売後も多くの感動の声。大人の青春物語、第二巻。

キミの忘（わす）れかたを教（おし）えて２

【電子（でんし）特別版（とくべつばん）】

あまさきみりと

角川スニーカー文庫

2019年3月1日　発行

本電子書籍は下記にもとづいて制作しました
角川スニーカー文庫『キミの忘れかたを教えて2【電子特別版】』
2019年3月1日　初版発行

発行者　三坂泰二
発行　株式会社ＫＡＤＯＫＡＷＡ

ＫＡＤＯＫＡＷＡ　カスタマーサポート
［WEB］ https://www.kadokawa.co.jp/
（「お問い合わせ」へお進みください）


BOOK☆WALKER